

910.26-Y67-2aウ



1200500754515

0.26
Y67
2a



始



23. 1. 31

25389
9



Q10.26
Y67
2a

矢崎
彈著

の
女性

若い
人
社



17.4.1
01

945
179

まへがき

この書は、明治、大正、昭和の三代にわたる代表的な名作小説にあらはれる女性をたどつて、近代日本における女性の愛と倫理が、いかなる變遷をかさねてきたかを、歴史的にとづけようとしたものである。いはば、文學作品の女性をとらへて描いた女性思想史たらしめようとした。文學が、現實の反映であるならば、小説に反映された女性群像を歴史的にとらへ、それを系統づけることによつて、女性思想史をかたちづくることも可能なはずである。私がそれをあへてしたのは、女性發展の歴史的な具體性をつかみ、こんにちの女性にたいするはげしい毀譽のあらしに答へたいとおもつたからである。

じよつ、こんにちの女性は、國防國家の基礎的な責任の擔ひ手として、總力戰體制の、建設の

エネルギーとして、あらゆる嘆稱と激勵の聲にかこまれてゐる。現實社會では、ふるい因襲のかこみを解いて、女性に國防へ、生産へと、男をしのご活動の舞臺にすゝみつゝある。さうして、かやうな進出が、當然もたらす女性のあたらしい性格が、いちめんでたゞへられながら、他面から、主として男の保守的な感情の反撥をまねきつゝあるといふ、矛盾に遭遇してはゐないだらうか。そのみではない。いつぱんの女性讚美のころが、女性のながく背負はされた否定的な傳統への愛着をたちきれずに、女性の劃期的な前進が、さへぎられるおそれさへなくもないのである。あらゆるものが、さうであるやうに、女性もまた、歴史的発展のいく時代かの繼承と進化の結實として、その生命の特質を展開してゐるのである。女性にも歴史がある。しかも、特筆すべき独自の歴史が。

今日の、女性の性格と傳統、その發展と退歩にかゝはる一さいの課題をとくには、すくなくとも、明治、大正の歴史的變化と成長の來歴に注目しなければならぬ。發展の歴史にかゝはりなく、歴史的現象を突然の疾風や、かるはずみな妄動として理解してゐるかぎりには、こんにちの躍進的な女性の進出も神話的にならざるをえない。いつぱんには、明治大正における女性の先驅的

な運動や、思想のながれは、はなはだいむべき、過失の歴史のやうにおもはれがちである。女性の本質にとり、民族の精神にそむく破綻の憎惡すべき歴史としてふりかへるものすらある。だが、はたしてさうであらうか。

男の本質といふことは、あまりきはだつてはいはれない。しかし、女性の本質、女らしさといふことは、いまま永遠不滅の掟として、女性非難の端々に調子をかくきかれる。女性の本質とは、はたしていかやうなものか、たれがその本質をつくり、たれが、それをまもるやうに傳統づけたのであらう。それは、自然の運命であるといふ、暗黙の肯定のなかで、おほくのあいまいな非難の聲は言葉を濁すであらう。

人間の原始時代からの歴史發展の特質は、まづ自然への抵抗、その征服によつて地球上の覇者となつたことである。そして、あらゆる人間の努力は、その自然的な運命をきりひらき、打開するところに、成長のあけぼのをのぞみえたのである。ひとり女性のみ、ひたすら自然に順應し、屈從してきたのであらうか。

「永遠に女性なるもの、われらを引きて往かしむ。」(ゲエテ)といふ頌歌のかたはらに、「女

なるゆゑに」や、「弱きものよ、汝の名は女なり。」が、いつまでもつきまとふといふおもしろさは、なんと解かれるべきであらう。私は、それらの課題のふしぎを、わが國の世界史的發展をきづいた三代の小説にあらはれる女性を辿つて、彼女らのモラルの變化や愛情の風俗や、それらとのたゞかひを通じて、なんらかの解答をうけとらうとした。劃期的な歴史創造の、今日の女性にしても、かつてみない有史以來の、國民的愛情の共感にゆすぶられる時代の婦人も、過去をひきつぎ、それを擴充する役割をもつてあらはれたのである。けつして、無からの創造に憑かれたのではない。戦争は、彼女らを躍進せしめたといつても、その躍進の基礎のちからは、過去からうけつたへられたのである。革新のたゞまなかにあつて、轉形しゆく歴史のひかりさす日々をむかへて、女性なるものいつばんへの、神祕的幻想が、まだのこりなくふきはらはれたとはいへないのである。これら女性なるものへの、神祕的幻想こそ、かつては女性悲劇のおもなるモチーフであつた。こんにち、それは、しだいに喜劇に轉換しつゝあるとはいへても、その殘滓は、なほも執ねく、女性の前進をはばんでゐるのではあるまいか。

明治、大正、昭和の小説にあらはれた女性は、以上のやうな切實な、女性こんにちの課題を解く鍵として、その思想や、觀念の風俗的、歴史的な發展のなまなましい具體として、悲喜劇の舞臺にたちあらはれる。なにが、悲喜劇の分類をおこなつたのであらうか。彼女らの涙や悦びの聲は、こんにちの女性いつばんの發展にどうつらなるものであるか、過去のなげきは、その犠牲的な涙によつて、こんにちの歡喜となりえてゐるか。みづからの發展と、そのあたらしい歴史的役割のきびしい責任の自覺は、いきほひ、みづからの性格や、環境への凝視をふかめさせるであらう。そのやうな、自己革新の凝視を意義あらしめ、前進の營養たらしめるには、みづからをささへる傳統的性格の來歴を知らずにはゐられないはずである。かやうな考察から、この小さい企てははじめられた。それが、抱負をみたすものであるか、いなかは、讀者諸氏の明敏な批判をまつのみである。

明治女性の歴史的な苦惱は、みづからが、みづからの運命の支配者として生きるために生まれた。そのやうな歴史的理性は、いかやうな因襲と對立しなければならなかつたか。歴史の命じた明治女性の自覺は、はたして女性の成長を、どのやうにうながすものであつたか。みづからを、みづからで形成し、建設しゆく歩みに、めざめた黎明期の女性の苦惱は、また、自己形成を環境に依頼せず、自發的になしとげねばならぬ女性のこんにちへの、教訓のかすかすを含んでゐる。

大正期は、總じて解放された女性の悲劇と、その頽廢の時代であつた。しかし、その頽廢の腐蝕のなかにも、昭和へとつたはる強靱な、女性の生活力と、聰明な知性の芽生えがあつたのである。歴史は、側面的にはすまさない。かならずや、頽廢のなかにつきの發展を、發展のなかにおそるべき停滯の要素をまじへつゝ發展する。そして、昭和の聖代へと、女性の傳統は、しだいに前進的なひかりを注ぎいれてきた。

事變の發展、大東亞の建設のどよめきは、あらゆる舊秩序の崩壊であつたごとく、女性いつぱいの、超絶的な躍進の機會となつてめぐまれた。だが、まつたき躍進は、環境の拍車をうけながら、受動的に耐へることによつてのみなしとげられはせぬのである。かならずや、おのおのの個

人的努力の自發性と、充實した知性の判断によつてのみ、實踐のあゆみはちからづけられるであらう。

この書が、女性のこんにちの前進に、缺くことのできぬ自己形成のいとなみに、なんらかの判断力と營養とをあたへうるならば、さいはひ、それにすぎるものはないのである。

昭和十七年七月

著 者

目次

まへがき	1
序章 回顧(女性史の蘇生)	3
第一章 傳統の悩みから解放へ(明治期)	23
I 黎明期の苦惱	
1 女權擴張と「蜃中樓」	25
2 最後の叫びと「十三夜」	31
3 二つのタイプと「不如歸」	40
4 紅葉の女性と「金色夜叉」	49

5	「婦系圖」と死の抗議	59
6	美はしい滅びと「瀧口入道」	68

Ⅱ 自己形式への歩み

1	名譽の犠牲（「地獄の花」）	75
2	「煤煙」と戀愛の畸形	85
3	愛憎の分裂と「死の勝利」	97
4	「虞美人草」の藤尾	106
5	婦人の自立と福澤諭吉	116
6	獨立への歩み「魔風戀風」	122
7	「人形の家」のノラ	133
8	むすび・「青鞥派」の運動	141

Ⅲ 明治女性の環境と輿論

1	北村透谷の戀愛觀	149
2	開化期の環境と良妻賢母主義	153
3	後期の自覺の性格	162

第二章 解放の悲劇から生活愛へ（大正期）

Ⅰ 教養の悲劇

1	推移の過程	171
2	「律子と瑞枝」の決意	174
3	性格・環境・運命	177
4	美しい時代の浮標「眞珠夫人」	183
5	觀念の敗北	192

Ⅱ 生活の慧知と悦び

1	「あらくれ」のお島の生活力	197
---	---------------	-----

2	環境のちがひと慧知の方向……………	204
3	「つゆのあとさき」の自己喪失……………	208
4	「何が彼女をさうさせたか」……………	213
5	新しい自覺の基礎……………	226

III 解放された犠牲（大正期の省察）

1	因襲の冷笑と愛情の技術化……………	231
2	職業的擴大の結果は！……………	235

第三章 働く慧知と新世代の創造（昭和期）

I 愛情の流浪から眞實へ

1	「寢園」の近代的性格……………	245
2	「眞實一路」の受難……………	255
3	物慾の破滅と「美しき囚」……………	270

4	「假裝人物」の流轉の悲劇……………	282
5	「若い人」における二重心理……………	294

II 歴史の發展と愛情の擴充

1	女性の勤勞的役割の變化（「煉瓦女工」）……………	310
2	「母系家族」の女性像……………	323
3	愛情の計算と技術……………	332
4	躍進する女性像（「東京の女性」）……………	346
5	働く女性の自覺と男性の後退……………	356

III 現代女性の發展と歴史への愛

1	現代女性の特質について……………	363
2	未來への發展の課題……………	370
	あとがき（小説の女性と現實の女性について）……………	377

三代の女性

序章

回 顧

—女性史の蘇生—

永遠に女性なるもの、
我等を引ききて往かしむ。

「ファウスト」(ゲーテ)

求めることもなく生きてつゝましい女の境涯は、望みすくない一生であるゆゑに美しいともいはれてきた。

娘から妻へ、妻から母となつて血族をゆたかな生成にみちびいた女の歴史には、ながい年代にわたつてこの種の讚美がこめられてゐる。むかしから女性が大地にたとへられた理由には、「人間の世代を絶やさぬみのりのたかき土壤」であることよりも、よりうけ身だといふことの暗示が、不知不識の默契として宿されてゐたのではあるまいか。

古代人類のあひだにみいだされる信仰には、土地が一さいの生命の源泉であると同時に、母性もまた、富の源泉でなければならなかつた。婦人を侮辱するものは、すなはち土地を侮辱するものだ、とおもはれた。このことは、おほくの古代宗教のうちで、最高の神々が女性であつたことからもうなづける事柄である。たとへば、エジプトにおけるイヂーダや、ギリシヤにおける最初

の聖者、すなはち古代神の使徒は婦人だといはれてゐる。この婦人の、主權に關する記念物は、ひとり西歐のみならず、東洋でも、おほくの民族的傳説や習俗のなかにいまなほ底ふかく残されてゐる。

しかし、女性にたいするかうした崇拜の觀念といふものは、いかなる環境と生活の地盤とから生れたといふのであらう。

生活資料の獲得を、第一歩からはじめねばならなかつた幼稚な未開人は、暴虐な大自然とたゞかつてその生命を維持するために、集團のおのおのが總力をあげて全體のために協力しなければならなかつた。したがつて、孤立無援なかれらは、知能技術にめぐまれなかつたから、ひたすら集團の總力がより大きくふくれあがることを、つまり、集團の人員がひとりでも多く殖ゑることを祈るのであつた。かやうなとき、血族を殖やす使命を自然からあたへられた女性が、生産の伸びる力を、母性といふかたちで表現し、男子の崇拜、ならびに集團の尊敬を勝ちえたのは當然である。彼女たちはまづ、分娩、育児といふ自然の性能を、直接に生産力の増強に貢献しえたのである。この事情は、今日の國家における國防、生産の増強にかんして母性の價值が飛躍したのと

同様である。しかし、さかのぼつた未開の時代、彼女たちは、そのやうな自然の生理的な使命と、機能によつてのみあがめられたのではない。彼女たちは同時に、生活の創造においても、男子と對等に参加しえたのであり、あるばあひは、女性が民族の生活の指導者であり、すべての采配をふる權力さへもつてゐたのである。

すなはち、男子が手馴れた適切な仕事——狩獵に従事するばあひに、婦人たちは、その性質にふさはしい果實や草根の採取にあたり、あるひは、農耕をいとむといふふうに、原始生活は共同の分擔においていとなまれたのである。このやうな生産の分業的な参加によつて、彼女たちは男子と對等にならぶ生活の擔ひ手であることができ、農耕といふ生活の基礎的ないとなみによつて、家族や集團から特別の席をゆづられてゐたわけでもあつたのだ。

原始時代における農耕技術の發見ならびにその擔當者としても婦人の存在は價値たかきものであつた。それは、播種をかんがへついただけでなく、彼女たちこそ地上における最初の土地耕作者でもあつたといはれる。幼児につきまとはれて狩獵に遠くついてゆくことのできなかつた母たちが、一ヶ月も二ヶ月ものあひだ後方にのこつて、自分や子供を養ふためにさがした植物の噛み

くだいたこぼれが、いつの間にか芽をだしてゐた。穀粒の萌芽する事實を、彼女たちは學んだ。それは、たんに經驗としてではなく、知識としてつかんだ。氏族の歸るのを子をかかへて待ち侘びたこれら母たちは、また火の利用や紡織の技術をも發明した。とほい祖先の祖母である古代の婦人たちは、最初の醫者でもあつた。それは古代の口碑につたへられてゐる。藝術の神も、やはり女神ヘカータとジュアナだとされてゐる。老母たちは古代においては物識りであり、魔法使にもたとへられた。つまりその時代には、男子が狩獵や戰爭といふ筋肉的活動にたづさはつてゐたために、知識といふものは、婦人の手におほくが握られてゐたのである。こゝにも男子たちの婦人尊重の機縁は熟した。しかも、生活創造の主要な擔ひ手が、婦人だつたことが、それを信仰のごとく、いつそう固定させた。

おほくの人々は、人類がまだ蒙昧な状態にあつた過去の時代には、婦人は現在よりいつそう悪い状態のもとにおかれ、その時代の、彼女たちは縛られた奴隷にひとしいものだつたとかんがへる。婦人をして眞に解放させるものは、文化であり教育であつて、文化のたかい國民ほど、女性はよりおほくの幸福と自由な發展のなかに生活できるものだ、といふやうにかんがへてきた。な

るほど、近代文化の進歩や、教育の普及は、女性の自然的性能をいぢおうはたかめ、その社會的活動の範圍をひろめえたにちがひない。しかし、それは、あくまで、いぢおうの程度であつた。ときの文化の傾向が必要とする程度を超えて伸びることはさまたげられた。近代歴史の経過においても、女性はずねに、「女らしさ」といふ限界をわきまへぬことは、人間的破滅を約束され、未來の幸福がとざされることをきびしく暗示した。「女らしさ」といふ形容は、普通男の愛情にそむき、結婚の撰擇に洩れるといふ忠言ともなつてきた。「女らしさ」や、通俗にかんがへられる女性の身心の特異な性能がはたして、女性ほんらいの人間的な制約や天性であつたか、あるひは、男のエゴイズムにながくかしくづくことのみにしたきた習性なのか、そのやうな疑問は、つねにとはれぬうちに否定された。

いつばう、世界史に偉大な足跡をのこす婦人たちのおほくは、いはゆる女らしからぬ存在であつた。また、女性の文化的進出のゆるされた部面では、たえず男の立場からの卑俗な魅力や好奇心にかゝはりなく伸びることはできなかつた。さういふ現象は女優や歌手のごとき、藝術的職能においてのみではなかつた。女性の職業のおほくが、「女らしさ」や「女の天性」といふものを、

最大限に發揮することをもとめながら、その社會的評價は、つねに男子の下位にあつた。いはば、「女らしさ」は、いつも社會的な需要を充分にみたしながら、むくひられかたは、いつも「女なるが故に」低くとぼしかつた。こゝには、おほくの複雑な理由があるわけであるが、ともかく、女性が近代文化の發展のながい道程においても、性別の特徴だけせまく求めたがる傳統の殻からのがれられず、根本的にはひきつゞいて、男の位置より一步退いたところに發展をとどめねばならなかつた。それは、女性が家庭をまもることがおもな役割であり、男にかしづいて内助の功をあげるべきものだといふ觀念が、すべてを規定したためでもあつた。そして、糟糠の妻となり、内助の功をはたし、家を安定せしめるかくれた犠牲的愛情は、個人的には千差萬別の差があるにしても、社會的、一般的にはいかほどの評價をあたへえたであらうか。

これまでの、ながい歴史の過程で、女性は、男の發展の意慾を左右する絶大な力として、それをばげまし、慰藉し、決意せしめるに缺くことのできぬひとつの尊い動力の、みなもととしてたへられながら、それにたいする罵りの聲にもかこまれざるをえなかつた。宗教は、「不淨者世界に罪をもたらし、男を墮落せしめ、……」といひ、あるひは、「外面菩薩、内面夜叉」と形容した。

儒教は、「女子と小人は養ひがたし」であつた。すべて、これら中世的環境でつくられた女性の形容は、文化の進歩とともに、その罵りの怪奇な調子こそ衰へてきたとはいへ、それは男の傳統的觀念へとひきつがれ、かたちをかへ、形容をかへてつたへられた。「女は女らしく」が、文化の發展にともなふ女性の社會的活動のすがたにたえずささやきはされた。こゝにも罵る非難が、温情ある注意にかはつたといふ程度の進歩はあつたかも知れぬ。

有史以來の、文化のたえざる發展のなかにおいても、原始時代からきめられた自然的分業——分娩、育児、主婦の役割のなかにだけ女性の使命をとちこめ、固定せしめることに習俗はきびしい眼をとぎすまずだけであつた。しかも、さういふ自然の分業にのみはげみ、いそしむやうに教化しながら、「女子と小人」の同一視がぬぐひさられず、うけつたへられたかにさへみえた。すべてにおいて、男の生涯と發展を中心として、女性いつばんの批評がおこなはれ、讚辭も罵言も、それをめぐつて男の片側からのみ放たれるのであつた。そして、奇怪にも、女性にたいする讚め言葉と、罵りの聲とは、すべて習俗が彼女たちを強ひて運命づけ、傳統づけたすゑにつくられた獨自な性格にむかつて、あめ、あられとふりかゝつたことである。科學文化の發達も、機械文明

の光明も、「女性なるもの」にたいする原始的な、神祕の幻想を根だやすことはできなかつたのである。彼女たちを、自然の生理的な面にのみとちこめ、たがひにかはす愛と尊敬の対象としてではなく、あたへるものと、うけるものといふきびしい区分のなかで、女性をながめた男の倫理は、文化の進歩とともに改造されつくしたとはいへない。

西洋における同権の思想も、本質的に女性の成長の可能性をうながすこととはならず、たゞ男の功利的見地からの形式的な讓歩にすぎなかつたことは、多くのひとのみとめるところである。眞のいみで、男とともに生活の建設にあづかり、國家の發展につらなるの道も、よくいはれるやうに「内助」といふうけ身なすがたではなく、「うけ」「あたへる」といふ形式の差別においてでもなく、たがひに對等に協力し、たがひに積極的な建設をきそふ合奏的な愛情のなかに、女性の健康な本質の發露も、その幸福な生の充實もうるはしく展開されるのではあるまいか。だが、そのやうな女性の共同愛へのたかまりをさそひ、男のひとへにうけるといふエゴイズムの改造は、たんなる文化や教育の進歩によつて可能であるやうなたわいない性質のものではなかつた。

原始時代の人間は、その知識技能や能力の點で劣つてゐた。劣つてゐることをすら知らない生活が、かれらには満足な世界であり、幸福な人生ですらあつた。にもかかはらず、女性たちは豊かであり、仕合せであつた。男への追従といふやうなことをかんがへたこともなければ、また、かんがへる必要も認めなかつた。いふまでもなくそれは、彼女らが男子と對等に直接の生産にあづかり、主要な生活經營の擔ひ手でもあつたからである。しかも彼等は、ともに樂しかつたし、ともに仕合せでもあつた。さうなると、女性の人間性を眞實に生かすためには、たんにいはれる文化などではなくして、彼女たちのあらゆる能力を自由にふるはせ、彼女らを直接の生産の場に取りこませるところの生活の體制や、經濟の條件が大きく作用することにおもひいたるであらう。すなはち、女性の勤勞が、せまい家事の領域から國民經濟への寄與といふ方向に擴大されたとき、換言すれば、女性が直接に社會の生産的役割のなかにひきこまれるやうになり、社會がまた、女性の勤勞力を社會に有用なものとして評價しはじめたとき、はじめて彼女らは、わづかではあるけれども、人間的獨立の可能性を獲得することができたし、また、みづからを自己の意思によつて

支配しうる心情をも芽生えさせることができたのであつた。しかし、歴史上、このやうな大規模な經濟段階が彼女らのまへに訪れたのは、極くさいきんの現象である。したがつて西ヨーロッパ諸國における産業革命が、その緒につかなかつた以前には、彼女らの社會的存在といふものは、文字どほり籠のかたはらに、つましく己れを殺して一生をおくることにかざられてゐた。幸福にみちたりたと思はれるばあひですらさうであつたし、不幸だといはれる女たちの境涯には、男に寄り添つた生活を想像することさへのぞめなかつたのである。

* 産業革命とは、十八世紀後半からイギリスを最初に、あひついで起つた産業の機械化のことをいふのであり、日本では維新後から、日清戦争にかけての期間に、西洋の機械輸入によつて一應完了したといはれてゐる。

産業革命に特記すべきことは、蒸氣機關の出現であり、それによつて人間の勞働力が機械に敗北し勞働が單純化され、それゆゑに、婦人や小供が産業界に大量に狩りだされた。そのやうな婦人と小供の劃期的な生産への参加は、多くのうれふべき現象をもたらし、健康、風俗、精神生活にかず知れぬ社會問題を提供した。

これは、未開人の生産力が擴大し、複雑な分業的知能が要求されだしたときから、あるひは、生産の形態が、集團から個人の手にうつりはじめた抑々の當初から、女の將來をきびしく運命づけた現象でもあつたのだ。つまり、生産の方法が、まだ素朴低級な農耕の過程にあるあひだは、女性は男子と對等に能力を振ふことができたが、狩獵や牧畜や家内手工業へと擴大された生産力は、女性を直接の生産からひきはなすやうに發展した。と、いふのは、多様な分業的生産には、それにとりまふ知識が必要であつたし、また、物資の獲得や、その手段や方法は、活動的な男子の手にうつり、それらの生産され獲得された物資や、器具は、すべて奴隸とともに男子の所有となつた。もちろん、女子もともに享有したにはちがひないが、彼女らは財産にたいしてなんらの分前をもつことはゆるされなかつた。したがつて、男子はその富に増長して、女子を従服させる位置に匍ひのぼつた。こゝに、人類における最初のエゴイズムがいとふべき萌芽をみせるのである。このやうに、物資の生産と所有の全權を男子が占有するにいたるには、女性自身の生理的本質がそれを助長したことはうたがへない事實であらう。たとへば、掠奪の鬭争に参加できないとか、分娩のために、複雑な生産にあづかれぬといふ理由によつて。しかし、そこには、その性

の特質による敗北のみでなく、男性における最初の、旺盛な個人主義的な所有慾の支配力をもかぞへねばならない。

このやうな蒙昧な兩性の關係は、その後ながい年代にわたつて、人類の歴史からその影を容易には消しさらないのであつた。これはいふまでもなく、男子の生産的能動性のまへに、女性の家内労働が影をひそめたからであり、したがつて、彼女らの存在が、そのときから「取るに足らぬ添物」として、男子への隷屬を餘儀なくされてしまつたわけである。こゝにおいてすでに、女性の人間的自然の退化がおこり、その能力のながい封鎖が豫定された。もちろん、男子との對等な位置を占める能力や、機能をもうしなひ、のみならず、女性自身の特質の機能にもそれはわるく影響した。そして、その悪弊は、いつか世俗のなかに暗黙の傳統となり、倫理の傳統となつてひきつがれた。かくして、女性は、ながく、社會的な生産の活動に進出の機縁をうばはれ、家内の私的労働のうちにもつばら生理的役割のみをはたすことに局限されねばならなかつた。

その結果は、男の愛情は、冷淡な個人主義におちいるか、女性にたいする威壓的な要求にかはるか、あるひは、所有慾や征服慾の變形として、女性を物質的にながめる傾向さへみちびいた。

女性もまた、うけ身な忍苦を愛の眞實と錯覺することによつて、妻は夫を、母は子供を、第一義にかんがへるやうになり、ともに、夫、子供を中心とする家のまもりのみ固くして、家と家、人と人、家と國家や社會全體との親和的なかゝはりあひをわすれがちなエゴイズムのなかにのみ、やゝもすれば女のたゞしい道をもとめすぎるやうになつたとはいへぬか。男の無理解の傳統と、所有意識の増長は、つひに、その兩方の愛情の、ことなれるエゴイズムを誘ひだした。このやうにゆがめられた兩性の愛情における過失は、世代をかさねて、生物的に低下し精神的協同の合奏からへだたり、つひに、人間の人間たる所以の共同的愛情の創造的知性をも消滅させたのではないか。

しかし、まへにも述べた如く、女性が直接の生産に従事するやうになり、社會がまた、女性の勞働力を社會に有用なものとして評價しはじめてきたとき、ながくゆがんでゐた兩性の關係にもいくぶんかの變化がもたらされた。原始生産力が分業を深化せしめたときから、陰鬱な將來を運命づけられたかにみえた女性たちも、大規模な近代産業の出現によつて、その能力の可能性を試練する機会にめぐまれ、あたらしい生活の地盤をもとらへる端緒がつくられたのである。たとへ、わ

づかではあつても、直接の生産者として経済的な基礎をもつことによつて、彼女らは、家族や環境にのみとりすがる受動的な弱さをふりはらふことができるやうにみえた。

古代から中世へと、ながい年代を柔順な家畜のやうに生きねばならなかつた女性の生活にも、男女の協力によつて、はじめて素朴な生産をいとなみえた未開人類の世界が、かたちをちがへてよみがへつてきたのである。女性たちは、悦びと勇氣とをもつて生産労働に参加していつた。あつたものは、家庭経済の補ひ手として、あるものは、母性愛を経済的に充實させるために。女性のあたらしい生活の沃野がひらかれたかにみえたのである。西歐諸國におけるこのやうな女性の生産部面への進出は、生活の歴史に新機軸をもたらしただけでなく、家族内部の關係をも徐々に變化させた。獨立のめざめにうごかされた女性の聲や行動が、女の生活に起つたこのあたらしい事態に呼應して婦人問題を活潑にみちびいたのも、かうした社會環境の反映でもあらう。

しかし、これら十八世紀のするに、はじめてはつきりと目標をたてたところの女權承認運動は、當時の生産力の一般的事情、すなはち、國民經濟の状態と、その事情のうちで婦人の勤勞がもちはじめた職分とから、不可避免的に必要なものとして派生したものであることは興味がある。とい

ふのは、つぎのやうなことを教へてゐるからである。つまり、女性の社會から負はされる立場といふものは、もつぱら國民經濟における彼女の職分が、根源的には女の生活條件を規定してゐる、といふことが考へられるからである。これは、後章で述べるやうに、わが國の歴史にもあきらかな経路で描かれてゐる。

十九世紀の初頭へかけて起つた西歐諸國のかうした經濟状態は、日本では、大正期においてはじめて實現されてゐる。したがつて、明治初期の一部婦人のあひだに唱導された女權承認運動や、その後の青鞮派の婦人運動が、女性知識層の倫理觀や、生活意識に、自覺を植ゑつけることに役立ちはしたけれど、女性いつぱんが負ふところの生活状態そのものには、ふかい影響すら與へることができなかつたのも、この間の事情をかんがへてみればうなづける事柄であらう。これはいふまでもなく、彼女らが自立できるなんらの生活地盤をもつてゐなかつたからであり、またそれゆゑ、社會的にも無力な存在として律しられてきたことも疑ひない事實である。このやうな事情を明瞭につたへてゐるものに、明治期の小説がある。

明治の年代に書かれたおほくの小説のなかには、徳川時代からの因襲のきびしいかこみのなかで、おのれが、おのれ自身の運命の主人公であることができなかつた女性たちの相貌が、いたましく、ほろびゆくものの境涯としてゑがかれてゐる。近代産業が、まだ充分開花しなかつた年代の女性の風俗やモラルを反映してゐる點で、明治以後の小説をかへりみることは、社會史的に、風俗史的に興味あるだけでなく、思想的にも注目すべき複雑な女性の問題がひそんでゐる。たとへば、明治十年代から二十年代へかけて鬱勃と擡頭した自由民権の政治思想の感化によつて、空想化された女性性は、末廣鐵腸の「雪中梅」「花間鶯」、東海散史の「佳人の奇遇」、須藤南翠の「新粧の佳人」といつた政治小説にあらはれてゐる。たんなる西歐の感化といふより、日本の近代的躍進のあしどりに身をよせながら、舊時代の觀念や意識から離脱しようとしてもがいた、いはゆる當時の新らしい教養を身につけた女性群の行動も、開花期の思潮の餘波として、近代日本の興隆のひとつの反映として描きだされてゐる。それを代表するものに、小杉天外の「魔風戀風」、夏目漱石の「虞美人草」、森田草平の「煤煙」、二葉亭四迷の「浮雲」、岩野泡鳴の「征服被征服」、有島武郎の「或る女」等々があり、そこにはおのれ自身の意思でつよく生きようとする女性を登

場させてゐる。そして、これらの小説に描かれた女性たちが、多かれすくなかれ過去の女性と區別できるやうなモラルに立つて行動してゐることが、作者の女にたいする觀點は別として、樋口一葉や、尾崎紅葉や、泉鏡花の小説に登場する因襲的な悩みを背負ふ女性とある對照をもつてゐる點で、興味ふかくながめられるのである。

私はこれらの、明治期における代表的名作の女性たちが、すゝみゆく近代日本の發展のなかで、彼女たちの倫理や愛情や生活の意識をどのやうな方向にむかつてきりひらいたかを——いはば、ある時代、ある環境のなかで、發展する歴史にそふていかに悦び、いかに苦しみ、そしていかに新しい世界への憧憬を、わがものにしようとしてたゞかつたかを考察しようとかんがへた。さかのぼつた時代の新らしきモラルの歴史的な意義は、なんであつたか、また新らしさの追求は、たとひどのやうな犠牲や苦惱となりつゝも、つぎの時代へどううけつがれてきたか、をもの語らうとした。このさゝやかな企てのなかには、望みすくない一生であるゆゑに美しいといはれた女の境涯が、消しがたいふかさで烙きしるされてゐたからではあるまいか。

第一章 傳統の惱みから解放へ（明治期）

この章の主要な作品と作者

廣津柳浪「蜃中樓」

樋口一葉「十三夜」

徳富蘆花「不如歸」

尾崎紅葉「金色夜叉」

泉鏡花「婦系圖」

高山樗牛「瀧口入道」

永井荷風「地獄の花」

森田草平「煤煙」

夏目漱石「虞美人草」

小杉天外「魔風戀風」

1 黎明期の苦惱

1.
明治の年代は、いつばんに近代文化の昂揚期といはれてゐる。いひかへれば、鎖國の夢からさめて、舊時代からの離脱と、新文化の創造とが、この時代の人心にとつて大きな關心でもあつたからである。もちろん人心とは言つても、それが一部先覺者のみにかぎられてゐたことは事實だが、維新の變革から生みだされたあたらしい制度や生活が、なにかこの時期のひとびとに、未來へのかぎりなき希望と確信とをあたへてゐたことはたしかである。西歐思想の移植にもなつてあらはれた社會風潮のうごきや文化の改造にも、皮相な傾きと浮薄な雷同の意識こそあつたが、わかき日本の前進の體勢に相呼應する生氣のみなぎり、理想への鼓動はちからづよく羽搏いてゐた。そのやうな國家的革新のうごきのなかで、女性の生活にも、わづかではあるけれど變化がみ

えてゐた。はじめて力を入れるやうになつた女子教育はその一例である。

知識は勤勞への怠惰をさそふかのごとく、文盲は、婦徳の一部のやうにいはれたふるい觀念が掃かれて、女子教育の振興が明治初年にとなへられたとき、わが國における婦人解放の最初の一頁がひらかれたのである。

おもへば、明治七八年のころひらかれた女子師範學校は、新時代とともに女性の使命もよりおほきく擴大されねばならぬことを豫告したものである。鎖國三百年の惰眼をやぶつて、一躍日本を世界文明國の第一線に立たしめねばならぬといふ國民的氣魄は、この女子教育の課題にまでおよんだのである。それゆゑに、身すぎの術や、結婚資格のための、女子教育とはおのづから類をことにしてゐた。教へるものも、教はるものともに、學問そのものの研究に眞摯な熱情をうちこみ、日本文化の前進に寄與するためといふ自負にみちあふれてゐた。

かうした當時の革新的風潮にならんで、婦人問題も擡頭した。女の主權にたいするはじめての表明が、知識人のなかからうまれてきた。

廣津柳浪の「塵中樓」にあらはれる女學士山村敏子などは、かうした「新しい型」の女性の一

人であることは確かであらう。

彼女は熱心な婦人参政權の主張者である。婦人参政黨擴張運動のために私生活をなげうつて下阪する。大阪ではじめて會つた久松幹雄は、改進黨の主幹で、學力識見ともに備つた青年である。婦人参政運動の助力を乞ふためにいくどか會見するうち、彼女は幹雄をひそかに戀するやうになる。しかし、幹雄にはすでに松山操といふ愛人がある。彼女は諦めた。そして、専心参政運動に没頭する。だが運動にたいする助力はその後熱心にたのむのである。しかし、一般狀勢や機運といふものをかんがへた幹雄は、時機のいたらぬことを諄々と説いて彼女に反對する。しかし、彼女はかうした反對にも失望せず懸命に努力する。だが、擴張運動は一向に進展しなかつた。心身ともに疲れきつた彼女は、つひに病床に倒れる。

ちやうど、そのとき東京の父が大病に罹つたといふ報せをうける。しかも、その報せに前後して、議會に提出されてゐた婦人参政權案が否決になつたといふ電報が配達されてくる。彼女は望みを失つた。青春を賭けてたゞかつた理想が、容赦なくうち砕かれたからである。彼女は出奔した。あてのない出奔をした。

このやうにして、美しく聰明な彼女の理想は破滅してゆくのである。先進の女性によつて實踐された開拓の途ではあつたが、現實は彼女の要求を容れないのである。いや、容れないばかりでなく、みぢめに踏みくだかれてしまつた。ながい年代にわたつて、中世から近世へときづかれてきた封建道徳やいつぱんの慣習は、一朝一夕にたやすく變革できなかつたのである。したがつて一部知識人の間のみかんがへられたこれら理想や要求は、現實生活とはあまりにも隙がありすぎたのである。もちろん、當時の風潮が、國會開設とか條約改正とかいふ明治文化發達史上の混亂時代であつてみれば、男子が一樣に政治に狂奔するのにつれて、婦人もまた、しぜんその方面に興味を寄せるやうになるのも當然とはおもはれる。しかも、それにくはへて西歐の自由平等の思潮などがあわただしく攝りいれられてきた矢先であつたから、よりいつそう政治的に傾いて行つたのも不思議ではない。「蜃中樓」の主人公、山村敏子などは、この意味ではたしかに時代女性の一部を代表した婦人であつた。

彼女の意見がどんなものであつたか、その演説によると、「此く一方には自由權を貴び置きながら、唯婦人の上にはばかり體格と氣質とに些少の差異あるを口實となして、幸福の根本とも申すべ

き權理を與へないといふ理由はありますまゝ。」

彼女は、當時の男女が平等の權限のうへに立つてゐないことがいかに偏見であるか、女性の精神力が劣悪だといふ俗見につよく反撥した。「斯る道理があるにも構はず、男女は同權なるものにあらず、婦人は精神力に於て男子に劣れり、故に參政權を與ふ可らず、と云ふ論者がありませうか。私は決してあるまじと思ひますれど、演説に新聞に時々如此暴論を聞きますのは、妾の社會の爲めに最も悲む處であります。」

しかし、このやうな先進女性の革新論も、彼女の意中のひとにさへ蹴られる始末であつた。男子の普選さへ空論におもはれてゐた當時、女子參政權運動が、いかにかほそい小鳥の囀りであつたかは、この小説の名のしめすとほりである。

彼女の慕つた改進黨の黨士は、彼女の意見を全面的に否定し、女子に參政を許したあかつきは「空想と柔弱と血の道騒ぎのほか何の利益」も、もたらすはずはないと痛烈に非難した。

これらのいはゆる「新しい型」の女性たちは、當時政治小説としてあらはれた東海散史の「佳人の奇遇」や、末廣鐵腸の「雪中梅」二部作や、須藤南翠の「新粧の佳人」「綠箋談」などにも、

特徴的なすがたでゑがかれてゐる。極端な歐化主義にたいする反動がやつてきたのは、ちやうど、これらの小説がでた前後からであつた。束髪や洋服がすたれて、丸髻や高島田が流行しはじめたのである。また、それまでなにか時代おくれのやうに考へられてゐた茶の湯とか活花のたぐひが、示し合はせたやうに復活されてきた。女子教育にも、以前とはちがつた方針が目立つてきた。二十年代へはいつてから女子大學やその他各種の公立女學校も設立されたが、この時分には明治初期のやうな、女子自身の啓蒙向上を目的とする教育方法は見られなかつた。一説には、突飛な女政客などを出したことに深く怖れをなしたからだとも言はれてゐるが、そのやうな教育、思潮の國粹的轉換には、歐化主義のみでは日本文化が成熟しえないといふ一般の國民的自覺が作用してゐた。廿年から日清戦争にいたる期間の日本はいはゆる歐化主義の敗北、あるひは、國粹思想との妥協の時代であつた。

開化思想の先驅者として有名な福澤諭吉さへ二十一年には「尊王論」を著して皇室の尊嚴を説き、その他の多くも、歐米模倣に痛撃をあびせ、國粹保存に努力した。しかし、極端な國粹論とともに、現實日本の發展のために、頑迷固陋におちいらす、歐米文化の長所をとりいれ、それを

あくまで日本の精神によつて消化するやう警告した折中主義者、あるひは、新保守主義者も誕生した。かやうな國粹論の擡頭により、あるひは、その折中主義の風靡の傾向はあらゆる面に波及した。したがつて、婦人運動にもそれはひびいた。

すなはち、この時期になつてからといふものは、進歩的だといはれた婦人たちの政治的行動といふものは、すつかりその影をひそめてしまつたのである。

文藝の方面に樋口一葉の名が見えたのもそのころであらう。たれであつたか、日本における過去女性の最後の叫びを代表したものが、一葉だといふ意味のことを言つてゐたが、まことに一葉の作品にあらはれる女性は、求めることのない諦めの女たちである。どん底に落されても、たへ忍んで袖をしぼるといつた、哀愁の色濃い因襲的な女性たちである。「にこりえ」のお兼にしても、「十三夜」のお關にしても、「われから」のお町にしても同様である。

「十三夜」の主人公お關は、しがな暮しに育つた美しい娘である。十七のとき、その美貌を見こまれて勅任官の原田勇と結婚する。貧しくして育つた娘の立身を、お關の親たちはつねに喜び誇つてゐる。結婚後七年を過ぎて、夫婦の間には六歳になる男の子まであるやうになる。だがどういふものか、夫はお關と見るとつねに辛くあたる。なにことも内輪で貞淑なお關は、すべてを自分の身ひとつについでちつと耐へる。彼女は實家の親たちとあふことはあつても、ついで洩らしはしなかつた。心配をかけまいと思ふからである。

しかし、どうしても夫の虐待を耐へることができなくなつて、ある夜突然父母の家をたづねる。だが格子戸の外に立つと、中から父親らしい磊落な笑ひ聲が聞えてくる。「相手は定めし母様、あゝ何事も御存じなしにあのやうに喜んでお出遊ばすものを、どの顔さげて離縁状もらふて下されと言はれたものか、叱られるは必定、太郎といふ子もある身にて、置いて驅け出して來るまでには種々思案もし盡しての後なれど、今更にお老人を驚かして是れまでの喜びを水の泡にさせまする事つらや、寧ろ話をすに戻らうか」さう考へると、にはかに家へはいることもならず、しばらくは迷つた。

「戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか。あの鬼の、鬼の良人のもとへ——ぐゝ厭々」と、身をふるはす途端によろよとして格子へ突きあたる。その物音に中から「誰れだ」と父親の大きな聲が聞えてきた。お關は我に返つたやうに、あわてて戸内へ入るのである。親たちはもちろん、お關の來訪を喜んだ。「今夜來てくれるとは夢のやうな、ほんに心が届いたのであらう。自宅で甘い物はいくらも喰べやうけれど、親のこしらへたは又別物、奥様氣を取つて今夜は昔のお關になつて、外見も構はず豆なり栗なり氣に入つたものを喰べてくれ」と、たまたま十三夜で拵へた供物をすすめてくれる。決心もし、心を鬼にもして出かけてきたお關は、父母のかうした心遣ひを眼のあたりに見て、言ひだしかねたのであつた。しかし、思ひあまつて口を切つた。

「私は今日までつひに原田の身に就いて御耳に入れた事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣盡して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍を固めて來ました」

さう前置きして、彼女は父母のまへで次のやうに自分の苦衷を訴へるのである。

「今までは黙つては居ましたけれど、私の家の夫婦さし向ひを半日見て下さつたら大抵がお解りに成りませう。物言ふは用事のある時慳貪に申附けられるばかり、朝起きまして機嫌をきけば不圖脇を向いて庭の草花を態とらしき褒め詞、是にも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して、私は何も言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不法法を御並べなされ、それはまだ／＼辛棒をしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御蔑みなさる。それは素より華族女学校の椅子にかゝつて育つた者でないに相違なく、御同僚の奥様がたのやうにお花のお茶の歌の畫の習ひ立てた事もなければ、其お話しのお相手は出来ませぬけれど、出来ずば人知れず習はせて下さつても濟むべき筈、何も表向き實家の悪いを吹聴なされて、召使ひの婢女どもに顔の見られるやうな事なさらすとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は關や關やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからと云ふものは丸でお人が變りまして、思ひ出しても恐ろしう御座ります。」

さらに彼女はつづけて言ふ。

「私はくら闇の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふものを見た事が御座りませぬ。はじめのうちは何か申戯に態とらしく邪慳に遊ばすのと思ふて居りましたけれど、全くは私にお厭きなされたので此様もしたら出て行くか、彼様もしたら離縁をと言ひ出すかと苛めて苛め抜くので御座りましたよ。よしや良人が藝者狂ひなさらうとも、圍ひ者してお置きなさらうとも、其様ことに吝氣する私でもなく、婢女どもから其様な噂も聞えますけれど、あれほど働きのある御方なり男の身のそれ位はあり、うちと他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らはぬやう心がけて居りまするに、唯もう私の爲る事とて一から十まで面白くなく思召し、箸の上げ下しに家の内の楽しくないは妻の仕方の悪いからだと言しやる。それも何ういふ事が悪い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さるやうならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いはば太郎の乳母として置いて遣はすのと嘲つて仰しやるばかり、ほんに良人といふではなく、あの御方は鬼で御座りまする。」

いかに彼女の結婚生活が悲惨なものであつたかは、これによつてもうなづけるであらう。虐げられるものの弱さが、惻々と讀者の胸にせまつてくる。

子の母親であるお關にとつて、子供を棄てて出るつらさは、おそらく骨身にもこたへたであらう。彼女の親たちも、それを不憫とおもはぬではなかつた。が、「大丸髻に金輪の根を巻きて、黒縮緬の羽織何の惜氣もなく、わが娘ながらいつしか整ふ奥様風」を、眼のあたりに眺めると、「これを結び髪に結ひかへさせて、綿銘仙の半纏に袴がけの水仕事さすこと」のいかにも忍びがたく思はれて、「一旦の怒りに百年の運」をとりはずすやうなことがあつてはならないところから、種類の利害を説いて離縁を思ひとどまらせようとする。「區役所がよひの腰辨當が釜の下を焚きつけて呉れとは格が違ふ、随つてやかましくあらうむづかしくもあらう、がそれを機嫌のいいやうに整へて行くのが妻の役」だとも言ふし、また「うはべには見えねど、世間の奥様といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何のこれが世の勤め」であつて見れば、諦めることも出来るではないか、とも言つてすゝめる。それに原田から亥之（お關の弟）がいろいろ世話をうけてゐることなどもかぞへあげて、「辛からうとも一つは親の爲弟の

爲、太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒がなるほどならば、これから後とて出来ぬ事はあるまじ」。「同じ不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ關さうではないか、合點がいつたら何事も胸に斂めて知らぬ顔に今夜は歸つて、今まで通りつつしんで世を送つて呉れ」と因果をふくめて諭すのである。

すると、千度も百度も考へ直し、二年も三年も泣きつくした揚句に、どうでも離縁して貰はうと決心して家を出たお關ではあつたが、父の言葉にわつと泣き伏して、「それでは離縁を言ふたも我儘でござりました」「ほんに私さへ死んだ氣にならば、三方四方風波たゝす」に濟むゆゑ、「今年も辛棒出来さうな事、よく言葉も合點が行きました。もうこんなことはお聞かせ申しませぬほどに心配を下さいますな」と詫び入り、「お父様、お母様、今夜のことはこれ限り歸りますから、私は原田の妻なり、良人を誹るは濟みませぬほどに、もう何も言ひませぬ、關は立派な良人を持つたので弟の爲にも好い片腕、あゝ安心なと喜んでゐて下され」と、涙をかくしつつ歸つて行く。これが「十三夜」に描かれたお關である。

要するにお關は、諦めの女だつたのだ。自分の境涯に負はされた束縛や不運に、叛きもせず、反抗もせず、悲しむことによつてみづからも慰めようとする従順な女であつた。彼女が原田と結婚する前のことである。ちかくに住んでゐた煙草屋の録さんといふ若者に、お關はひそかに思ひをかけられる、彼女にもまたその若者が他人ではなかつた。ちかくに住んでゐた關係から、二人はたびたび會つた。言葉こそ交しはしなかつたが、それでも愛する者同志の眼は、いふよりおほくを語つたにちがひない。お關はまた、用達の往き歸りを店の前を通るやうにした。そして「行く行くはあの店の彼處へ坐つて、新聞見ながら商ひをする」自分をおもひ描いたりした。

だが、原田から結婚の申込をうけると、親たちは身分のちがふのを氣にしながらも、嬉しいおとづれに會つたやうに、お關の本心などはかまはず嫁に仕立てしまつた。お關は逆らはなかつた。それが自分にとつて、どんなに不幸な事柄であつても、親の言葉に逆らひたくはなかつた。離縁をと言つて縋つたいまの場合も、身一つと思へばこそ恨みもあれ、これが世の女のつとめだと悟れば諦めもできやう、と父親から言はれれば、それが千度も百度も考へ直し、二年も三年も泣き盡した揚句の決心であつても「私さへ死んだ氣になれば」と言つて素直にこゝろをひるがへす。

彼女は何一つ求めないのである。良人が藝者狂ひをしやうが、圍ひ者にうつつをぬかさうが、「男の身のそれ位はあり」がちのものだとかんがへる。彼女のかうした諦めの根柢には、女は男より劣つたもの、卑しいもの、したがつて弱いのが女だといふぬきがたい信仰が、なんの疑ひもなく宿つてゐる。そして、女はたゞ良人の我儘は許すべきもの、わが身の不運は諦むべきものと、われから女性を弱いもの扱ひにして、みづからを哀れんでゐるのである。

作者一葉は、かやうに因襲のなかにもがく女性の苦惱を、堪へしのぶかたちに描いたが、しかし、それはあきらめと絶望が、絶對の運命であるかのやうには描かなかつた。たとひ、微かな響であつても、この呪ふべき運命から、因襲のくびきから、とびださねばならぬといふ焦躁をうつしだしたことは特記されねばならぬ。一葉の誠實な生きかたは、新らしい時代の方向を豫見することができなかつたとはいへ、ふるい因襲のつよい圍みが安住の地でなく、ともかくそこから脱出しなければ、なんらの曙光ものぞめないことを暗示してゐるといふべきだらうか。

一葉の描いた女性を政治行動にまで走つた「蜃中樓」の敏子のやうな女性と對比すると、そこにはあきらかに、二つの女性典型のきづかれつつあることが窺はれる。これは、ずつと現代にまでつづいてゐる特徴的な二つの女性像である。このことについては後章で觸れるが、とにかく今ここにあらはれてゐる二つの女性像には、日本女性の特質が、あざやかな輪廓で描かれてゐる。

これは明治年代になつてから、はじめてはつきりと示された二つの生活態度だつたのである。女性の生活態度にあらはれたかうした相異は、もちろん、女子教育の異常な進展や、社會風潮の變化などにおほく影響されたことは事實だが、ひとつには、當時の情勢とならんで、女性自身がおのれの生活を、おのれ自身で眞剣に考へざるをえないやうな位置に、すでに立たされつつあつたことが原因でもあつたとおもはれる。

つまり武士階級の崩壊から、士族といふ稱號だけになつた一庶民たちが、あわただしく襲つて

くる生活經濟の不安にたちむかつて、ともかく獨立した生活地盤を得なければならぬ必要から、働くといふことに眞剣になつて來はじめたゆゑである。高祿を食んだ武士の娘であらうと、二十人扶持ぐらゐの端武士の息子であらうと、一樣に生きる手段を考へねばならぬところにまで追ひつめられて來たのである。かうした一般的社會事情に比例して、女性たちも、生きるといふ現實の問題に、直接か間接か關與しないわけにはいかなかつた。必然の理として、彼女たちの自覺に變化が見えはじめた。しかし、女性たちの生活の變化が明瞭な展開を示すやうになつたのは、づつとおくれて、明治もをはり、大正にはいつてからのことである。つまり職業婦人といふ形において、一應の完成を見るわけである。して見ると、この二十年から三十年へかけての年代には、わづかにその端緒が芽生えかけてゐたといふ程度に過ぎなかつたとも言へる。

小杉天外の「魔風戀風」に出てくる初野といふ女性などは、この意味の典型としてかぞへるのは誤りではなからう。

だが、それをかんがへるまへに、私は「十三夜」のお關にちかい幾人かの女性の、いたましい心情の経過に思ひをとどめてかんがへたい。これはたんに、年代を追ふ意味だけでなく、女性の相貌の推移が、歴史的だつたといふ確證を、小説に映つた女性像のなかで考へて見たかつたからである。この意味で浮ぶ小説は、しばしば「紅涙」をしばつたと言はれる蘆花の「不如歸」である。

「泣いて血を吐くほととぎす」

これは大正期の人たちによくうたはれた歌謡の一節である。

絹を裂くやうな、けたたましい聲で啼く「杜鵑」。聲帯のやぶれるまで啼きつづけて死んでゆく「ほととぎす」。

まことにこれは、「不如歸」の浪子の死にふさはしい象徴である。

片岡中將の令嬢としてそだつた浪子は、男爵川島武男の許に嫁入つて幸福な結婚生活をはじめた。二人の仲は圓滿であつた。側の眼に羨まれるほど、たがひの愛情は固く濃かに結ばれ、とも

に俸せであつた。

しかし、結婚後一年を経たとき、浪子は不幸にも肺を冒される。はじめは悪質の風邪くらゐに考へてゐた浪子の容態が、日の経過にしたがつて益々悪くなり、つひに咯血する。武男もはじめ肺を蝕ばれてゐることを知つて、浪子に轉地療養をすすめる。浪子は、乳母と看護婦とをともなつて返子の海岸へ轉地する。ところが浪子が肺病に罹つたのを幸ひに、かねてから懇意に川島家へ出入りしてゐる山木は、浪子を川島家から放逐して自分の娘豊子を後釜に坐らせ、娘の年來の望みを遂げさせてやらうと畫策する。

川島未亡人（武男の母）も浪子の病氣が病氣ゆゑ、萬一武男に感染してはと憂ひてゐた矢先だつたので、山木の進言はたゞちに功を奏し、未亡人は武男に離縁をすすめる。

ちやうど、艦隊演習で艦へ歸つて行つた武男の留守に、未亡人は片岡家へ山木をつかはして離縁を言ひわたす。父が會ひたいと言ふので迎へにまゐりましたといふ伯母の言葉に、なにも知らぬ浪子は、看護婦にたすけられながら歸京する。たまたま歸宅した武男は、自分の不在中に浪子を離縁したことを知つて怒る。

時、明治二十七年七月十八日。

清國との開戦愈々一決して、武男の乗組む旗艦松島にも出動命令がくだつた。

數ヶ月後、武男は負傷して佐世保の病院に入院する。しかし、一ヶ月餘りで傷は全癒し、ふたたび戦線へと向ふ。

明けて二十八年、「媾和使來り、四月中旬には平和條約の報遍く傳はり、三國干涉の噂について、遼東の還附の事あり、同五月末、大元帥陛下凱旋し玉ひて、戦争は宛ながら大鵬の翼を收むるが如く倏然として已」んだのである。武男も六月初旬には、大尉に昇進して凱旋する。

だが浪子は、すでにこの世の人ではなかつた。

これだけの荒筋からも窺へるやうに、浪子は、女として報ひられるものもなく死んで行つた。

その短い生涯でいとなんだ武男との結婚生活も、日をかぞへれば何日だと言ふのであらう。武男の艦内生活をもふくめてわづか一年である。しかし、短かつたとは言へ幸福であつた。二人の結婚生活が幸福であればあつただけ、浪子の死はいつそう痛ましく思はれる。なぜならば、病を得たといふ、ただ、それだけの理由で、最愛の夫と離別し、幸福な結婚生活をも失はねばならな

かつたからである。しかも、それが當事者の合意にもとづいて行はれたものでないだけに不幸であつた。

彼女は自分の體を冒しつつある病魔を呪つた。また蝕ばまれてゆく自分の肉體をも恨んだ。口喧しい姑とは言へ、病氣さへなければ離縁などといふ、おそろしい手段はとらなかつたであらう。

彼女は病氣が怖ろしいといふよりも、病氣によつて生れる結果が悲しかつたのである。それは武男にとつても同様であつた。彼も母が浪子との離縁を迫つたとき、およぶ限り抵抗はしたのだが、彼の母は「浪が可哀想ぢや主人の卿には代へられん、川島家には代へられん」一點張りで聞き入れぬのである。

「浪も可愛想な様なものぢやが、病氣すつが悪かぢやツか、何と思はれたて川島家が斷絶するよかまだ宜ぢやなツか、喃。それに不義理の不人情の云ひなはるが、此様な例は世間に幾らもあります。家風に合はんと離縁する。子供が無かと離縁する。悪い病氣があつと離縁する。此が世間の法。喃武どん、何の不義理な事も不人情な事もないもんぢや。全體こんな病氣のした時やの、嫁の實家から引取つて宜答ぢや。先方から云はんから此方で云ひ出すが何の悪か事恥

かしか事があツモンか。」

川島未亡人にとつては、浪よりも、世間の非難よりも、家の傳統が大事だつたのである。川島家を存続させるためには、犠牲を惜まぬし、手段もまた選ばなかつた。武男が妻のために飽まで意を通すならば、勘當もまたやむを得まいといふ考へにさへみちびかれる。

彼は艦隊演習がはつて歸るまでこの話は保留して置いてもらひたいと頼んで出かける。しかし、歸宅して見ると、すでに浪子は離縁されてゐた。彼も、その無暴な因襲にひとこと口をとがらさずにはゐられなかつた。

「實際ひどいです。今日も一寸逗子に寄つて來ると、浪さんは居らんでせう。行くに尋ねると何か要があつて東京へ歸つたと云ふです。變と思つたですが、まさか母上が其様な事を——實にひどい——」

憤る武男を尻目に、母はつめたく言ふのである。

「最早あとの祭ちやなツか。彼方も承知して綺麗に引取つたあとの事ちや、此上如何すツかい。女々しか事をしたはツと親の恥ばつかいか、卿の男が立つまいが」

女々しい事をする親の恥だけでなく、お前の男も立たないと言ふ。もはや、因襲は親子の對立にまでおよんだともいへるのではないか。

黙然と聞いてゐた武男は、断れよとばかり下唇を噛みながら、たちまち勃然と立ちあがつて、病妻のためにもとめてきた林檎の籠を微塵に碎きながら、

「阿母、あなたは、浪を殺し、まだその上武男を御殺しなすツた、最早御目にかかりません」と、席を蹴つて軍艦に引返して行くのである。

かうして一度は昂奮のあまり、母に叛いたが、彼の決意はどこまでも不徹底のものにならざるをえなかつた。彼は浪子との復縁を望みはしたけれど、自分の意志を通さうとすれば、母と衝突することは自明である。しかし、「母との間を前にも増して乖離」さすことは堪へられなかつた。それは、「母に逆らふの苦は已に嘗め」てゐたからである。したがつて、かうした桎梏に縛られて悩むことを「齒痒しと思へど、脱るゝ途を知ら」なかつたのである。

言ふまでもなく、彼は因襲のきづなに縛られたのである。浪子が習俗の掟に殉じたといへるならば、彼は、家族組成の縛めから脱れ得なかつたのだ。ともに彼等は、彼等のふところから幸福

な生活を奪ひとる黒い手をはらひのけることができなかつたのである。それを振りちぎることによつて、あるひは眞實の生活と、理想とおのれのものにすることができたかも知れぬ。だが、それをするには、親にさからふことであり、傳統にたいする反逆である。世繼ぎのために嫁るといふ觀念にしたがはぬことは、當時の人の道に逆らふことであり、道德の掟に叛くことである。彼等は、その觀念の重壓からのがれるにはあまりに弱かつた。

しかし、それならば人間同志がその深く結ばれた生活で得る愛情と悦びとを、いつたい誰の手で守りつづけて貰つたらいいのか。

………
けつきよく、當事者のいたはりと努力を俟つ以外なんの途もなかつたわけである。

しかし、「不如歸」にあらはれる相愛の男女は、彼等がその結合によつて得た愛や悦びを、まもりつづける強さがなかつたのではあるまいか。つまり、最悪の事態をもつと執拗に押切つて行く勇氣と決斷が、武男になかつたからではあるまいか。

浪子はその短い生涯をいたましくをへねばならなかつたのも、要するに武男の意志の弱さに原

因があつたのだ。彼が優柔であり、不徹底だつたからである。生活を片輪にしつつある習俗に、彼はいかなる生活と行動とをもつて双向つたと言へるであらう。このやうな人生にたいする行動の弱さが、彼等の生活を破局へちかづけたのであるし、滅びの淵へ追ひつめて行つたのである。これは浪子にとつて不幸であつた。同時に、女性いつぱんにとつても悲しむべき事態であつたかも知れない。最愛の夫と離別し、結婚生活をも失つて病に死んで行く浪子は、しかし、例外なく悲劇の主人公であつたにちがひない。

4。

これを「金色夜叉」のお宮と比較するとき、その心情において、性格において、幾多の共通點さへみいだされる。それは「婦系圖」のお蔦や、「煤煙」の隅江や、「虞美人草」の小夜子にも通ずる傾向である。

「金色夜叉」は、いふまでもなく、尾崎紅葉の死の前年にかゝれた小説である。

紅葉の文學者としての聲望は、いつぱんにはかなり仰々しいものであるが、かれの文學ははじめ西鶴の模倣からはじまり、明治開化の理念によつてひらかれた國民の新らしい精神の衝動には、むしろ反撥してゐる側にあつた。かれは、封建的因襲への執着が、つよく、新しい改革の方向にのみすることには、まなこの輝きをうしなつてゐた。しかし、西鶴の寫實主義を學んでゐたから、ともかく、當時の社會の、外形だけの動きは描きえた。

皮相な外面的實相や通俗な人間心理の動きを、文學的な好奇心でとらへ、その描寫の技巧にのみ捉はれたのが紅葉であつた。かれは、女性や性道德にたいしても新しい芽生えを素朴にとらへ、そこに人間の歴史的な進化をながめることはできなかつた。

つまり、在來の舊道德に立向つて、來るべき時代のために曉の鐘を打ち鳴らすといふやうな、新鮮な構圖を人生體驗として持つた人ではなかつたのである。

紅葉の小説にあらはれる女性たちは、一樣に貞節で従順で、男から一步へり降つたところにおけるの生活と心の住家とをみいだしてゐる。つまりは、舊時代の傳統を望郷的に美はしい抒情と夢によつて再現しようとしてゐたのである。

男性にたいする顧慮のない崇拜と忍従が、幅太い輪廓で彼女らの道德に垣をめぐらしてゐるのである。それは「多情多恨」のお種にしても、「おぼろ舟」のお藤にしても、「色懺悔」の若葉と芳野にしても、「むき玉子」のお喜代、「三人妻」のお艶、「不言不語」のたまきにしても同様である。

白河樂翁は「女はすべて文盲なるをよしとす。女の才あるは大に害をなす。決して學問などいぢぬものにて、假名本讀むほどならばそれにて事足るべし。女はたゞ内にくどくとして日を暮すもの故、馬鹿なるが女の知なるなり」と言つたが、女の知的特性がむしろ學問を失ふといふ側面にあるごとく教へてゐる點は、このころの婦人道德にたいする輿論の一端を傳へる言葉として興味がある。

これが紅葉の見解と、どの程度に相異してゐるかはここでの問題でない。ただ、紅葉の小説にあらはれてくる女性たちが、共通的に夫唱婦從の觀念に生きてゐる事實をかんがへれば、當時の婦人道德の理想が、一般的にはかならずしも白河樂翁の言葉を頭から否定するやうな傾向になつたことだけはうかがへる。

もつとも、當時このやうな封建的な觀念からの脱出にむかつて、清新な氣概と、それゆゑの懐疑と懊惱をかさねた「文學界」一派のやうな舊道德破壊のさけびもありあがりつゝあつたのではあるが。

貫一と宮は親のゆるした間柄である。

貫一の亡父に生前恩をうけた鳴澤隆三（お宮の父）は、父母なきあとの貫一をひきとつて養育してゐた。

尋常中學から高等中學へ、そして行く行くは大學をへさせて、娘宮の夫として自分らの後生を見とつてもらふ考へであつた。「貫一は篤學のみならず、性質も直に、行も正しかりければ、此人物を以て學士の冠を戴かんには、誠に獲易からざる婿なるべし、と夫婦はひそかに喜んでゐたのである。

貫一もまた、他姓を名乗ることは潔しとしなかつたが、「美しき宮を妻に爲るを得ば、此身代も屈辱も何か有らん」とかんがへた。宮も、貫一をはなれて生活の未來は信じられなかつた。

あるとき、歌留多の會へまねかれて、宮は富山といふ男に見染られる。洋行歸りの富山は、富山銀行の後繼者であつた。その夜、彼が歌留多會へやつてきたのは、妻とすべき女をそれとなく物色しようと豫定してゐたからである。宮は、彼の理想になつた女性であつたのだらうか。彼の眼は、きはだつて美しい宮の容姿に釘づけにされた。

「あれが……」

彼は、さつそく心にさう決めたのである。

鳴澤家へ箕輪夫人がおとづれたのは、それから間もなくであつた。富山が宮を嫁に欲しいと言ふのである。宮の父母も一時は迷つた。しかし、相手が富山であるだけに引かれて、内諾をあたへる。

宮の父は貫一が悲歎にくれるであらうことを心配して、なだめる方法をいろいろと工夫した。豫想どほり貫一はおどろく。

「之に就いては、私も種々と考へたけれど、大きに思ふ所もあるで、いつそ彼は遣つて了つての、お前は最少しの事だから大學を卒業して、四五年も歐羅巴へ留學して、全然仕上げた所で

身を固めるとしたら如何か」

と、隆三は、彼の苦痛をはぐらかすやうな条件をもちだすのであつた。

貫一は、宮の本心をたゞすために翌日、熱海の温泉に母と滞在する彼女をたづねる。潮鳴りのする海邊に、しばらくぶりで會つて二人の愛情は蘇生のおもひでむきあつた。だが、富貴のまぶしさにいちどとらはれた宮は、富山との縁談をどうしても思ひ切ることができなかつた。このときの貫一の憤りは有名である。

「宮さん、恚して二人が一所に居るのも今夜限りだ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限り。僕がお前に物を言ふのも今夜限りだ。一月の十七日。宮さんよく覚えてお置き。來年の今月今夜は、貫一は何處で此月を見るのだから！ 再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん。忘れるものか。死んでも僕は忘れんよ！ 可いか宮さん、一月の十七日だ。來年の今月今夜になつたならば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから。月が……月が……月が曇つたらば、宮さん、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いてゐると思つてくれ」

こゝろさわぐまゝに縋りつく宮を振りはらひながら、貫一は、怨みの捨臺詞を吐きのこしてたち去る。

宮は富山と結婚したが、すこしも幸福のおとづれではなかつた。彼女は結婚まへをおもひ後悔の念にさそはれる。いまさらの如く貫一がおもひだされてきた。貫一を失つたところに、自分のほんたうの生活のすがたは発見できなかつたからである。

熱海から姿を消した貫一は、その後、この世の最悪の人間とみなされた高利貸の手代になつてひたすら金を積む。苦惱から復讐へ、愛より金に心うばはれた宮との運命にむかつて、貫一の憎悪は、最悪の人間になり下つて、みづからの失意を忘れようとするにいたる。

以上が「金色夜叉」の梗概である。

ここで考へられるやうに、宮ははじめ富貴にたいする憧れにつよく動かされたまゝ、愛情の眞實を侮蔑した女性である。彼女にとつては、愛情も尊いであらうが、物質的にも自由に振舞へる生活なくてなんの愛情か、といふ囁きから逃げられなかつたのだ。

貫一は、誰よりも自分を愛してゐた。自分もまた、貫一に本心をゆすぶられないわけではなか

つた。しかし、結婚の對象としてかんがへた貫一は、はたして缺點をもたぬ男と言へるであらうか。これは疑問といふよりも見え透いてゐた。なるほど、彼は雀が米を食ふのは僅か十粒か二十粒だと言つた。十粒か二十粒の米に事缺かして宮さんに不自由はさせないとも言つてゐた。

しかも、十粒二十粒の生活をしてまで彼の愛情を受けいれねばならぬといふ理由がどこにあらう。たしかに、二人は將來にたいする默契を交したにはちがひないが、それは徳義の問題であつて、世間のみとめる契約ではない。したがつて、たとへばそれを破つたからと言つて、自分に罪があるのではない。彼が女の要求するものを満足だけの力と條件を具備してゐないゆゑである。

その證據には、明治音楽院へ通つてゐるときも、ヴァイオリンのプロフェッサをする獨逸人から結婚を申込みられたし、ある病院の院長からも妻に欲しいと望まれた。のぞまれるに値する自分だつたからなのだ。して見れば、富山の縁談を承諾したことが、どうして不可解なのか。たとへ、そのために一人の男が不幸に陥つたとしても、まつたく自分のみの關與する事柄ではあるまい。なぜならば、愛情以外に女を満足させる何物もないやうな男であつて見れば。

このやうな、物質へのあこがれになびく個人主義思想のさそひをうけて、宮は富山との結婚生

活に未來を信じてとびこんだのである。いちどは、男のつよい愛情の手をふりはらつて、おのれの信じた生活に憧れた彼女ではあつたが、家庭に身ををさめた瞬間から、おのれにゆるされた幸福といふものがどんなものであるかをふりかへらざるを得なかつた。

自由に振舞へる生活、十粒や二十粒で満足できない女の欲求をもみたしえる生活、さうした生活を得ることはできたが、自分はいつたいどれだけのものを望み、どれだけのものを與へられたといふのであらう。彼女は、自分の刹那にとらはれた行動や考へを悔ひ、省みはじめた。よりすくない望みで満足してゐる従順な「人形」だつたことに、はじめて氣がついたのである。

富山との結婚生活で、彼女の享受したものは、じつと、十粒か二十粒に過ぎなかつたかも知れない。つまり彼女は、めぐまれた物質生活の包圍のなかに坐りながらも、自分がそれを自由に振舞へるのでないことを知つた。

かやうに富貴の世界も、女性にとつていかに空虚であるかを知つた宮は、貫一との以前の愛情をしたはしく回顧する。宮は悔悟のこゝろで、貫一のもとに歸つて未來を夢みようとするのであるが、復讐の情熱に焼きつけられた男は頑固に拒絶する。そして、このもつれのまゝ、この作品

は、作者の死によつて未解決にをはつた。

未定のまゝではあるが、ともかく、この小説が金と愛との計算にとまよひ倒れてゆく女性の物語であることはうたがふ餘地もない。そして、金と愛との二筋道に、ともかく分裂することゝの迷ひを味つたところに、こゝにあらはれた宮の苦惱が、近代につながるものであることを知る。たゞ宮は、その二筋のどちらにも徹底できなかった。貫一の愛情に生きることも、物質の生活に酔ふことも、そのどちらかの一面にも信念をもつて突進できなかった。

要するに彼女の不幸といふものは、實際生活にたいする態度の不徹底と、それにとまよふ心理の動搖とに原因があつたのだ。「不如歸」の浪子が、招かざる悲しみに滅びたのに反し、「金色夜叉」の宮は、みづから招くことによつて苦しみ、中途半端であるゆゑに、結局、愛情の眞實のなかに、物質生活の享樂のうちにもおのれの生きる途をみいだしえなかつたのである。

*

「文學界」の運動とは、雑誌「文學界」(明治二十六年創刊)を舞臺として、北村透谷を中心に、島崎藤村、馬場孤蝶、星野天知、戸川秋骨、戸川殘花、平田禿木、のちには上田敏等も執筆してゐた。かれらは主として、封建的な舊世代からの離脱と、新しい時代への脈動のはげしさを浪漫的に表現

した。まだ、舊世代からはつきりおのれを別ちえぬながら、新しい個人の意識につよい羽搏きをかんじつゝ、清純な戀愛にあこがれ、ルネッサンス的な人生や人間への憧憬や渴仰に餓えてゐた。舊い世代との訣別があつたが、いまだ新しい理想がまだかならぬ時代の懊惱や懷疑が、人生をつよく肯定し、人間をひろく解放する立場からかながへられた。それゆゑに、かれら、「文學界」の一派の運動は、新しい時代創造の混沌期における建設的な氣魄の衝動的なあらはれであつた。

5.

より少い望みで満足する従順な「人形」は、かならずしも「十三夜」のお關や「不如歸」の浪子や、富山との結婚生活に女の生涯を滅ぼして行つた宮だけにかぎられてはゐないのである。

鏡花の「婦系圖」にあらはれるお蔭も、その意味では、おのれからなにつつ求めることもなく死んでゆく女である。

お蔭は、淺草で左棲をとつてゐた女である。さうしてゐるうちに、酒の席で早瀬主税と知りあ

ひ、二人ははなれがたい愛情の世界にむすびあふ。主税は、獨逸文學者酒井俊藏の門弟で、酒井の令嬢お妙とはたがひに心をゆるす間柄である。

お蔦と人目をはばかつて家をもつてからも、主税はお妙をひそかに思ひつづける。お妙も彼をにくからずかんがへてゐた。たまたま文學士河野英吉からお妙は結婚を申込まれるが、俊藏は、早瀬主税が承諾しなければ娘はやれぬと斷る。それは門弟の主税とお妙とのあひだを寛大にみてゐたからである。

だが、主税にはお蔦がある。俊藏は主税にお蔦と別れることをすすめる。師の言葉にそむくこともならず彼は、蔦と別れてひとり静岡におもむき、獨逸語の私塾を開く、偶然、車中で知りあつた河野の妹菅子に、主税はいろいろと世話をうける。菅子は、静岡某校の校長で理學士島山の妻である。

菅子は主税と交際をつゞけるうち、越えるべからざる関係におちいる。菅子の姉道子も、不圖した機會に主税と知りあひ、夫のゆるしがたい関係をむすぶやうになる。

主税とわかれてから、路地裏の佗しい住居にひとりで暮してゐたお蔦は、健康をそこねて床に

起き臥してゐたが、つひに重態におちいる。おなじころ、主税も、道子の夫の經營する病院に起きふしするのであつた。俊藏やお妙や姉藝者の小芳にみまもられながら、お蔦は愛人に逢ふこともできず死んでゆく。ほど經てたづねてきたお妙から蔦の死を聞かされ、主税はふかい悲しみに沈んだ。

健康の恢復したのを機會に、お妙は主税に歸京をすすめる。しかし、彼は仔細あつて彼女をひきとめる。それは河野の父英臣が、お家の一門を引連れて久能山に見物かたがた日蝕の觀測をしようとする催しに、落ちあはふとするためであつた。

主税は久能山のいたできで英臣に會見し、自分が菅子や道子と關係したのは、河野一家を破滅させるためだつたと述懐する。英臣は怒つて拳銃をにぎる。だが弾ははづれて夫人の胸板をつらぬくのである。道子姉妹は抱きあつて崖へ身を投げる。

その夜宿へ歸ると、主税は蔦の黒髪を抱きながら、お妙の寢靜まるのを待つて毒を飲むのである。

ここで見るやうに、お蔭は古風なあきらめの女である。自分の負はされた運命に抵抗もしなければ、また男から離別をいひだされても、それが男の將來にとつて幸福の途であるなら、自分は犠牲になることもいとはないといふ傳統に培はれた女であつた。

お蔭には主税とお妙とのあひだがらもわかつてゐた。知つてゐたばかりでなく、二人のためなら潔よく一さいを諦める覺悟さへしてゐた。彼女は主税と世帯を持ちたいために自分の着換へから持物をみんな借金のかたにしてまで一緒にすることを楽しんでゐながら、やうやく愛人と借家住居の生活ができる境遇になつて、離別をいひだされれば苦情ひとつ言はないで別れて悔ひない女なのである。

彼女の生きかたは習俗にとらはれた無抵抗の態度であり、その諦めのうちに充實した心理をかんずる女であつた。このことは義理のしがらみに逆らふことのできない主税の生活態度に共通する人生觀である。

彼もお蔭と暮す境遇のなかに幸福をかんじてゐた。永久につづけてゆく生活だとかんがへはしなかつたが、破壊するにはしのびなかつた。もしゆるされれば生涯の苦樂をともに味ひたい情性

からぬけられなかつた。だがそれにもかゝはらず、恩師の言葉にであふと、ひとたまりもなく心はひるがへるのである。

あるとき、料亭の一間にさそはれて、彼は俊藏からつぎのやうな言葉をきかされる。

「是も非もない。さあ、たとへ俺が無理でも構はん。無情でも差支へん。婦が怨んでも、泣いても可い、憧れ死に死んでも可い。先生の命令だ、切つて了へ。俺を棄てるか、女を棄てるか。む、此の他に言句はないのよ」

すると彼は、考へさせてくれとも言はず、そくさに返事をするのである。

「婦を棄てます。先生」

かくて、彼は最愛のお蔭との生活をにべもなく清算するのである。俊藏には義理がある。恩がある。恩顧に叛くことはひとの道ではない。彼はさう我身に言ひ聞かさねばならなかつた。

かうしてお蔭との生活を清算はしたが、彼にはお妙と結婚する意志は毛頭なかつた。彼の考へでは、むしろ、お妙を護ることができれば本望だつたのである。恩師にむくゆる徴意が、それで通じることかかんがへた。したがつて河野英吉がお妙に結婚を申込むのだと言つて家柄をたづね

にやつてきたときも、門閥を笠にきて、俊藏の家風や生活状態をさげすむやうな態度にでられると、自然中傷しないではすまされなかつたのである。

河野の父英臣は、英吉の言葉にしたがへば、兄弟一家一門をそろへて、天下に一階層を形造らうといふのである。したがつて、「成るべくは銘々夫々の収入も、一番の姉が三百圓なら次が二百五十圓、次が二百圓、次が百五十圓、末が百圓と云つた工合に長幼の等差を整然とつけたい」とかんがへる。「謂つて見れば、貴族院も一家族で一黨を立てることが出来る。内閣も一門で組織し得るやうにといふ遠大な理想があるんだ」と言ふ。

そして、そのやうな自己繁榮のためには、娘の結婚にたいする理想などどうあらうとかまはず、「親の鑑定で婿を見て授ける」のであつて、したがつて「否も應も有りやしない。衣服きよふくの柄まがほども文句を謂はさん」主義だとはばかりもなく吐きだすのだ。

河野の申込みに彼が反対したのは、一門の繁榮に役立つ「人形」でさへあればといふ河野のあまりのエゴイズムに不快だつたからである。河野一家にたいする呪はしい氣持が、このときから彼に意識された。

静岡にきて獨逸語の私塾を開いてから、とくに彼が河野一家に親しくちかづいたのは、一つには權門にたいする憤りを晴したかつたし、一つには、婦めかけの系圖で一門の誇りをえようとする陋劣な英臣の魂膽を、腹の底から憎んでゐたからであつた。

彼は車中で知りあつた菅子とたゞならぬ關係をむすび、またその姉の道子とも關係を結んだ。

(道子は、英臣が不在の折、夫人と別丁貞造とのあひだに生れた不倫の子であつた。)彼は、英臣の野望に致命的な傷を負はせたことをほくそ笑んだのである。榮達へのエゴイズムを呪ふ心は、かれをして、かやうな残酷なみちをもたどらせるのであつた。

このやうにして、彼は河野一家を破滅にみちびきはしたが、彼自身を救ふみちは強ひてみいださうとはしなかつた。彼は自分が救はれるまへに、義理にしたがひ、人情にひさをまげるのである。つゞまるところ、彼の本意は、俊藏にたいする恩報じが、たつた一つの絶對の目的だつたのだ。恩顧にむくゆることができさへすれば、それで本望だつたのだ。「人間並にや附合へねえ肩書つきの悪丁稚を、一人前に育てた上、大切な嬢さんに惚れて居るなら添はせて遣らう、とおつしやつて下すつた先生御夫婦のお志」が、自分の運命にもかへがたく思はれたのであらう。

したがつて、義理に殉じようとする彼の志のまへには、愛人の微笑もみえなければ、愛情のゆかしさもなかつた。彼はそれで満足だつたし、また、それが眞實の生活とも考へられたにちがひない。かうした男との愛情に、女の一さいを捧げて死んでゆくお蔭は、客觀的には不幸といふよりも惨めであつた。臨終にゐあはせた俊藏は、早瀬にかはつて慰める。

「皆居る、寂しくは無いよ。然し何うだい。早瀬が來たら、誰も次の室へ行つて貰つて、恙うやつて二人許りで言ひたいことがあるだらう。致方がない斷念めな。斷念めて——己を早瀬だと思へ。世界に二人と無い夫だと思へ。酒井俊藏を夫と思へ、情夫と思へ、早瀬主税だと思つて、言ひたい事を言へ、したいことをしろ、不足はあるまい。念佛も彌陀も何も要らん、一心に男の名を稱へるんだ。早瀬と稱へて袖に縋れ、胸を抱け、お蔭。……早瀬が來た、此處に居るよ」

と云ふと、縋りついて、膝に乗るのを横抱きに頸を抱いた。

トつかまらうとする手に力なく、二三度探りはづしたが、震へながら緊乎と、酒井先生の襟を掴んで、

「咽喉が苦しい、あゝ、呼吸が出来ない。素人らしいが（と莞爾して）口移しに薬を飲まして……」

酒井は猶豫はず、水薬を口に含んだのである。

がつくりと咽喉を通ると、氣が遠く成りさうに、仰向けに恍惚したが、

「早瀬さん」

「お蔭」

「早瀬さん……」

「むゝ」

「先、先生が逢つても可いつて、嬉しいねえ！」

——泉鏡花全集「婦系圖」より——

「婦系圖」に描かれる女性たちの経路には、それぞれの意味でいたましい歴史がたたまれてゐる。愛人と生別れになつて死ぬお蔭、衣服の柄ほど文句を言はさないで嫁しづけられる道子たち姉妹。ここには一様に、目覺めを知らぬ女性たちのはかない死の抗議がある。

しかし、彼女たちは、かうした滅びゆく姿態のなかに世にさからふ心をつらぬき、うるはしい抒情詩をわが身をもつて描いた。彼女たちは、新しい自覺に生きず、抗議にほろびたことによつて美しい。しかし、蘇生しがたい約束に亡びゆかねばならなかつたのはどこまでも哀れである。しかし、このやうな客観的な哀れさも、常人だちの主観のなかでは、世の掟にみづからをほろぼすことのなかになんらかの張りあひをかんじ、男をおもふころは、かうした屈從のなかにこそ眞實があるとおもひえたのである。

6。

かうした境涯に、おのれの青春を喪ひ、その肉體をも滅ぼして行つた女に、「瀧口入道」の横笛がある。

横笛は舞子白拍子である。ある花見の宴で「春鶯囀」を舞ひ、その婉やかな姿に二人の男から想ひをよせられる。一人は四位少將維盛卿の身内で足助二郎重景といひ、年やうやく二十。小松

殿の身内に花と歌はれし」^{わかし}壯年である。もう一人はおなじ小松殿の身内で、その武骨者を知られた齋藤瀧口時頼である。彼は二十三であつた。

二人はともに横笛を戀ひ、あるときは文に、あるときは、人づてに心情を訴へてゐたのである。ある日時頼は、思案をかさねたすゑに父親にうち明ける。しかし、物堅い父は聞き容れぬばかりでなく、思ひきらぬときは義絶するとまで怒る。時頼は、せんかたなく諦め、ながの暇を乞ふて出家になる。

ほど過ぎて彼の噂はつたはり、大奥にまで囁かれて行つた。横笛はとどろく胸を抑へながら様子を見て見ると、情なき戀路に世をはかなんでの業だと言ふ。彼女は人の手前もわすれて、「それは誠か」とたゞすと、女どもはおもしろげに高笑ひして「罪造りの横笛殿、あたら勇士に世をすてさし」と異口同音にさわぐ。

横笛はつらくと、おもふのであつた。

「世を捨つるとは輕々しき戯事^{あそびごと}に非ず。瀧口殿は六波羅上下に名を知られたる。屈指の武士、希望に満てる春秋長き行末を、二十幾年の男盛りに截斷^{たぎ}りて、楽しき此世を外に、身を佛門に歸し

給ふ、世にも憐れの事にこそ。數多の人に優りて、君の御覺殊に愛たく、一族の譽を雙の肩に擔うて、家には其子を杖なる年老ひたる親御もありと聞く。他目にも數あるまじき君父の恩義惜氣もなく振り捨てて、人の譏り、世の笑ひを思ひ給はで、弓矢とる身に瑜伽三密の嗜は、世の無常を如何に深く觀じ給ひけるぞ。あゝ是れ皆此の身、此の横笛の爲せし業」であつて、双こそ當てないが、自分が手にかけて殺したも同然。さう思へば思ふほど彼女はせつなく思はれ、「せめて嵯峨の奥にありと聞く瀧口が庵室に訪れて、我が誠の心を打明かさばや」と決意して、黄昏にまぎれて旅に出る。

しかし、數もない在家をあなたに、さまよひながら漸くたづねると、「世を隔てたる此庵は、夜陰に訪はるゝ覺えなし、恐らく門違ひにて候はんか」との答へである。横笛は、ここまで訪ねてきたおのれが身の上を訴へ、一言の許を乞ふのである。しかし時頼は容れなかつた。

「如何に女性我れ世に在りし時は、御所に然る人あるを知りし事ありしが、我が知れる其人は我れを知らざる筈なり、されば今宵我れを訪れ給へる御身は、我が知れる横笛にてはよもあらじ。良しや其人なりとて、此世の中に心は死して、残る體は空蟬の我れ、我れに恨みあればとて、

そを言ふの要もなく、よし又人に誠あらばとて、そを聞かん願ひもなし。一切諸縁に離れたる身、今更ら返らぬ世の浮事を語り出でて何かせん。聞き給へや女性、何事も過ぎにし事は夢なれば、我れに恨みありとな思ひ給ひぞ。己れに情なきものの善知識となれる例世に少からず、誠の道に入りし身の、そを恨みん謂れやある。されば遇うて益なき今宵の我れ、唯々何事も言はず、此儘歸り給へ。一言とは申すまじきぞ、聞き分け給ひしか横笛殿」

かうして横笛は、會ふこともならずして、「往生院の門脇に虫と共に」泣きあかすのである。白としたりる夜あけに、いまはとて涙に曇る聲張り上げて、「喃瀧口殿、葉末の露とも消えずして今まで立ちつくせるも、妾が赤心打明けて、許すとの御身が一言聞かんが爲め、夢と見給ふ昔ならば、情なかりし横笛とは思ひ給はざるべきに、など斯くは慈悲なくあしらひ給ふぞ、今宵ならば世を換へても相見んことのありとも覺えぬに、喃、瀧口殿」

だが聞えてくるものは、時頼の唱ふる念佛の鈴のみである。「何とせん術もあらざれば、横笛は泣くく、元來し路を返り行きぬ。」

その後横笛は、いつたんは、御所に歸つたが間もなく行衛知れずになる。

長閑に晴れわたつたある日、瀧口入道は、嵯峨の都をへだてた南北の里深草を訪れ、とある民家にたち寄つた。さきを急ぐ身でない瀧口は、その家の老婆とよもやまの話に時を過したが、ふと聞いたのが戀塚の由來である。老婆の話すところによると、この先の溪川に沿つたあたりに一棟の庵があるが、その庵になんの故か若く美しい上蕨が訪れて住み、朝夕絶ゆることなく優しい聲で讀經をつづけてゐた。

時折水汲みに谷川へ下りる姿を里人は見て、天人でもあれほど美しくはあるまいと語合つたほどだといふ。だがその上蕨はなにを思ひ悩んでか病みつき、間もなく返らぬ人となつたが、たれひとり、なぜ彼女が尼になつたかは知らなかつた。人々は涙ながらに、庵室のかたはらへ心ばかりの埋葬を營んでやり、卒塔婆一基を標したが、誰いふともなく「戀塚」と呼ぶやうになつたといふのである。

瀧口は哀れを催し、「それは氣の毒なる事なり、其の上蕨は何處の如何なる人なりしぞ」とたづねた。

「人の噂にきけば御所の曹司なりとかや」

「ナニ曹司とや、その名は聞き知らずや」

「然れば、最とやさしき名と覚えしが、何とやら、おゝ——それ儘に横笛とやら言ひし、嵯峨の奥に戀人の住めると人の話なれども、定かに知る由もなし、聞けば御僧の坊も同じ嵯峨なれば、若し心當りの人もあらば、此事傳へられよ——」

横笛は死んだのである。おそらく、誰に継ぐこともなく死んだのであらう。

世をはかなんだ男への誠から尼にまでなり、人里をへだてた庵に起き伏して償はれる日を持ちつつ世をへた横笛の死は痛ましい。彼女の尼にならうとした決意には、女の眞情が深い強さでこめられてゐる。彼女が瀧口に求めたものは「許す」といふただ一言の情であらう。しかし、横笛はそれさへも報ひられず死におもむいた。彼女は庵に籠つて讀經をつづけた。やがては魂と若い肉體とを失ふであらうことを豫知しつつ、涙をこめて讀經をつづけた。

かくて彼女は、顔さへ知らぬ男の心情に、おのが青春の誇りをかけてまで殉じた。美しい滅びであつた。かうした滅びにうかぶ幾人かの女性に、「婦系圖」のお蔭があり、「不如歸」の浪子があ

つたのを、讀者は知つてゐるであらう。

しかし横笛は、平安時代の女性であり、平安時代の道徳を身につけた女である。つまり、おのれが、おのれ自身の主人公でありえない時代の生きかたに育つた、弱い心情の持主であり、實踐者でもあつたのだ。したがつて彼女の人生とは、美はしい滅びであり、殉ずるの途であつた。

お蔭や浪子たちは、その環境や生活において、かならずしも同一ではない。同一ではないけれど、その心情や倫理には、年代の隔てをもたぬ一致がみいだされる。これは傳統のゆゑでもあり、女の生活に負はされた宿命のゆゑでもあらう。

しかし、かうした脆さと弱點に苦しみつつ、多くの女性たちは、新しい歴史の形成のために、いかに多くのたゞかひと努力とをつゞけねばならなかつたことか。「地獄の花」の富子や園子がさうであつたし、「新生」の節子や、「煤煙」の朋子や「魔風戀風」の初野姉妹がその一人であることにうたがひはない。これらの女性たちは、ともかく自分を解放するために環境とたゞかひ、習俗とも逆らつた。

II 自己形成への歩み

1.

園子は、ある私立女學校に教鞭をとつてゐたが、ふとした機會から黒淵家の家庭教師に雇はれる。

黒淵家は、とかく世間からうとんじられ、さまざまな風評のつたへられてゐる家である。それは、主人の長義がよほど以前に西洋人の妾と姦通して、その西洋人の財産をば妾の手を経て横どりした、といふやうな噂が一般に信じられてゐたからである。したがつて「黒淵家は巨萬の財産と此の大きな邸宅とを有つてゐるにも係らず、全く社會へは顔出しも出來ぬほど」排斥されてゐた。

だが、園子はその家に馴れてみると、むしろ好感さへ抱くやうになつた。それは家風といひ、

家庭の情態といひ、世間の風説とはまるでもちがつてゐたからである。それに主人の世間をはばかるやうな弱い氣質が、家庭にはかへつてあたたかい雰圍氣をあたへ、園子自身も苦痛を感じるきづかひもなかつた。

黒淵長義には二人の子供があつた。二十六になる富子と、園子のあづかつてゐる男の子である。富子はいちど法學士と結婚したが、一年とたたぬうち自分から離縁して、以前、別荘だつた向島の大きな邸宅にひとり暮してゐた。園子は彼女の境涯が、なにか自分とおなじ宿命に生きる女のやうにおもはれて、ことさら足しげく訪れた。二人は人生や社會にたいしてある種の共鳴さへ感じあふやうになつた。富子はあるとき、園子に向つてつぎのやうにいふ。

「自分は世間の評判などには決して心を向けずに、自分の爲ためたいと思ふ事を少しの遠慮もなく自由よに振舞つて行けばいい。最もう卑ひしい汚よれたものになつて了つた自分の身には、如何なる事をしやうが決して人を瞞ま着するやうな卑劣な罪を犯さなくもよい。自分の名のために束縛されるやうな愚かな煩悶に苦しむこともない。自分は全く世間から離れた一人身で、夫もなければ子供もなく、何時何處から見ても只この富子と云ふ一個の女であるからは、道德とか社會とか家族とか云

ふものが在つて初めて必要の起つた道德などといふものからは全然其の範圍外にある身體になつて了ふ事が出来た。」

束縛もうけずに暮してゐる富子のさうした生活を、園子はうらやましく感じたことは一再でなかつた。園子を黒淵家へ家庭教師として紹介してくれた笹村も、とき折はやつてきた。彼はクリスチャンで文學志望の青年である。園子は彼とよく會つた。二人はいくどか會ふうちに戀愛に陥る。

黒淵家では毎年夏になると小田原の別荘に避暑するのが例になつてゐたが、この夏は園子も加はつて出かけることになつた。

別荘へきて一週間ほど過ぎたころ、園子にはかに笹村に逢ひたくなり、手紙を出す。彼は翌日直ぐやつてきたが、別荘へは來ないで宿へ泊つた。黒淵夫人は笹村の來たことを女中から聞き、園子に眞偽をたづねる。彼女は知らないと言ひはるが、女中が汽車から降りる笹村を見たのだと言ふ。夫人は笹村と園子との間になにかあることをかんじ、極度に嫉妬する。笹村と夫人とは、以前からすでにふかい關係がむすばれてゐたのである。笹村は、夫人にとつて若い燕だつたのだ。

園子はそんなことは知らず、家人の寝静まるのを待つては宿へ會ひにでかけた。

偶然にも、園子の奉職する學校の水澤校長も避暑にきてゐて、笹村を訪ねようとする園子と砂濱で出會つた。水澤はあなたがこちらにお出での事も存じてゐましたから、いづれ明日にでもお訪ねしようかと思つてゐたと言ふのである。園子は不安でならなかつた。一刻もはやく立去りたかつた。彼が待つてゐるであらうと思ふと、心はやるのであつた。それで、鳥渡町まで急用があつて参りたいのだといふと、では南陽館にゐますからと答へるのである。南陽館といへば笹村のゐる宿ではないか。彼女は慄然とした。

黒淵夫人は笹村が南陽館といふ宿屋にゐることを知つて、夜更けにこつそり出かけてゆく。園子もきづかれぬやうに後を追つた。だが彼女は宿の入口で水澤に會つてしまふ。水澤は折入つて話もあるからと言つて自分の部屋へ園子を案内する。彼の話といふのは園子を妻に欲しいといふのだ。彼は妻を亡くしてからすつと獨身をとほしてゐたが、ひそかに園子を戀してゐたのである。彼女は考へさせてくれと言つて辭したが、翌日になつて南陽館を訪ねると、笹村はもう東京へたつたといふ。黒淵夫人もその日、體の具合が悪いからといつて東京へ歸つて行つた。

彼女は深い失望に襲はれた。四五日過ぎたころ、黒淵家の醜惡が大々的に新聞に書きたてられた。富子の行跡のことであつた。長義は心配してすぐに東京へむかつた。園子も歸るべく心を決めたが、その日の夕方、突然南陽館から使ひの者が手紙を持つてきた。水澤校長からである。文面は言ふまでもなく結婚のことであつた。彼女は斷りかねて出かける。水澤は待ちかねたやうに、彼女が行くと直ぐ切りだした。だが園子は自分は養女である關係から他家へは嫁げない旨を話した。水澤は彼女が嫁げないなら自分は苗字を變へてもいいと言ふのである。

「いえ、冗談に御聞なすつては困ります。餘り輕卒に申し過ぎたかも知れませんが、其れは畢竟私の最後の決心なので、私が斯う打明けてあなたをお望みしたからは、是非とも御承諾して頂かなければならないのです。園子さん、先づあなただけのお考へを聞かして下さい」

園子はきつぱりことわることもならず、曖昧に濁して歸らうかと考へた。彼は辭退するのまかまはず送つてゆくといふ。二人は外へ出た。雲は空を暗く蔽つて、風の強く吹く夜であつた。

別莊へ歸つた園子は、いまさらのやうに水澤の自分に加へた行爲が口惜しく思はれ、睡りもせず泣いた。ちやうどそんな折である。黒淵夫妻が亡くなつたといふ電報が来る。おどろいてゐる

違もなく東京にむかつた。黒淵夫妻の死は自殺であつた。夫人と笹村の醜い関係を目撃した長義が、自分の居間に夫人をさそつて拳銃を放つたのである。秀男をたのむといふ遺書が園子あてにのこされてゐた。そして財産の三分一を園子に譲るとつけ加へてあつた。

園子は、昨日までの自分をさつぱりと清算し、新しい生活に生きるべく決意した。学校へも辭職届をだし、養母にもそのことを告げようと思つた。それから「狐の如く隠れた神の信者」笹村をもたづねて、その罪を悔悟させようとかんがへ、昂然として馬車に乗る。

これは荷風の「地獄の花」の梗概である。ここだろうかへるやうに、園子は昂然と胸を張つて、生活にたいする自信と決意とを新たに呼吸するのである。

* 荷風の「地獄の花」は、人間の性格や運命が遺傳と環境によつて決定されるといふフランス自然主義、とくにエミール・ゾラの影響によつて生まれたといはれてゐる。

しかし、彼女のかうした決意には、誇りをうしなつた女の自嘲と哀惜とがかたられてゐる。彼女は富子が言つたやうに、「この世間が云ひ囃す汚い地獄の中に、安心して自分の信する道に進む

事が出来るやうになつた」と自分にいひ聞かす。彼女は以前のごとく、たんに世間の毀譽のみにとらはれて清く生きるなどといふ事はすつかりあらためて、なんの束縛もない自由の生涯を送らうと考へる。また、彼女は過つてゐたとも考へる。「自分が今迄一點の過失なく、能く道德の繩張中に這入つて居たのは、心から徳を好んでゐたのではなく、全く世の譏りを心配したからの事であつた。然るに、今は、もう全く富子と同じやうな自由の體になつて、已に破られた其の肉體の操は最早や保つての要なく、貞操と徳行とを看板に世渡りする地位からは、其の身を逃れ得た。今は如何なる汚行も自身を欺く事はないのである」と。

要するに、彼女らのかんがへた唯一の自由といふものは、女の誇りを失ふといふ側面でのみ得られるものであつて、肉體の純潔を保たうとするかぎり、自分の信する道に進むこともできず、生活の喜びを享受することさへできかねたのである。彼女らの道德とは、名譽であり體面であつた。そして女性の體面とは肉體の純潔を意味し、名譽とは高尚な人格を意味するものと信じてゐた。

したがつて肉體の純潔を失ふことは、女のすべてをも失ふものと錯覺した。誇りを失ふといふ

ことが、女の全生活を破壊するものだとか考へてゐたのである。

たとへば水澤校長が許しを乞ふために訪ねてきたとき、園子は悲痛な面持でつぎのやうに語つてゐる。

「御心配あそばすな、私はもう世の中には出られない身體でございますから、縦へ如何にお怨み申しても、決して貴方の御名譽に關はる様な事を致す力は無いのでございます。私は全く約束いたしましたものとも、もう結婚する事は出来ない身になつたので御座いますから、無論この後は、如何様に被仰つて下さいましても、私は貴方の御心に従ふ事は出来ませんのですから、どうか私と云ふ……女の身の果敢ない事をお思ひ下さいまし」

彼女の決意とは、實は悲しい悟りだつたのである。これを富子とくらべたらどうであらう。彼女は自分から離縁を迫つた忌はしい結婚生活と夫とにたいして、むしろ抗議さへしてゐる。

「眞實に私は口惜しくつて、何か氣味の可い復讐をして遣りたいと、仕舞にはもう私の方から全然夫だと云ふ優しい氣は無くなつて了ひましてね。私は或晩わざと外へ行つて泊つて来てやつたんですよ。そして二日ばかりして歸つて來ると、夫は大變に立腹しましてね、不貞だとか不

義だとか御大層な言草を並べますから私は此處だと思つて、もう胸の中に有りつ丈けの事を言つてやつたんでございます。ねえ、さうぢやありませんか。自分は結婚前から子供まで拵へて置きながら、人が鳥渡でも氣儘な眞似をして見れば直ぐと自分の事は棚に上げて了つて、不貞操も聞いて呆れるぢや有りませんか。全體貞操なんものは、夫婦ともく綺麗であつてこそ保てるものだと思ふんです。」

夫の不義にたいする富子のかうした非難には、社會的に獨立することのできない女の無力さが語られてゐるだけでなく、傳統的に負はされてきた女の生活の狭さも反映されてゐる。

彼女には、結婚生活は、男と女とが對等の資格でむすばれるもの、對等の戀愛感情で成立するもの、といふふうにしかうけとれなかつた。したがつて、兩者のどちらかに、相手を無視したり傷けたりするやうな行爲や意圖があつた場合には、一方は權利をもつて當然それを責めるし、また非難もしなければならぬ、といふのである。

彼女は正當にもかうした理由にもとづいて、法學士に離縁を迫つたのである。彼女は、破談の宣告をあたへることによつて、「氣味のいい復讐」をしたとも思つた。また夫に精神的打撃を與へ

ることによつて、男一般への憎悪と反感が表現できるのでともおもつた。彼女は、女の手から離縁を叩きつけたといふことに、なにか勝ち誇つた優越さへおぼえたのである。

しかし、敗れたのは、結局、彼女だつた。

彼女はうしなはれた肉體の純潔を惜んだのみか、女である自分を失つたことをも悲しんだ。彼女はかうした悲しみを通してることによつて、はじめて解放されえた。つまり、習俗や道徳に考慮する必要がなくなつたからである。しかし、「卑しい汚れた身」にならねばならなかつたのは大きな犠牲であつた。

いはば、彼女らはおのれの肉體を傾けることによつて、習俗や制度に抗議したのである。それよりほかに抗議の方法はみあたらなかつた。これらは、名譽と體面のみが人間の資格であるかのごとく考へられてゐた一時期の思潮が、自覺しつつあつた女性たちを、いかに惨めに脱落させて行つたかをものがる一例である。

2.

「地獄の花」の富子や園子たちが、女の自負と誇りが肉體の純潔にのみあるかのごとく考へてゐたのに反し、「煤煙」の朋子は、その思考や倫理の點ではるかに自由であるばかりでなく、その時代の道徳律にたいしても、きはめて無頓着におのれを振舞はせてゐる。これは三十年代における教養ある女性の、一の典型として興味ある性格でもあるが、またそこにあらはれる隅江といふ女性も、岩野泡鳴の「毒藥を飲む女」の千代子と同様、悲劇的な境遇の女として忘れがたい存在である。

隅江は、要吉に言はせると「何の感動もなく生きる女」であつた。要吉が朋子と熱烈な戀愛に陥つてゆくのを知つても、自分を悲しもしないし、不運だと歎きもしない。彼の歸りの遅いとき、彼女は淋しさうに火鉢のまへで待つてゐるが、歸つて來た夫にどこへ行つたともきかねば、遅いとも早かつたとも口に出さない女である。(次の一節参照)

「洋燈をもつと明るくせんか」

別段慳貪に言つた譯でもないが、始終氣兼ねておどくしてゐる隅江は、叱られた様にでも思つたらしい。遽たはてて洋燈の心を思ひきり上げたが、要吉の顔を一目見て、直ぐ膝の上へ眼を落してしまつた。……

隅江はそんな女である。要吉はとき折この辛抱づよい女をいろいろにおもひ描くことがある。

「この女に良人の愛情を求めろ心が有るのだらうか。そんなものは最う要らぬのぢやなからうか。辛抱強いと云へば是程辛抱の好い女もない。けれども、何處までが辛抱で、何處からが無神経なのか分らな」かつた。

「……それが皆自分の所爲であると思ひながら、矢張り物足らなかつた。男と女とが差向ひで坐つて、誰の前で話しても差支のないやうな話でなけりや出来なく成るそれで子供だけは生む。これが世間一通りの夫婦と云ふものであらう。要吉は取返しの附かぬ物を落して來たやうな心持がした。」彼は、なによりこの平靜な無風帯にたへられなかつた。彼には、うるはしい幻想をかきたてる女、たえず精神に緊張をあたへる女性が必要であつた。伸びきつた弦のやうな危険が、た

えず相手と自分とのあひだに張られてゐなければ満足できないやうな状態が、彼の欲求には多分にあつたのである。したがつて、ひかへめに、因襲のなかにおのれを消して生きる隅江のやうな女性が、たうてい彼を満足させることはできなかつた。

要吉やその友人の神戸が中心で、若い女性に一週一回あて、外國文學の研究などもつ金曜會といふ集りがあつたが、そこに眞鍋朋子もゐた。彼女は女子大學を出て、文學を好む先進の女性であつた。

いつか、彼は朋子の書いた、「末日」と、いふ短篇小説をよみ、その終りに「傳説によればサッフォーは顔色はダークであつた。」と、書き添へて送る。これは、その前日、彼が「金曜會」で語つたサッフォー断片に關聯した暗示なのである。辻占のやうに待つてゐた要吉のところへ、朋子から、翌日すぐ返事がきた。そして、手紙のをはりにつぎの文句が、彼の眼をつよく射た。

「此夜この頃、お言葉のはしくまで繰返して、思ひ亂るゝことの繁く候」

金曜會以外の場所で、おちあふ日が、しだいに繁くなつてゆく。二人は、ひとつの溝に、はなれがたく落ちこんでしまつたのである。

しかし、ふたりの愛情の發露は、素朴ではなかつた。要吉から見ると、朋子が、手紙の言葉にも似ず、どこか冷靜すぎるやうにみえる。彼自身もまた、ほんたうに彼女を愛してゐるかどうか、おのれの心にきゝたとしても、曖昧であつた。そして、そのあいまいなまゝで、不安なまゝでゐることに、一種の快感さへおぼえるのである。あきらかに、この戀愛が、近代的な自意識の遊戯におちこまうとしてゐた。

青い麥が五寸に延びた、小春日和に二人は、はじめておたがひの心理をたづねあふのである。

「……私は今こんな事を貴方に打明けたとて、決して貴方から何物をも求めるのぢやない。況して貴方の前途を如何しようといふ考へなどは少しもない。何の希望もない。何の目的もない。それは全く絶望的な執着です。私は唯貴方に會つて、此事を白狀して、若し貴方の心の隅に私といふものを記憶してさへ貰つたら、それで十分です。私はそれで満足します。」と、要吉はひくい聲でさゝやくのであつた。しかし、朋子は、よそめにはまるで化石したやうな様子で、なんらの感動をも示さない。要吉は、この無感動にたへられず、おのれの言葉の誇張をさへ意識して、い

よいよ度を失つて急ぎこんでゆく。彼は、いかにかれが道德上の破産者であるかをとき、いまの氣持はまるで難破船だ、……「唯、貴方に依つて力が與へられたい、新しく生きる道が求めたい。」と、哀願する。すると、朋子は、なんども、問ひつめられたする、「先生が私に仰有つて下さつたやうな、左様いふ心持を抱いたものなら、私の方が先なんで御座います。」と、冷靜な彼女の、秘めたこゝろをやうやくほころばしてみせる。このやうに、燃える情熱を、冷靜な姿でよそほふ朋子の氣質は、その後の要吉を、つねに疑心暗鬼におちいらせる機縁となる。あるひは、二人の感情對立の原因となる。

はじめての、二人だけに秘められたせつかくの機會において、要吉と、朋子との最初の、そして、それが最後までこの戀愛を畸形化する端緒がつくられる。いはば、このはじめての二人だけの接觸において、一さいを授げあたへたい欲求をつける朋子を、要吉は、「普通の男のするやうに、ただちに彼女を自分のものとするやうな手段を講じないで、かへつて相手から遠ざけるやうな態度」を、とつたのである。

うはごとのやうに、嘎れた聲で、彼のよりつよい抱擁をもとめる彼女に、要吉は、たゞおそれたぢろぐだけであつた。彼女は、いふに餘るうれしさに泣くのではなく、彼女の情熱の意思が、理解されなかつたことに絶望してひたすら泣く。さうして、このときから、ふたりのあひだに心理的な溝がつくられるのである。

愛情の身ぶるひをつめたくみまらされた朋子は、聲をふるはせて、「一切を棄て、北極迄も隨いて行く様な心持に成つてゐる。」と、いふ要吉の言葉に返事もあたへず、失望のいろで別れさつてゆく。このやうな、最初の機會における愛情の、たがひの喰ひちがひは、いよいよ、ふたりの戀愛の本質をあきらかにして、憎悪の炎を燃やしつゞけるのである。

「……眞實の我姿を解せられずして愛せられる程苦しいものはない。眞を申せば、私の世界には戀も愛も同情も皆無意味の文字に過ぎない。残れるものは只理解と云ふことだけ。……先生から愛されやうが憎まれやうが、それは第二の問題で、理解が同情を生むかも未知數なのです。理解の結果が如何成らうと、只理解それだけが唯一の幸福なのですから、……長たらしき告白を是非忍んで読んで頂きます。……」

みぎのやうな書きだしで、朋子は、要吉にたいする彼女の内心を、じつに丹念にくりひろげるのであつた。

要吉との最初の機會における不満、失望は、要吉の態度のみからでなく、彼女自身の心理的な動搖からも生れてゐることを告げてゐる。彼女によれば、たうにはやくから、要吉を心のなかにしたひつゞけてゐたが、表面ではそれを打消し、むしろ口外したり、要吉に知られたりすることが怖ろしかつたといふのである。なぜ、ほんたうのことがいへなかつたかと、いへば、「唯ひとり我胸の奥に自由に先生を思はせて頂きたかつた……」からだと書いてゐる。その理由は、自分はいち二重心理に悩んでゐる身で、要吉への愛情もたゞしい戀愛などとはいへぬ、いはば、彼女には戀愛にふさはしい精神の没我に達しきれなかつたからだといふ。「私は迎も熱い酒を盛る器ぢやない。」と信じたからである。

では、彼女はどういふふうに戀愛をかんがへたか。——戀とは——純一無雜なものでせう。と、彼女は述べる。——自分を形造る幾億萬の細胞の一つくが、等しきヴァイブレーション(震動)に燃えた時に——名附けるべきではないかと。そして、——私はさういふので無ければ満足しま

せん。——と意味をつよめてゐる。さういふ戀愛の信念に、彼女は達しえぬことを承知しながらも、しかし、達したいといふ欲求はあつた。「永遠などといふ愚かなことは望まない迄も、只一轉瞬でも左様いふ純な境界に入りたい。成らうと努力しました。遂に駄目でした。」

かやうな二重心理の分裂をみづから意識しながらも、彼女は、戀愛の理想にみづからを溺れさせることをはげしく望んだ。「足りない、足りない。それぢや足りない。」と、情熱の襲ひに乘じて、要吉の冷酷を怨んだ彼女の心理過程は、そのやうなものであつた。たとひ、一瞬でも没我の境界をつかみたい努力は、要吉によつてしりぞけられた。心理の分裂に身の置きどころを失つたころが、純一無雜な戀をもとめて、おのれをわすれようとした刹那は、つひに空虚に歸した。

朋子の戀愛の心理は、これまで述べてきたやうな小説における、男のつくつた掟に生き、それに對立するといふやうな女の苦惱ではない。世のつねの倫理にたいしては、要吉も、たうにそれを越えてゐる。彼女の苦惱は、すでに世の掟にそむくことになんらの痛苦もかんじてはない、むしろ、おのれみづからの意思の分裂に悩むのである。分裂に不満をかんじながら没我の境地に統一の状態のくるのをまぢのぞみながら、つひに、それがはたせなかつた。要吉に全身をゆだねた

いといふ表現も、じつは、彼女のほんたうのねがひであるよりも、さういふ衝動の燃焼によつて、分裂の惱みを消しさりたかつたにすぎない。だから、要吉のまへに示した一さいの行爲や、言葉はすべて、虚偽であると告白したる、——私は中庸といふことは出来ない——と結ぶのである。「火かさらずば氷、而して火は駄目だと確めたのです。氷です、雪です、雪國へ突進します。先生は未だ火に付き玉ふが、斯くて焚死する力がお有りですか。若し左様ならばそれ迄です。」——と、消極的な要吉の態度をあざ笑ふのであつた。「火か、さらずば氷」といふ言葉は、彼女の徹底的な生活の信念を象徴したものであり、要吉のにえきらぬ藝術的？な戀愛の態度にむけたはげしい抗議である。彼女は、二重の心理に迷つた。愛情をかんじながらうちあけずに、ひそかにそれをたのしみたいといふ姑息なエゴイズムの半面に、そのやうな心を蹴りつけて、一瞬の火花を散らす愛戀のなかに自我を統一し、燃焼したいといふ焦躁もあつた。そして、その統一へのねがひは、彼女の迷ひもあつたが、要吉のために否定された。どうせ燃えることができなければ、氷獄のうちに凍死するやうな情態がのぞましいと、彼女はかんがへた。このやうな、かんがへはもちろん、インテリ心理の觀念的なたはむれを暴露したものであるが、同時に、要吉といふ男の

中庸をまもつたあいまいな態度への否定でもあつた。彼女の、ひそやかな愛情に火を點じたのは要吉であつてみれば、要吉は、その戀愛の展開におほきな責任があると、朋子がかんがへたのであらう。

みぎのやうな挑戦的な手紙をうけとつた要吉は、その手紙のなかに、けつして彼女が退却したのではなく、より一そう男に肉薄してくるのをかんじた。彼はむしろ、この戀愛で女にだしぬかれ、うちやぶられた自分を屈辱的にかんがへはじめた。——固より要吉も終局のない戀を夢想しては居なかつた。何時か、如何なる方法に於てか、終局を來すべきものとは思つて居た。若し手際よく失戀することが出來たら、それでも構はない。唯こんなに素早く女から先んじられやうとは思はなかつた。——

かやうに朋子が、最初の機會にふとあふられた刹那の情熱を、要吉によつてはばまれたといふ、わづかなゆきちがひは、朋子の要吉にたいする反感となり、要吉の彼女にむける憎惡の機縁となつた。このやうに、愛情の告白と同時に、おたがひに對立し、反抗するころが芽生へ、愛と憎惡のいらだたしい混亂と衝突のなかで、たがひに常軌を脱してゆく。要吉は、すでにそのことを

かんじ、あるとき朋子につきのやうに訴へてゐる。——「私達の何は——左様だ、ま、戀だと云はせて下さい。私達の戀は宛然まろくイブセンの戯曲のやうですね。始まつたかと思へば既キヤクう終局クローフに來て居た。」このやうに、彼らの戀愛が出發と同時に破局をかんじねばならなかつたのは、分裂的なやみ、純粹性に缺ける近代的戀愛の宿命である。そのうへ、朋子と要吉との、愛情のもめかたの相異からも、このやうな、なりゆきはさけられなかつた。と、いふのは、家庭生活の無風帯に飽滿したはて、あらたな刺戟をもめたとはいへ、家庭生活を破壊してまで新しい戀愛に全身をうづめようといふのではなく、きはめてロマンチックな好奇心から、精神的な愛情のながれにひたらうといふのにすぎない。それは、「其面影」*（二葉亭四迷）の小野哲也が、家庭の不和から脱れて、義妹の小夜子によせたやうな全身的な、餘裕のない求愛ではなかつた。現實の不合理や矛盾は、いちおうかうしたものだと傍觀してゆける餘裕があり、そのうへに、なにか新しい刺戟と美をもめようとしたのが、要吉の愛情の由來である。現實の不滿は、そのまゝみすごしてゆけるこの餘裕とは、つまりあたらしい現實や、モラルをつくるといふ氣魄がないといふことだ。矛盾した現實はよりよく利用したうへ、趣味としてなにか新しいものをとらへようといふ態度が、

要吉の特徴である。

※ 二葉亭四迷の「其面影」は、公債をもつより、學生を育てた方が有利だといふ考へから、學費を補助してもらつた家の娘と結婚した小野哲也が主人公である。哲也は、自分を投資物とながめるやうな妻や、妻の母を嫌悪して、義妹の小夜子とつよい愛情でむすばれるのであるが、小夜子は、姉への義理から「肉より靈」を、もともとて宗教に溺れ、哲也との愛情をおもひあきらめる、といふ筋である。

明治時代の家族關係の不調和と、そこから離脱しようとして離脱できず、哲也は大陸に放浪し、小夜子は、宗教に逃げるといふ自由戀愛の慘澹たる敗北のすがたである。敗北ではあるが、小夜子と哲也の戀愛には、眞摯な、全身的な愛情がかはされるいみで、「煤煙」と、ちがつた悲愴さをたゞへる作品である。

要吉の趣味的な愛情にくらべて、朋子の愛情は、はるかにひたむきである。彼女も、現實的に愛情の結果などかんがへてはゐない。しかし、すくなくとも、おのれの全身を震動させる愛情に理想をもとめ、精神の二重性を克服しようといふ、誠實な努力をみせてゐる。このやうな男の遊戯的、藝術的な餘裕は、當然、おのれの全靈を麻痺する悦びをえようとした朋子の必死な愛情

を満足させるはずはない。そして、要吉と、朋子との愛情のたゞかひは、つねに壓倒的に男をひきづり屈服させようとしてゐる。「始終機會さへあれば自分で幻影をつくつて、自分を欺いてゐる。幻影の中に生れて、幻影の中に死んだら思ひ残すことは有るまい。」といひ、だから、めざめることは虚無である、あなたもひとを欺くとともに、自分を欺いて幻影のなかに生きやうといふ要吉のわがままな、和解的な生活の信條にたいして、朋子は返事をあたへない。とひつめられて、「短刀の如く」彼女は吐きだす。「無かも知れませぬ。無に堪へやうと思ひます。」女は男にくらべて、はるかに生にたいして徹底的である。

3。

かやうに、二人の戀愛は復讐と憎惡のたゞかひの悲劇を構成する。しかし、前述したやうに、自分の意思に徹底しようとする朋子は、けつして男の説得に妥協してはゆかない。彼女は、その意味で、徹底的に自分を自分ひとりで處理しようとする近代人である。これまでの他力本願的な

因襲のきづなからまつたく自由である。

そのことは要吉も察して、「此女は自分の手に自分の生命を握つてゐる。何時でも自分は自分の主人で有ると云ふ自覺を持つて居るらしい。」とかんがへ、彼自身はなほも、「運命に依頼し、相手に依頼して居る自分は何たる卑怯者だ。」と、反省してゐる。つまり、これまでの愛情において、女性がつねに、男の愛情のエゴイズムに屈服してゐたのであるが、朋子は、けつして自分を屈從せしめなかつた。このやうな、二人の矛盾した精神のあらそひは、たがひの愛情がたちきれぬ執着のうちにあるながらも、おたがひの破滅をねがふところをうち消すことはできなかつた。

朋子は、かやうに自負心つよく、自分が、自分の生命の主人公でありながら、じつは、自分の心の二重性から自由ではなかつた。二重に分裂するところを鎮める主人公は、自分のなかにみいだせぬのである。このやうな矛盾と、ジレンマから、彼女は自らを死によつて解決することのみが、幸福であるやうにかんがへる。彼女は、要吉にあてた手紙のなかで、矛盾に矛盾を重ねて終に無に歸するほかはなく、いまは、すべてを超越した心境にあるといひ、「私の最後の興味は涅

槃寂靜の日に繋がれ居り候。この日を味はひ楽しまむがために候。……私に取りて死が唯一の嚴肅なることに残り居候——」「……我寂滅の日は、やがて君が寂滅の日と覺悟したまふや。……」と、かきそへてゐる。いまは「我なく、人なく、無なり、空虚なりといひながら、死出の旅路に男を誘ふことは忘れてはゐない。彼女の自己的な復讐欲の最後のはばたきである。

因襲をすてたばかりではなく、自己の方向に男の意思を屈服させようとする彼女は、その征服心において、かつて類例をみないものである。その愛情は、あくまで自己的であり、獨占することにあこがれ、征服の情熱にうゑてゐる。要吉は、いつもそれにびつくりしながらも、彼女の病的な愛情に、やはり魅力をもちつゞけてゆく。「私の戀は復讐だ、痛切な復讐。」だと、さげふ朋子は、包みから小刀をだし、充たされぬ愛情に昂奮して、「私の肉を裂いて——血を啜つて下さいまし。……」と、さへ哀願する。「趣味としても可厭な趣味だ。一種の偏狂かも知れない。」と、要吉にいはせるやうに、朋子のかうした昂奮の態度には、近代における自己的な戀愛の、異常な破綻は、かくしおほせない。男の社會から、自由であることによつても充たされない愛情、おのれが自分の主人公でありながら、みづからが行動の支配者になれぬといふ二重心理の分裂は、か

やうに朋子たち、近代の女性を、おほくの悲劇にさそひこんだ。

つひに、二人は、たがひにちがふ目的のもとに、朋子は、男にたいする憎悪から、「自分を滅した男を滅さすには置かない」といふ復讐の心理から死をねがひ、男は、女に敗れたといふ自己卑下や、自分の藝術的戀愛が失敗にをはつたといふ女への憎悪から、そろつて死の旅に出る。

しかし、この死は不成功にをはる。死をひかへた瞬間のはげしい對立において、朋子の自己尊重は、頂點にたかまる。

つぎの文句は、旅の宿で、要吉にたいする憎悪をこめて、朋子が書いたものである。

我生涯の體系システムを貫徹す。われは我が Cause に因つて斃れしなり。他人の犯す所に非ず。

三月二十一日夜

眞鍋朋

今一枚には、

拜啓、我が最後の筆蹟に候。今日學校に行きませんと申せしは、實は死すとの事に候。願はくば君と共ならざるを許せ。君は知り給ふべし、われは決して戀の爲めに人の爲めに死するものに非ず。自己を貫かんが爲なり、自己の體系システムを全うせむが爲なり。孤獨の旅路なり。天

下われを知るものは君一人なり。我が二十年の生涯は勝利なり。君安んぜよ。而して萬事を許せ。さらば——

明治四十一年三月廿一日

この手紙の宛名は、友人にしたが、よませる相手は男であつた。自分の死後、この遺書をもしよんだとしたら、男はひどく失望するだらう、おそらく悶死するだらう。朋子はさういふ残酷な想像をたのしみながら、「片頬に双のやうな冷笑」をうかべた、と描かれてゐる。

しかし、男はより妥協的である。女が、男の腕に身をゆだねたまふ、そつとふところから短刀を出して、男の手に握らせると、男は、それを握つたまふたちろぐ。まるで、水に溺れる女のやうな聲で「ねえ貴方は」と、男は哀願した。「貴方は私の爲に死に、私は貴方の爲に死ぬ。左様言つて下さい。私を愛すると、唯一言ただ一言。」しかし、女は、それにたいして、いつまでもいへぬと、敵意を示して泣くばかりであつた。およそ、朋子の自己尊重と、自己中心意識のあくなき強情とは、このやうに執拗な粘りづよさをもつてゐた。

たがひに自己の意思をまもり、主張はしたが、女はつひに、男の意思にしたがはず、自主性を

まつたうしたといふ點で、朋子は、たしかにこれまでの小説にあらはれぬ積極的な意思をもち、男のわがまゝな、趣味的な愛情にくだかれぬつよさをもつてゐる。つねに、ある種の緊張と、充足感とにうゑてゐるところにも、彼女の生にたいする潑刺さがある。だが彼女は、みづから二重に分裂する精神を支へるために、戀愛が必要であつた。戀愛によつて、たえず精神を燃焼させてゐなければ、彼女の生命は充足されなかつた。だからこそ、彼女は、不満をかこちながらも、おのが青春のすべてを、男に傾けずにはゐられなかつた。そこに彼女の弱點もあつた。つまり自主的に、戀愛をもとめ、えらぶといふのではなく、自己の生命の支へとして、よぎなく戀愛にとびこみ、しかも、その戀愛が、つねに、あたへる愛でなく、うばふ愛により、愛の獨占によつてよみがへらうとするところに、彼女のエゴイズムのジレンマは明瞭である。

このやうなジレンマにとりつかれ、近代の病的な心理の犠牲となつて倒れた朋子は、近代エゴイズムの末路と、その性格をあますところなく展開したといへるだらう。彼女の愛情は、男の世界の掟にしたがふことから解放された慢心のはてに、自己優越の増長にふけりすぎたのである。そして、彼女の破滅は、もちろん、そのやうに愛情のあまりのエゴイズムに根ざしてゐた。包容

力を失つた偏頗な、自己的な愛情が、いかなる犠牲の途をたどらねばならなかつたか、そこに明治文化が、ある頂點に開花したころの、教養ある女性のおひだにしばしばみられた悲しむべき傾向が暗示されてゐる。

この小説「煤煙」は、作者が、ダンヌチオの「死の勝利」を自身の生活のうへに実践しようとして描いたものと、傳へられてゐる。「死の勝利」は、近代の病的な戀愛の一つの典型だといはれてゐる。このなかのジョルヂオは、愛にたいし、女性にたいして魅惑されながら、そこへ熱情をもつて没頭できぬために、たえず相手のイッポリタを苦しめてゐる。彼は、悦びのまつたよなかにおいて、冷笑をかんじ、相手をひたむきに愛しながら、他の女性のおもかげの忍びよるのを消すことができない。そのやうに、自分が二重の心理に分裂してゐるゆゑに、相手の愛情の絶對性を信ずることができず、おのれをさいなみ、相手を残忍にとりあつかふはめとなる。このやうな男の不信は、愛情のうらに憎惡を、喜悅のかけに悲哀をたやすことなく、そのやうなジレ

ンマから愛情の表現は、いよいよ畸形化されてゆき、はげしい焦躁をまじえざるをえない。

一方、女のイッポリタは、また、彼の焦躁的な愛情についてゆけぬのをかなしみ、いつも愛人を肉感的に自分にむすびつけて置きたいといふ慾望と、彼を独占したいといふ要求にせきたてられてゐる。そのやうな、矛盾した分裂と、なにもものをも信することのできないといふ虚無におちたジョルヂオは、つひに女を絶壁に誘つて、あひともなつて共同の死のなかに轉落しようとするのである。心理の破綻を死によつて解決しようとする結末ばかりでなく、愛情における憎悪と、反感の近代的な分裂においても、この小説は、「煤煙」に似てゐる。また、ジョルヂオの通俗な戀愛をきらふ貴族性と、要吉の藝術的戀愛の心理にも共通性はある。しかしジョルヂオと要吉、イポリッタと朋子の性格は、かならずしも一致したものではなく、むしろ對立するところがすくないが、もつともその差の明瞭なところは、朋子の特徴が、ジョルヂオの心理的二重性と、イポリッタの占有慾とをかね具へてゐるところだ。いはば、朋子は、「死の勝利」の二人の主人公の特質を、ひとつのものとしてあたへられてゐる。そして、ジョルヂオにおける不信の表情だけが要吉に残つてゐるけれども、「死の勝利」におけるはげしい虚無感と焦躁は、「煤煙」にはかんじら

れない。

いくたの相異は、まぬかれないとしても、「煤煙」は「死の勝利」と似て、やはり近代的戀愛の病的な展開として共通するところの多いものである。このやうな焦躁的なエゴイズムの悲劇は、おのれが、おのれの主人公となる實際的な力を失つたところにはびこる。おほむね、無力なインテリのあひだにこのやうな悲鳴がさゝやかれた。朋子の、自己以外になんらの興味もないといふ占有慾のつよさも、實生活において、自分が自分の主人公になれぬ無力感の反動である。實生活において、無力なればこそ、その心理的な希求は、病的な蒼白さで燐光のやうにひかつたのである。このやうに、現實における敗北にめげず、心理的にのみ理想をもとめ、悦びをかんじようとする女性は、藤村の「新生」^{*}における節子など同類である。あるひは、近代的な愛情の、ひとつの動搖したがたとして、分裂するところをもつ女性としての朋子は、昭和に現はれた「寢園」の奈奈江を、胎内にはらんでゐたとさへいへるかも知れない。たがひに、なやみの表情や、犠牲の過程はちがつても、おなじく、ともに近代の病的な心理に影響されてゐる。こゝろは二重にさかれ、生の目標が、闇にとざされつゝも、彼女らは、まづなによりも自己に忠實であることによ

つて、眞實の光をまちあこがれたのである。

* 島崎藤村の「新生」は、大正のなかばに描かれた。中年の作家岸本は、過失から姪節子とはなれがたい愛情にとらはれるが、岸本の謙虚な懺悔と、人間的理解によつて二人の愛情を淨化しようとする。二人は、つひに習俗の掟にしたがつて現実的にはなれるが、心理的には、永遠の伴侶として幻想の世界に生きうると信じえるやうになるといふ沈痛な人間記録である。

4.

「虞美人草」に描かれる藤尾も、當時の教養ある女性の一人として、興味ある性格で行動する女である。

藤尾には小野さんがある。小野さんは詩人で博士論文を書いてゐる。彼には恩師の令嬢小夜子と約束がある。學業を終へた曉に晴れて夫婦にならうといふ約束がある。だが小野さんは彼女を好まない。彼には藤尾といふ教養ある女性がゐる。

藤尾は文學を解する女である。趣味と言ひ、嗜好と言ひ、小野さんにびつたり合致した女性である。藤尾には宗近といふ亡父のゆるした男がある。宗近は、「顔も體軀も四角に出来上つた」無難な男である。外交官の試験に落第しても平氣でゐる男である。宗近は藤尾の兄（甲野）の親友である。だが、宗近は藤尾に嫌はれてゐる。藤尾には「趣味を解し、愛を解し、濃厚な君子」の小野さんがついてゐる。小野さんは藤尾に英語と文學とを教へに通つて來る。

小野さんの博士論文はなか／＼進まない。博士論文を書く暇が見つからない。藤尾と會ふのが忙しい。藤尾の母も小野さんを氣に入つてゐる。武骨者の宗近はしよは嫌はれてゐる。宗近の人格を知つてゐるのは甲野さんと糸公（宗近の妹）だけである。

甲野さんは哲學者である。生存と變化の意義を探求する哲學者である。彼には妹と母とが好めない。狡猾と猜疑で固まつてゐる母が好めない。母は後妻である。藤尾は後妻の娘である。父は何年か前に逝つてゐる。母娘も甲野さんとは折りあへない。彼が賢く善人であるゆゑに折りあへない。

小野さんは相變らずやつて來る。藤尾は小野さんとゐるときが幸福である。小野さんも満足で

ある。

あるとき、恩師の井上孤堂先生が娘を連れて上京する。小野さんと交した默契を實現させるために東京に住まうといふのである。小野さんは世話をうけた恩師のために家をさがし、不足の家財道具も手傳つて買つて来る。孤堂先生は上京の理由を話す。だが小野さんには博士論文がある。

「お前の方にも色々都合はあるだらう。然し都合はいくら立つたつて片付くものぢやない」

「さうでもないです。もう少しです」

「だつて卒業して二年になるぢやないか」

「ええ。然しもう少しの間は……」

「少しつて何時迄の事かい。そこが判然してゐれば待つてもいいさ。小夜にも私からよく話して置く。然しただ少しでは困る。いくら親でも子に對して幾分か責任があるから——少しつてのは博士論文でも書き上げて仕舞ふ迄かい」

「ええ、先づさうです」

「大分久しく書いてゐる様だが、まあ何時頃濟む積りかね。大體」

「可成早く書いて仕舞はうと思つて骨を折つてゐるんですが、何分問題が大きいものですから」

「然し大體の見當はつくだらう」

「もう少しです」

「來月位かい」

「さう早くは……」

「來々月はどうだね」

「どうも……」

「ぢや結婚をしてからにしたら好からう。結婚をしたから論文が書けなくなつたといふ理由も出て來さうもない」

「ですが責任が重くなるから」

——「虞美人草」から——

小野さんには藤尾がある。詩を解し、人生を美しく解す藤尾がある。小夜子には氣の毒であるけれど、藤尾には代へがたい、小野さんは猶豫を乞ふて暇を告げる。

甲野さんも藤尾と小野の關係は知つてゐる。しかし、できうれば宗近に藤尾をやりたいと考へる。だが、自分を好まない妹にそれを勧めたくはなかつたし、また聞く藤尾でないことも知つてゐる。藤尾が喜んで承諾するのは家と財産をやらうといふ時だけである。

甲野さんは、この一物ある親娘と一緒にゐることが苦痛である。出来ることなら別れたい。辛抱はして見たが耐へられない。ある日母を呼んで家を出ることを告げる。藤尾にも家と財産をやることを言ひわたす。だが宗近のことだけは聞いておきたい。

「お前宗近へ行く氣はないか」

「えゝ」

「ない？ どうしても厭か」

「厭です」

「さうか。——そんなに小野が好いのか」

「それを聞いて何になさる」

「何にもしない。私の爲には何にもならない事だ。只お前の爲に云つて遣るのだ」

「私の爲に？——さう」

「兄さんの考へでは、小野さんよりも^{はる}の方がよからうと云ふ話なんだがね」母が言ふ。

「兄さんは兄さん。私は私です」

暫らくして

「兄さん——あなた小野さんの性格知つて入らつしやるか」

「知つてゐる」

「知つてるもんですか。——小野さんは詩人です。高尚な詩人です」

「さうか」

「趣味を解した人です。愛を解した人です。濃厚な君子です。——哲學者には分らない人格です。あなたには一さんは分るでせう。然し小野さんの價値は分りません。決して分りません。一さんを賞める人に小野さんの價値が分る譯がありません」

「ぢや小野にするさ」

「無論します」

宗近は、外交官の試験に及第する。彼は藤尾を嫁にもらはうと父に相談する。糸子にも相談する。だが一様にやめた方がいいと言ふのである。彼は甲野さんにも聞いて見る。「藤尾には小野がゐる」宗近は未練げもなくあきらめる。

小夜子との破談を小野さんからひき受けた浅井が、孤堂先生のところから歸りを宗近の家へ廻る。就職口を探してもらひたいと言ふのである。その機会に小野と小夜子との話ができ、浅井は彼に事情を聞かせる。宗近は小野さんのところへ人倫の道を説くために談じ込む。

小野さんは藤尾と大森にゆく約束がしてある。三時には新橋の停車場へ藤尾がやつて来るはず。しかし小野さんは決意した。自分の行爲は、不本意だつたと宗近に言明する。小夜子との結婚も承諾する。宗近は、小夜子を呼び寄せ、三人して甲野さんの家へ乗りつける。糸子はすでに、甲野さんを迎へに来てゐた。藤尾が待ちばけを憤りながら戻つて来る。宗近は、あらためて藤尾に小野さんの妻を紹介する。

「藤尾さん、これが小野さんの妻君だ。——まだ妻君ぢやない。ないが早晚妻君になる人だ。五

年前からの約束ださうだ」

「嘘です。嘘です。——小野さんは私の夫です。私の未來の夫です。あなたは何を言ふんです。失禮な」

「僕は只好意上事實を報告する迄さ。序に小夜子さんを紹介しやうと思つて」

「わたしを侮辱する氣ですわね」

「好意だよ。好意だよ。誤解しちや困る」

「宗近君の云ふ所は一々本當です。是は私の未來の妻に違ひありません。——藤尾さん、今日迄の私は全く輕薄な人間です。あなたにも濟みません。小夜子にも濟みません。宗近君にも濟みません。今日から改めます。眞面目な人間になります。どうか許して下さい。新橋へ行けばあなたの爲めにも私の爲めにも悪いです。だから行かなかつたのです。許して下さい」

激昂と失望から藤尾は自殺する。

かうして藤尾は、當時の教養ある女性たちがおちこんだと同様の墓穴に、わかく美しいその肉

體を投げこまねばならなかつたのである。いふまでもなく彼女は、自尊心のひとなみならず強い女であつた。自尊心が強かつただけに、小野を失つた打撃に失望するより、小野にうらぎられたといふ屈辱のおもひにたへられなかつたのである。彼女にとつては、戀愛に敗れることよりも、自尊心を傷つけられることの方がより忌はしかつたのだ。「願で相圖をすればすぐ來るのみならず、來る時は必ず詩歌の璧を懷に抱いて來る。夢にだもわれを弄ぶの意思なくして、滿腔の誠を捧げてわが玩具となるを榮譽」とする小野にうらぎられるとは、不面目といふより屈辱のきはみである。

自分は彼を、愛する資格が自分にあつたから彼を愛したのではなく、愛せられるべき資格が自分にあつたから愛せられたのだ。「わが眼、わが眉、わが唇、さてはわが才を認めて、只管に渴仰」したればこそ、愛をあたへたに過ぎないのである。それにもかゝらず彼は、牛を馬に乗り替へたのである。これが辱めでなくてなんであらう。彼女は憤らずにはゐられなかつたのである。なぜかならば、「文明の淑女は、人を馬鹿にするのを第一義とし、人に馬鹿にされるのを死に優る不面目と思ふ」からであつた。

詩を解し、愛を解し、人生を解すと考へたこれらの女性たちは、その淺墓な理知と聰明のほこりゆゑに、おのれ自身をさへ欺いて行動しなければならなかつたのである。彼女らの虚榮心といふものは、西歐から移された文化を裝飾的に、一から十まで身につけて生きねば満足できなかつたのである。したがつて「女大學」などに説かれてゐる教訓をまもつて、家庭につつましく生きることなどは、愚劣な方式だとかんがへた。亡ぼされるべき遺物だと考へた。なにごとをも、新しい様式に置きかへねば満足できなかつたからである。

「虞美人草」に描かれる藤尾は、かうした意味における犠牲の典型である。彼女が他人に誇らうとしたものは、女のもつ特有の美點や長所ではなくて、じつは、新しい知識や教養や趣味だけなのであつた。だから、糸子やその他の女性を輕蔑したのである。

藤尾のやうな女性を見て、おそらく讀者は淺薄な教養に自惚れた女の厭らしい印象をあたへられるにちがひない。しかし、當時に侵潤しつつあつた西歐的な物質文化に影響された女性たちのあひだには、かうした傾向の女が、數かぎりなくゐたのである。そして彼女らは一樣に、趣味や身振のなかに新時代の裝飾をとり入れることで得意だつたのだ。舊い様式を極度に蔑視し、新し

い好尚にみわけもなくあてがれたのである。かうした一般の傾向は、いきほひ女性たちのモラルにも反映し、實質的なもの考へ方や、感情の動きに秩序をうしなはせるにいたつたのである。戀愛に敗れたことよりも、自尊心を傷つけられたことを「死にも優る」屈辱だとかんがへる藤尾は、「新しい女性」であることを自負する女性群の代表的な存在ともいへるだらう。これは「蜃中樓」の敏子や、「煤煙」の朋子とはちがつた意味の「新しい型」の女性であることはうたがへぬ。しかも、その生活意識や、モラルなどには、多分に共通するものがあるやうにおもはれる。これは、自分といふものを、一個の人格として考へるやうになつた、自我意識のあらはれとして注目に値する現象である。つまり、自分の運命を自分自身で護らうとする自覺が、女性たちの生活感情や思考のなかにやうやく芽生へかけてきたのである。

5。

このやうな機運といふものは、社會的には日清戦争後の日本近代化の急速な發展にともなふ物

質生活の反映ともかんがへられるが、一般文化的には、文學者のあひだに澎湃としておこりつたあつた啓蒙的な文學運動などが、かなり影響力をもつてゐたやうにも考へられる。それは彼等が、ともかく素直で、新しく、すが／＼しい心の眼で、宇宙と人生とを觀ることをはじめてその時代の若い人々に教へましたからである。

「春」の作者藤村は、この方面における先驅者透谷の戀愛にたいする態度を、青木の名でつぎのやうに書いてゐる。

「戀愛は剛腹な青木を泣かせた程の微妙の音楽でもつた。此世に屬いたものと云へば、名でも、富でも、榮華でも、一切の希望を置かないと云つたやうな、一徹無垢な量見から、實世界の現象悉く虚偽であるときまで觀じた程の少壯な青木ではあつたが、唯一つ彼の眼中に虚偽でないと見える物は戀愛であつた。彼のやうに戀愛の思想を重んじ、またそれを憚らず發表したものも少からう。彼に言はせると、戀愛は人生の秘鑰である。戀愛あつて後に人生がある。戀愛を抽き去つた日には人生何の色も味もない——」

新時代のあけぼのに浪漫的な情熱をあふられたと同時に、一めん舊世代との別離に懐疑懊惱をさけられなかつた透谷たちは、この人生や社會にたいして、また生活や戀愛にたいして、このやうにみづ／＼しい自己の世界をきりひらいて行つたのである。文學者のあひだに起つたこれらの運動が、當時の思潮にいちぢるしく影響したのは偶然ではない。男女の交際にも益軒の「女大學」式の不自由な拘束は否定さるべきものとして、一部の女性たちは活潑に自己自身の主人公として行動してゐる。「蜃中樓」の敏子にしても、「虞美人草」の藤尾にしても、「煤煙」の朋子にしても、「地獄の花」の富子や園子にしても、娘としては親のため、嫁いでは良人のため、老ひては子の爲めにおのれの悲喜をころし、あきらめの人生に殉ずるといつた「十三夜」のお關のやうな、滅びの人生に終始してはゐない。

もちろん、これらの女性の傾向が、當時における男女關係の大勢でありえたのではないが、一部の先進的な女性群のあひだにおける性道德や、戀愛や、結婚觀にある種の自主的な限定をあたへたことは事實であらう。そしてまた、その意味ではたしかに進歩的だつたのである。

* 貝原益軒の「女大學」は、徳川時代の女性道德の標準であつた。「女は陰性也、女は夜にて暗し、故

に女は男に比るに愚にて……」といふ女性の侮蔑にはじまり、女は夫にひたすら仕ふるもの、「婦人は別に主君なし天を主人と思ひ敬ひ……」「女は夫を以て天とす返々も夫に逆ひて天の罰を受へからず」といふ風に夫は天とひとしい絶對の關係におかれてゐる。

明治開化思想の先驅、偉大な啓蒙家であつた、福澤諭吉の「女大學評論」や、「新女大學」などに説かれてゐる兩性の道德律は、おほくの人も指摘するやうに、當時における進歩的な意見として著名である。

「夫れ女子は男子に等しく生れて」といふ冒頭で書かれた、前後二十三ヶ條の「新女大學」には、婦人の獨自な條件に立つての德育や知育や體育の均齊が、「自ら屈す可からず、又他をして屈伏せしむべからず」といふ自然の合法が、人間生活の理念として説かれてゐるだけでなく、結婚生活におけるたゞしい夫婦關係の確立や再婚の自由や、婦人の經濟的自立性にまでおよんでゐる。たとへば、娘の結婚にあつて、生計不如意でなかつたら、「娘を手放して人の妻にするも萬一の場合に他人を煩はさずして自立する丈けの基本財産を興へて生涯の安心を得しむるは是亦父母の本意なる可し。」といふ用意周到さで、福澤は、ふるい因襲から脱する道を説いた。

詠歌には巧みなれども、自身獨立の一義について夢想だにすることなく、數十百部の小説を讀みながら一冊の生理書もよんでゐない女性のおほいのを慨嘆して、「學問の教育に至りては女子も男子も相違あることなし」であるにもかゝらず、日本のやうに女の學問を等閑にしてきた國では、その段階にいたるまでに相當の年月が要るだらうと見てゐる。「文明普通」の程度として、「殊に吾輩が日本女子に限りて是非ともその知識を開發せんと欲する所は、社會上の經濟思想と法律思想と此二者にあり」と言つて、社會生活で女が無力なのは、この經濟や法律にたいする認識の缺除がもつとも大きな原因だと説いてゐる。

もちろん、これを今日の人々の眼から見れば、「女性に本來優美なるべきものなれば、議論をするにも物柔らかに、激昂してはならぬ」とか、「家を治め子を育てるは女性の天職なれば、女子は學問技術に於て男子に及ばざるが當然」だといふ風に結んでゐるあたりは、不満をかくせない底のものにちがひないが、キュリー夫妻が物理學校の粗末な實驗室で、ラヂウムの發見に成功した翌年の明治三十二年といふ年代の日本に、はじめて公にした性道德の意見としては、まことに新鮮な倫理觀でもあつたわけである。

* 明治五年にはやくも、「學問のすゝめ」といふ書を著し、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と説き、萬人の權利の平等を論じ、學問を鼓舞した福澤が、「夫れ女子は男子に等しく生れて」と、「新女大學」で、婦人の獨立をときだしたのは明治卅二年である。いかに諸改革が婦人問題を追ひ越しておこなはれ、説かれねばならなかつたかがわかるはずである。

かうした一般情勢が、女性たちの自覺をつよく動かしたことは事實だが、彼女らが社會から負はされた立場といふものの大勢は、依然として無力な存在でしかなかつたのである。言ふまでもなくそれは、この時期の社會、經濟の段階が、女性の社會的進出をうながすやうな情態にまで高まつてゐなかつたからである。女性たちは、獨立した經濟的基礎を得やうにも途がなかつた。家内手工業の域をやうやく脱した近代産業の展開はあつたが、大規模な勞働力を必要としなかつたゆゑに、女性たちが生産に引込まれるやうなことはなかつたからでもある。

したがつてこの時期の女性たちは、學問を修めて教員でもなる以外に、獨自の生活地盤を得ることはできなかつたのだ。しかし、これはなにも學校教育萬能の時代だからといふ意味ではない。學校教育萬能の風潮は、たしかに當時の生活理想のひとつとして顯著ではあつたが、たんにその

反映として、女性たちが體裁のいい職業を選ぶために學問を志ざしたわけではない。この間の消息をつたへる女性に、「魔風戀風」の初野がある。彼女の生活が讀者に訴へるものは、襲ひくる經濟生活の不安にたち向つて、資力を失つた女性が、いかにすさまじく飛沫しぶたいてくる世の荒波にたかひを挑まねばならなかつたかといふことの事實である。

弱い女の身にとつて、これは痛ましい抵抗であり、足掻きでもある。しかし、かかる足掻きに身を挺しつゝ、初野は自己の生活の運命をきり拓いて行つたのである。

6.

萩原初野は妾腹の出で、異母兄や親類や、その他、彼女の妾腹の出であることを知つてゐる郷里の人々からは、つねに嘲罵と冷笑とを浴びせかけられてゐる。彼女はどうかしてその恥辱を雪ぎたいといふ一念から、東京に出てそのころの女子最高の學府に學んだ。彼女はそこを卒業し、立身出世をして、自分を嘲弄したものどもを見かへしてやりたいと意氣こむのである。そのやう

な決意から彼女は一心をこめて學業にいそしんだ。

たまたま、創立十周年の祝賀會が催され、彼女は英語の御前講演を聞えあぐべき光榮に浴し、胸をはづませて颯爽と登校するのであるが、その途次、不幸にして負傷する。かぎられた學資以外に送金してもらへぬ境遇の初野は、病院へかつぎ込まれたが入院料が心配になるのである。異母兄のひどい仕打を逃れて出奔した妹を、金を工面してやうやく郷里へ歸らせたい矢先であつてみれば、どこをどうたゞいても金が出るあてはない。登校用の自轉車でも賣つてこしらへるよりほかに途はないのだが、その自轉車も買手はないといふ。

三週間かからねば全癒しないといひわたされてゐるにも拘らず、初野は十日に満たない身體を下宿に運んでくる。そんな折、下宿へ出入りする殿井恭一といふ洋畫家が、彼女の急場をお救ひしたいと申しでる。

萬策つきた彼女は、見も知らぬ殿井から融通をうけ、病院の拂ひやら看護婦の御禮やら、とどこほつた下宿の拂ひにあてやうと喜んで出かける。だが病院へ来て見ると、もう自分の拂ふべき入院料は誰かの手によつて濟まされてゐる。意外である。ひろい東京に見知つた人のない初野は、

感謝しようにも心あたりがまるでないのである。不本意とは考へたが、殿井には返金する。

きまつた學資以外に一文も郷里から送つて來ないことは判つてゐるし、またそれだけで現在の物入りのあと片付けができないことも承知はしてゐるが、だからと言つて、他人の援助をうけることは不名譽である。しかも、大事な夏の卒業試験もちかづいてゐる。社會に出て好地位を得るも、名譽をうけるもいつに卒業の成績によつて決まるのだ。それを思へば、一時もかうして遊んでゐる暇はない。かりにいま退院したために、すこしぐらゐ片腕がきかなくなるとも、生涯の榮辱浮沈の岐路にのぞんで、何を怖れ、何を躊躇する必要があらうか。初野は、我とわが身にさう言ひ聞かせて、決意の臍を固めるのであつた。

しかし殿井は、彼女の辭退をもかまはず、執拗に言ひ寄つてはつきまとふ。下宿の主婦がとりもち役なのである。殿井の厚志がやましい根柢から出てゐることを知つた初野は、彼の誘惑に負けまいと努力する。

そんな折、ふたたび妹が出奔して下宿へ轉げ込んで來る。兄の虐待の益々つものるのに堪へられなくなつたと言ふのである。彼女は、この血のつながつた妹を、どんな危険の障害にさらされて

も面倒しようと思ふと決心する。ところが翌日、兄から意外な電報がきた。

ナミ カネモツテニゲタ オサエテオケ。

お波が金を拐帶して逃げた——初野はどうしても信じがたくおもはれた。兄はすぐやつて來た。彼女は波が、そんな悪事をはたらく少女でないことを懸命に辯護するのだが、兄は聞き入れぬどころか、ますます激昂するばかりである。

「これは何だ、汝等二人申合せてした仕事だ。金を盗んだのも、逃げて來たのも、皆んな初の指圖だ。」

「兄様、何ですつて……何ですつて、それは貴方、あんまり失敬ぢやありませんか。」

「いや、それに違ひない。ふたり共謀になつて、此の兄に迷惑をかけやうと云ふんだ。此の室中を家探しするからさう思へ。」

「家探しでも何でもなすつて下さい。だけれど、若し無かつたら如何します。いくら兄さんでも、そんな言掛りをかけて、無かつたらどうするんです。」

「出なければ、警察の手を借りても出して見せる。ま、そつちへ退かんか。」

兄は無遠慮に机や本箱や文庫を、手あたりしだい探してゐたが、やがて鏡臺の抽斗に古新聞につつまつた女の紙入があるのを見つけると、掌のひらで叩いてからにツと眼をむいた。「これは何だ！」

波は事實金を持つて逃げたのである。初野はいまさらの如く驚いたが、考へて見れば、こんな少女の心をねぢ曲げるのも、結局は、兄夫婦の仕打のひどいのがしからしめた仕業であらう。二人はいつそ厄介になるまい。ならなくともやつて行ける。いやどうでもやり抜かう。彼女は腹を据ゑ、さう心に決意した。そしてきつぱりと關係を斷つことを宣言する。

「これから今後は貴方のお世話には成りません。學資も入りません。私と波と二人は、死んでも貴方の厄介にはなりません」

かうして初野姉妹は、いよいよとめた逆境に立向はねばならなかつたのである。

卒業試験までには三ヶ月もある。だが學資はおろか、下宿の拂ひさへない。姉妹のやうに親しく交はつてゐる學友（芳枝）に金の無心を頼んで見るが、芳枝の父の破廉耻な行爲からかへつて夫人にうたがはれ、融通をうけるどころか、恥をかかされて歸つてくる。殿井は相變らず

いろいろの手管で言ひ寄つてくる。妹の波は、殿井から補助をうけてはどうかと姉にすすめるが、いちど變な行爲に出られてから初野は、彼の好意をうける氣はしなかつた。持物や身のまはりの物を金に代へてはどうにか急場も凌いでゐたが、不幸にも、初野は脚氣に冒され、物質的にも精神的にも身動きならぬ苦境におちいる。

押し迫つてくる生活苦に面して、彼女は泣かうにも泣けなかつた。あるときは、辛くとも郷里に歸つて兄の厄介にならうか、それとも、いつそ殿井に身をまかせてこの苦境を救つてもらはうか、ともかんがへるが、「なんぼ可弱い女でも荒い浮世の波をこゝまで漕ぎ來つて、すぐ手のとどく岸に上らずに、このまゝ押し流されてなるものか」と、ぢつと踏みこたへて辛抱する。しかし、金はどこからも浮いてはこなかつた。初野はせんかたなく、卒業までの約束でお波に女中奉公して貰ふ。

殿井は、波が女中奉公に出たことを知つて、初野に再度補助する旨を申出るが、彼女は頑としてうけ容れない。彼はせめて波だけでも自分の許に置いて面倒みてやらうと考へ、奉公先から暇をとつて連れもどす。芳枝は初野に、父母の無禮を詫びるために友達を介して了解をもとめる。

初野もそれを快く受け、卒業までの補助を芳枝に依頼する。

下宿をはらつて借家に移つた初野は、殿井にあづけておいた妹を無理やり引とりはしたが、芳枝の許婚の東吾が家出したことから、芳枝の援助が途切れ、ふたたび生活難に見舞はれる。東吾は、夏本子爵家の養子として育てられ、ゆくゆくは芳枝の夫となる人である。たまたま、東吾は初野のもとをおとづれ、生活費の足しにと言つて金を置いてゆく。東吾は以前から初野を戀してゐた。芳枝の夫になる身であることは知りながらも、初野を思ひきることができなかつたのだ。知れぬやうに病院の拂ひを濟ませたのも彼である。

彼は初野に一切を打明けて、將來の誓ひを迫つた。初野もひそかに東吾を慕つてゐた。しかし東吾は、義姉妹の誓ひのある芳枝の夫となる人である。彼女は芳枝に濟まないと思ひ、何度かあきらめようと決意するが、その都度、東吾に勵まされて思ひとどまる。東吾の出たあとの夏本家では、芳枝に婚をとらうとするが、芳枝は東吾以外に妻にはなるまいと決心して初野の許へ逃れてくる。芳枝の父母も縁談を斷念して東吾の行方を探す。

初野は進退に迷つた。自分の本心に忠實であらうとすれば芳枝をあざむくことになり、友情に

誠ならうとすれば、最愛の東吾を失ふことになる。「芳枝さんには濟まぬけれど、自分の幸福には代へられない」ところから、意をけつして芳枝には東吾の居所を偽つて教へる。

一方芳枝の父母や東吾の實家の親たちは、東吾の隠れ家突きとめ、そろつて押かける。一旦は除籍の手續を辯護士に依頼した東吾ではあるが、そして初野と將來の契をかたく交した東吾ではあるが、つひに親たちの言葉にしたがつて、初野を思ひ切つて夏本家へ歸ることを承諾する。ちやうどそのとき、東吾の許をたづねた初野は、縁側の物蔭でそれを聞き、憤りと悲しみに震へながら匿つてゐる芳枝の下宿へ引返す。あざむかれた口惜しさに、彼女は東吾が房州へ行つたと芳枝に告げてもどつて来る。偽られたとも知らず芳枝は、置手紙をのこして翌朝の船で房州へたとうとする。

芳枝から手紙が届けられた初野は、芳枝が悲壯な決意で出ていつたのを知つてあとを追ふ。船が出るころであつた。芳枝は救へた。だが疲労と傷心とで元氣をうしなつてゐた初野は、その場へ倒れ、病院へ運ばれたがほどなく息を引とる。病名は脚氣衝心であつた。

死の瞬間まで、卒業試験を気にしながら彼女は死んでゆく。故郷の母（實母）の卒業を待つてゐることや、殿井に逃げて行つた妹のことをはじめとして、邪慳な兄の手前、それから子爵夫人（芳枝の母）に罵られた口惜しさなど、三方四方を思ひまはせば、一日もはやく獨立自活の身になるよりほかに生きてゆく途のないことを考へて刻苦したにも拘らず、試験を一週間前にひかへて死んだのである。

あらためて説くまでもなく、彼女の自覺には、今日から見てもものたらぬ個所や缺點はあるのだが、しかし、ともかく彼女は、男のつくつた在來の社會が、女性をいかに慘めに遇してゐるかといふこと、およびこの慘めさから逃れるためには、女性に經濟的獨立がなければならぬといふことを痛感してゐる。この痛感あるがために、彼女の専門教育をうけてゐることにも、そこに非常な眞剣さが宿つた。ただ、今日から見ても足りないのは、彼女が、女性としての彼女自身の誇りの自覺を持つてゐないことである。彼女は社會的に、ただ男子に及ばざらんことを怖れた。女性は、男子に劣るべきものといふ潜在觀念が、彼女からはまだ抜けきらなかつたのである。

つまるところ、男女の對等感において、彼女の自覺は、まだ具體的な理解にまでたどりつかぬかつた。とは言へ、その意志の強固であることにおいて、獨立心の旺盛なことにおいて、しかも、それが二十年代の新らしい女性によく見るやうな、一種の附焼刃からではなく、まったく彼女自身の内心の要求から來てゐる點において、その前の時代には見ることでできない、確固とした足場をきづきあげようとする女性であることは事實であらう。

一部の人々は、かうした女の生活力や意志の強さを、當時移植されつつあつた西歐の個人主義思想などの影響とも見てゐるが、初野の場合などにそれを當てはめるのは必ずしも至當だとは思へない。なぜならば、彼女は西歐思想に影響されるまへに、おのれに襲ひかかると生活苦をきりひらく經驗において、自分の生活と運命とを支配するものが、社會や道徳でなくて、あまりにも多く自身自身の努力にかかつてゐることを痛感してゐたからである。彼女の生活態度や思考のつよさは、言ふまでもなくそこからきてゐると思はれる。だからして彼女の欲求には、生活のための打算と、ある種の計量とがたねに踏まれてゐたのである。彼女の生活にたいする考へが附焼刃でないのは、生活と思考とがはなれがたく結ばれてゐたからでもあつたのだ。前代の女性に見ら

れない意志の強さは、要するに、経済的獨立がなければ女性には救はれないといふ自覺が、彼女のかんがへの奥底にたえず意識されてゐたからではあるまいか。これは、「虞美人草」の藤尾や、「煤煙」の朋子には見られない傾向である。といふのは、藤尾の性格から、ゴーチエの「アントニーとクレオパトラ」を耽讀するやうな浪漫的な要素をぬぐひ去つた部分が、現實的になまなましくきはだつてきてゐるからである。おのれの運命を、己れ自身の自發的な意思と、實踐によつて開拓しようといふ傾向の芽生えは、かすかすの先進女性によつて觀念的にうけつがれ、觀念的なるがゆゑに、かぎりなき犠牲と哀愁の淵にのぞまねばならなかつたことは事實である。しかしその反面には、かうした現實生活との格闘を経て、あらたな自覺へと實質的に歩みはじめた女性たちの一群のあることは、注目すべき事柄である。

「魔風戀風」が書かれる二十五年もまへに、「私は何よりも先に人間です。あなたと同様に人間です」とノラを言はしめる、イブセンの「人形の家」は書かれ、五年おくれてモーパッサンは「女の一生」を書いてゐる。「クロイツェル・ソナタ」をトルストイが世に出したのは、「女の一生」が書かれた四年後の明治二十年である。影山英子や中島湘煙等の政治活動がやうやく影を没

し、中江・板垣らの運動が影をひそめて、下田歌子等の治警撤廢運動がおこる少しまへの明治二十年に、外國の作家たちは、かうして幾つかの小説や戯曲のなかで、女の人間性を問題にしてゐる。

7.

「人形の家」のノラは、青年辯護士ヘルメルと結婚して幸福に暮してゐたが、二年ほど過ぎたころ夫は病氣になり、轉地療養することになる。ノラは夫に内密で療養費を才覺するために、クログスタットといふ男から借金するのであるが、保証人におもひつく人がないため、數日前死んだ自分の父をまだ存命してゐるやうに僞筆で署名しておく。彼女は愛する夫のためにはかつたこのやうな僞りをやむをえぬ應急の處置だと考へた。轉地さきから健康をとりかへして歸つたヘルメルは、しだいに地位をかためて大銀行の支配人の位置を占める。このあひだにノラはすでに三人の子の母となつた。家計を注意ぶかくきりもりしながら、夫には内密の借金をわづかづゝながら

返済してゐた。そのやうな事情を知らぬヘルメルは、ノラがたえず小遣をもとめるので「うちの無駄使ひやさん」とも呼び、またそのたびにあかるくはしやぐので「小雲雀」とか、「栗鼠」とか呼んで愛撫の眼をしばだゝいた。ノラは幸福であり、充足した境涯にあるのをかんじた。

ノラの債権者であるクログスタットは、リンネ夫人といふノラの舊友と戀愛關係にあつたが、リンネ夫人に捨てられるとともに放埒に身をもちくづす。さうしてゐる間に、彼の勤めてゐる銀行に、新しい支配人としてヘルメルが就任する。そのために彼クログスタットは誣首されるやうな破目におちいる。やむなく、彼はノラの文書偽造といふ弱點をつかんで、彼女をそゝのかす。つまり、ノラから、ヘルメルに誣首することのないやうに、懇願させるのである。しかし、そのやうな複雑な事情を知らぬヘルメルは、ノラのねがひをうけつけようとはしない。危機は足ばやにせまつて來た。

かくして、クログスタットは最後の手段をとらねばならなかつた。もし、自分の要求がとほらぬとすれば、ノラの偽造事件を公開して、ヘルメルの社會的地位を葬るぞといふ脅迫状を發送する。なんらの經緯に通じないヘルメルが、その脅迫の手紙を開いた刹那、ノラをどう處置するだらうか。

ノラのこゝろはせはしく波だつた。いまこそ、いやおうなく、夫の愛の眞偽がたしかめられるのだ。どれほどの眞實が自分にかたむけられてゐるか。

だが彼女はひそかに信ずるところがあつた。自分のしたことは、すべて夫のための一時の方便に過ぎぬのだから、たとひ社會的に公開されたところで、道徳的な恥辱となることはあるまい。また、男らしい勇氣のある夫は、罪を一身にひきうけて法の裁きをさへおそれなくうけてくれるだらう。その時は、自分も投身なり何なりして愛の責任を果さう。夫は多分、あはれむべき妻だといふいはりから一さいを許してくれるにちがひない。

しかし、それは甘い幻想にすぎなかつた。クログスタットの脅迫状をひらいたヘルメルは、ふるへる憤りと恐怖の表情もあらはに、唾をとばしてノラを罵倒した。おれの社會的地位、榮譽のいつさいがこれで終りを告げるではないかと、ヘルメルの憤怒は、ノラの意想を越えたはげしさであつた。そこへクログスタットの第二信がとどく。そして形勢は逆轉するのである。

第二信がかゝれたのは、リンネ夫人がノラの苦境に同情して、クログスタットとの愛の復活を

代償に、ヘルメルを脅迫しないやうにたのみこんだからである。彼女の請ひを容れたクログスタ
トは、早速偽造文書をその手紙に同封してきた。ヘルメルは、第二の手紙をながめて狂喜する。
——これで私は救はれた——と。かたはらで見まもつてゐたノラは、飛立たんばかりの夫に冷や
かにたづねる。——するとわたしは——。

「無論お前もだ」と言ひ、つけたして、「おそろしい荒鷹の爪から助けだした小鳩のやうなお前を、
自分のひろい翼で覆ふてやる——男が自分の妻の過失を許した時ほど、穏かな美しい氣持はない。
女はその時から二重の意味で男のものとなる。妻であると同時に、子供でもあるから——」しか
し、ノラはこのやうにうつて變つた寛大さの底をみきはめずにはゐられなかつた。彼女は、これ
までの八年間自分はたゞ夫のきまぐれに弄ばされる玩具以上のものでなかつたこと、人間的な誠
實をとほして愛されなかつたことを自覺した。この事實を彼女は反省してつぎのやうにいふ。

「まあわたしはこの家で乞食のやうに、ほんの手から口のくらしをつゞけて來たわけですわ……」
たしはあなたに藝當をしてお目にかけて、それでくらしを立て、來たわけですわ……」
このやうな自覺から彼女はためらはず家出を決心する。ノラは、夫が喜んでゐるすきに、衣裳

を脱ぐために別室へゆく。だがあまり手間どるので夫は扉口からのぞき込みながら訊ねる。「お
前は何をするんだね」とすると、ノラははつきりした口調で、「カウボウ假裝の衣裳を脱ぐのです」と諷刺的
に答へる。彼女は身仕度を済ませて、家出を告げる。

ヘルメル お前の家庭も、お前の夫も、お前の子供達もふりすてて行くのだね。考へてごらん、
世間がなんといふか。

ノラ 世間なんかなんと申してもかまいません。わたしはさうすることが、自分のために必要
なのです。

ヘルメル いやはや、とんでもない奴だ。だがそれではお前の神聖な義務が済むまい。

ノラ わたしの神聖な義務とは何でせう。

ヘルメル それを今更私に訊かうといふのかね。夫に對し、子供に對する義務さ。

ノラ わたしにはほかに、同様神聖な義務があります。

ヘルメル そんなものがあるものか、あるならどんな義務だかいつて見ろ。

ノラ 私自身に對する義務です。

ヘルメル 第一に、お前は妻であり、母親である。

ノラ そんなことはもう信じません。私は何よりも先に人間です——あなたと同様に人間です。

かくてノラは、もはやヘルメルへの愛情は微塵にうちくだかれたことを断言し、自己をみづからの手で築きなほすといふ決意のもとに、「人形の家」を去つて行くのである。

八年といふ歳月を押しこめてゐたこの家は、自分にとつて意味がなかつただけでなく、夫にとつても、遊戯室でしかなかつたのではあるまいか。彼女はヘルメルとの結婚が、自分にとつて少しも幸福でなかつたことをかんがへ、つぎのやうに訴へる。「わたしは實家ではおとうさんの人形つ子であつたやうに、こちらへ來てはあなたの人形妻でした」と。そしてその人形妻が、夫の療養費をこしらへるために、内密でクログスタットから借金して轉地させたのも知らず、偽造文書の罪だけは名譽のために妻に負はせる。

夫の自分にたいする眞實の愛とはなんであつたのか。ノラは奇蹟のおこることを望んだ。すなはち、クログスタットの要求など跳ねのけ、自分からすすんで出て一さいを自分の身に夫がひき

うけてくれるだらうことを。

しかし、一さいは明白になつた。彼女は言つた。「あなたはご自分にふりかかる心配がもうなくなつたとすると、もう一切の危険がなくなつたと——あなたは今更なんのこともなかつたやうな顔をして、そつくりもと同じやうに、わたしはまたあなたの雲雀さんになる。あなたのお人形になる。だがわたしの心には啓示おかしが閃めきました。八年のあひだこの家で、わたしはよその他人と同棲して、三人までも子供を生んだのだと——。あゝ、それを思ふだけでもたまりません——」すると、ヘルメルは言ふのである。「しかし、いかに愛する女のためにだつて、名譽を犠牲に供する男はないぞ」ノラは首を振つた。「でも何百萬といふ女はそれをしてきたのです」何百萬といふ女性が、何千年も昔から子を生んで育てるとおなじやうに、本能的に盲目的に、肉體も靈魂もあげて無條件で男のまへに捧げてきた。これが女にとつて生れながらの一つの道德であり、義務であつた。ところが、法律は——男子のつくつた法律は、それとは別な形式一片の道德や義務をみとめて、女たちのさういふ、人類自然の愛情に根ざす献身や犠牲を認めない。そればかりではなく男性は、平常無事の日は女性のささげるさうした自然な愛情を十分に享樂しな

がら、一旦法律とか世間體とかの形式的な束縛をうけると、昨日までの放恣な享樂主義者は、身をひるがへして、今日は方正な君子になりすまそうとするのである。

ノラは我慢すべきでないことを悟つた。そして奇蹟があらはれたら戻つてくることを告げるのである。

ヘルメル その奇蹟の中の奇蹟とはなんだらう。

ノラ それは、あなたとわたしと二人ともに、すっかり變化がおこつて、それこそ――。

ヘルメル 變化がおこつて、それこそ――なんだね。

ノラ それこそわたし達の共同生活が、そのまま夫婦の生活になれる曉でせう。

かうしてノラは、男の手になつた法則と、女の行爲を男の立場から判断する裁判官と原告とを有する男むきにつくられた社會にむかつて、男女が人格的にも獨立し、眞に對等の資格でむすばれる結婚といふものを希つたのである。

與謝野晶子一派の文學活動が、男女學生のあひだにおびたゞしく瀾漫したのも、このイブセンの「人形の家」が日本に紹介された前後のことである。

わがこころ君を戀ふると高ゆくや親もちいさし道もちいさし

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

「不義はお家の御法度」といはれてゐた婦人道德の絆を、大膽にも斷ちきつて歌はれたこの戀愛詩は、まことに、王朝以來日本の女性がはじめて勇敢に戀愛の權利と神聖とを誇つたものとして、注目にあたひする。戀愛萬能のかちどきは、若い男女のころと、感情とをものくるはしくゆさぶつて行つた。當時の男女學生たちは、この「明星派」の本能解放のさけびに、直接か、間接か、耳をかたむけないものはないほどだつたのである。しかし、晶子の歌にあらはれた熱情も、當時の戀愛萬能のさけびも、ともに歴史のある時期の、すなはち、人間個性の解放の途上におけるひ

とつ積極的な姿態として受けとられなければならぬ。

こゝには、愛情の自然な發露をさへぎつた舊いモラルや、觀念への激しい抗議と嘲笑がある。そのいみでは、愛情を無自覺なものから、人間的なものにおしあげようとするたゞかひである。しかし、それは同時に、愛情をあまりにも本能とエゴイズムのなかに閉ぢこめるといふ弱點をもつ。それゆゑに、そのやうな奔放さの増長のはて、傍若無人な享樂のなかに、あるひは、なんら新しきものの、豊富な創造を加へない官能の浪費にをはらざるをえなかつた。たゞ、このやうに奔放な、本能のロマンチックなさけびによつてしか、ふるい觀念や形式から一個の人間としてとびたつことができなかつたのである。

こゝに歴史の制約があり、進歩の意義と價値の歴史性とがある。そのやうな制約と、歴史的意義の認識をふかめないでは、このやうな本能的愛情の燃焼をたゞへた詩の、進歩と退歩のけじめもさだかにときあかさされぬのである。

イブセンの社會劇に前後して、露西亞の作家（トルストイ、ドストエフスキー、ゴリキー）のものが讀まれるやうになり、エレン・ケイ^{*}も紹介された。「ブルー・ストッキング」（青鞥）の組織

されたのもこの直後である。これはあたかもメリー・ウォルストンクラフトが、ルソーらの自由民権論を婦人界に移植したとおなじく、彼女らは一般思想界の個人主義思潮のながれを、女性の立場に適用しながら婦人解放の運動をおこしたのである。

* エレン・ケイは瑞典の母性保護論者（一八四九—一九二六）彼女は、人類の明日への努力とはよき人種の創造にあり、よき人類はよき兒童により、よき兒童はよき母によつて決定されるといひ、母性の擁護に献身した。

平塚明子を中心におこされた「青鞥社」は、いふまでもなく政治運動のための結社ではなく、女流文學雜誌「青鞥」を機關誌とした婦人解放の文藝運動で、平塚明子はその創刊號にかいた「原始女性は太陽であつた」といふ表明が、青鞥同人の主張でもあつたわけである。そして、「本社は女流文學の發達を圖り、各自天賦の特性を發揮せしめて、他日女流の天才を生まむことを目的とす」と、規約の一條にもあるごとく、この一派の運動は、社會運動や政治運動にその重點をおくといふよりは、むしろ、女性の潑刺とした精神の自由と、獨立の意思とを發展せしめることに使命をかんにてゐたのである。

青鞜派の運動は、新聞や雑誌におほくの話題や波瀾をよびおこしたわりに、おもつたほど發展もしなかつたといふのが一致した意見であるが、しかし、その活動が短く、また主張も不徹底だつたとはいへ、この一派の運動は、新しい道徳をうちたてるにふさはしい良識と、勇敢さをもつてゐた。筆に、口に、實踐にともかく、ふるい傳來の秩序を、さめやらぬ一般の空氣にめげず打破していつた。それによつて、いつぱんの女性も漠然とではあるが、この運動の中心の思想を、いちおうはつきりとした理論としてうけとることができた。

「蜃中樓」の敏子が、借物の衣裳で女の権利を主張したときから、すでに二十五年といふ年月がながれてゐる。中島湘煙や影山英子が、女の主權と獨立をさげびながら活動したのは、青鞜の組織される三十餘年もまへのことである。それは、青鞜派の運動が、明治もつひに、をはりぢかくの四十四年に、はじめて組織されたものだからである。

男と女とが人格的にも獨立し、眞に對等の資格で結ばれることをこひねがつてノヲが家を出て

いつたのは一八七八年。すなはち明治十一年である。また、この思想の、日本的な移植が福澤諭吉によつて、「新女大學」となつてあらはれたのが、明治廿二年（一八九九）である。

そして、この思想が、知識婦人の先驅的な實踐のさげびとなつて、「青鞜派」がうごきだしたのは明治のをはり（一九一一）であるといふことをかんがへあはせると、そこには、女の歴史が背負つてゐるその國の生活の特殊性と傳統とが暗示ぶかくかんじられる。

かくて明治期の小説に反映した女性像には、「蜃中樓」の敏子から「魔風戀風」の初野にいたるまで、それぞれの意味で、一定の生活層に生きた女の人生や心情がうかがはれる。

封建社會から根づよくつたはつてきた女の道徳を、そのままうつくしい人生として生きた「十三夜」のお關や、「婦系圖」のお薦。娘としては親のため、嫁いでは良人のため、老いては子の爲めに、おのれの悲喜をこらし、あきらめの人生に殉じていつたお關やお薦。「七去の罪」にさかちひもせず生涯を終へはてたお關にお薦。

* 「七去の罪」は支那の故事にある女の訓へであつて、その中には、七つの教訓が示されてゐる。即ち「女に七去とて惡しき事七つあり。一には舅姑に順はざる女は去るべし。二には、子なき女は去るべ

し。三には、淫亂なれば去るべし。四には、悋氣深ければ去るべし。五には、癩病などの悪しき疾あれば去るべし。六には、多言にして慎しみなく物言ひ悪しきは、親類とも仲悪しくなりて家亂るるものなれば去るべし。七には、物竊む心あるものは去るべし。」

徳川期に完成された婦人道徳は、わけても徳川から明治へかけて女の鑑とまで言はれた貝原益軒の「女大學」などは、この支那の故事に書かれてある「七去の罪」を根本原理としてゐたやうである。また中江藤樹の「鑑草」に説かれてゐる「女訓」も、これとほぼおなじ意味のことが言はれてゐる。

また、「如何なれば斯く枉^{まが}れる世ぞ。身は夫を戀ひ戀ひて、病よりも思に死なむ」とまで、いちづに夫を戀ひしたひながら、「枉^{まが}れる」俗習や掟にそむくこともできずして死んでゆく「不如歸」の浪子。また、物質生活への中途半端な目覺めに、おのれの青春を誤つた「金色夜叉」のお宮。これらの女性たちは、いづれも、おのれに負はされた生活の痛苦に挫折しながら滅びゆかねばならなかつた女たちである。

經濟生活の近代的な展開にともなつて、人心はあるあわただしさのうちに變化しつつあつたけれども、生活の様式とか習慣とかいふやうな、人間生活のうちでもつとも變革することの困難な、

おくれがちな部分が、封建時代のままの状態であつた當時の生活形態のなかで、女たちが、精神的にも肉體的にも自主的にならうとすることは、多くの犠牲を避けることはできなかつたのである。實際からいつて、彼女たちは、環境にたいして自由に振るまふことよりも、まづ自身にたいして自由に行動することが困難であつたのだ。したがつて、徳川期の女性たちが滅びたとおなじ経路で、彼女たちも自己を抛棄しなければならなかつたのである。習俗や制度の複雑な道程で、女性の演じた役割は、社會的にながめるとき、女性の實權のくづれうしなはれるすがたとなつた。しかし、この悲しむべき事實は、社會の變遷に比例して女性のいとふべき傳統ともなつてきてゐるのである。

明治期の小説に反映した女性たちの生活には、何百年もまへからうけわたされてきた道徳のおもさが、開化へとかたむきつつある世相の奥底に、特徴的なかたちで宿されてはゐるが、それにしても「魔風戀風」の初野や妹のお波のやうな、生活と運命とを自己の力できりひらかうとする女性も見いだされないのである。彼女らのたくましい意志と生活力とは、青鞞派の人たちさへなし得なかつた女の獨立の途を、やがてはきりひらき、確信と決意とをもつて、環境

の波浪に立ちむかつて突進するにちがひなかつた。

Ⅲ 明治女性の環境と輿論

1.

「戀愛は人生の秘鑰なり。戀愛ありて後、人生あり。戀愛を抽き去りたらむには、人生何の色味があらむ。……」

これは、明治浪漫主義の先驅者、北村透谷によつて書かれた言葉である。かれの有名な論文「厭世詩家と女性」の冒頭の言葉である。

透谷が、このやうに戀愛のあたらしい意義と、その人生的價値を聲はりあげて鼓吹し、かすかずの論文で、ふるい觀念のすべてにむかつて挑戦したのは、明治廿五、六年、すなはち、日清戦争の直前であつた。そして、女性と戀愛の尊重と、その價値をひろく人生の課題としてとらへ、それをあたらしい時代の夜明けの言葉として投げだした文學者は、おそらく透谷をもつて嚆矢と

するのではあるまいか。おほくの政治小説、その他において、自由平等思想の勃興にとまひ、男女同権の要求や、自覚はとなへられたけれども、それはおほく、西歐思潮の直輸入による政治的な感化の程度にすぎなかつた。

透谷は、いふまでもなく、戀愛の價值や、女性の尊重を、自由平等觀の立場から説いたのではない。彼は、當時の社會において、戀愛が色慾としてみだりに口にすることをはばかるやうな生理的な現象としてしか理解されてゐないことに挑戦した。あるひは、當時の文學が戀愛の眞實を描くよりも、好色を描くことにふけるのをはげしく攻撃した。

つまり、戀愛を野卑なものとして眉をひそめる社會的傾向や、遊里における女性の人工的な風俗や、好色的な面を享樂の立場から描く小説をつよく否定したのである。

——抑も戀愛は凡ての初めなり。——と、透谷は書いた。親子の愛なり朋友の愛に至るまで凡そ愛情の名を荷ふべき者にして戀愛の根基より起らざるものはなし。進んで上天に達すべき淨愛までもこの戀愛と關聯すること多く、人間の運命の主要なる部分までもこの男女の戀愛に因縁すること少なからず。——當時の有名な小説家紅葉、露伴が、戀愛を好色とあやまり、あるひは、

遊里の傳統からうまれた風俗を享樂的に描くことを非難し、そのやうな風潮が、江戸時代の頽廢した文化のなかに咲きみだれた元祿文學から尾をひいて傳はつたものであることを指摘して、透谷は新時代のために憤怒の拳を握つた。そして、以上の章句は、そのなかの一節である。色慾の形容以外にかんがへることのでなかつた當時のいつぱん的な戀愛觀に對立して、透谷のかんがへた戀愛が、いかにひろい人生的價值とのかゝりはりをふかくしてゐるか。彼にとつて、戀愛は、たんに男女のあひだにかはされる情熱のたかまりのみではなかつた。戀愛は、かれにとつて宇宙の元素であり、至高な愛情のすべての根源であつた。いはば、彼は、戀愛の感情のなかに、宇宙的な生命の昂揚をよみ、人間のあらゆる愛情との共同性をながめたのである。このやうな戀愛の理解は、當時にあつて眼をみはる革新の思想であつたのみならず、その後の、そして現代におよんで、いまだその主張の生命は枯れ凋んだものとはいへない。

透谷は、かやうに、戀愛感情の價值をおほく人間の問題としてとらへ、それを生理的な現象としてさげすむ傾向に抗議した。「プラトン……の、言へりし如く戀愛は地下のものにはあらざるなり、天上より地下に降りたる神使の如きものなることを記憶せよ。……」

と、いふ主張は、いかにかれが、戀愛を崇高なものとして幻想したかをつたへる。色慾の卑しむべき表現としてしかかかんがへなかつた一般の風潮にはげしい憤りをおぼえた彼が、戀愛を人間的、現實的なものとしてではなく、神祕的な幻影のなかにうけとらざるをえなかつたのも、無理ならぬことであらう。彼は、そのやうに戀愛を、人間の本能に根ざすものとしては、はつきりとらへなかつたけれども、戀愛が自然の感情であること、なんら卑下すべきものでないこと、そして、その感情はいかにしても抑止されず、變形できぬものであることをみとめてゐた。それはつぎのやうな言葉となつて奔りでてゐる。戀愛の感情をたとへてみれば……野外に逍遙して芬郁たる花香をかぐとき其の花の在るところに至らんと願ふは自然の情なり、其花に達する時に之を摘み取りて腕に挿まんとするも亦自然の情なり、この情は底なき湖の如くに一種の自然界の元素と呼ぶより外はなかるべし。之を打つとも破るべからず、之を鑄るとも形すべからず、之を抜き去らんとするも能くすべからず、宇宙の存すると共に存する一種の靈界の原素にあらずして何ぞや。……戀愛は、人間の自然の感情のうるはしい流露であつて、その感情は底なき湖のごとく深く、いかにそれを叩きのめさうとしても不可能な根強さをもつものであると叫んでゐる。透谷の

叫びが、いかにげしく挑戰的であつたか、しかも、それを卑下し、抑止し、侮蔑する傳統にむかつていかにつよく抗議したかは、當時の社會觀念のさめやらぬ惰眠に起因してゐる。

2.

明治開化が、日本の國內的な革新の自覺であつたと同時に、國家の世界にたいする覺醒でもあつたから、當然歐米先進國の制度、文化の攝取によつて、我國の發展を刺戟し、鼓舞しなければならなかつた。したがつて、女性の世界にも歐化主義の侵入はまぬかれなかつた。教育の普及は一そうそれを助長した。しかし、女性の歐化的な傾向は、おほくは風俗の模倣や、わづかの先覺的な女性の政治的な氣焰となつて表現されたにすぎなかつた。

いつばん女性の近代的な自覺は、はるかにおくれ、迂餘曲折した複雑な過程をたどらなければならなかつた。いつばんの社會道徳においても、封建的な弊風は、歐化の疾風になんのかゝはりもなく、風俗はまげから束髪にかはつても、因襲的な女性觀は、ますます縮められた殻のなかに

おしこめられるかにみえた。

明治初年における同権論の主張や、風俗の歐化は、ごく一部の先進的な女性による衝動的な表現ではあつた。しかし、その表現は、日本の革新が、女性の地位の向上や、人格の尊重によつてさらに充實するといふかんがへから出發してゐた。だが、轉換期のつねとして、そのほんらいの意義をとびこえて、風俗の壞亂となり、女政客のあられない腕まくり姿は、ひとびとの眉をひそめさせる傾向をもみちびいたであらう。そして、その先覺的な女性の近代的な自覺が、まだ充分に實質的な建設の方向にすまなまへに、すなはち、明治二十年頃を境として、國粹論の擡頭となり、女性の問題のみならず、すべての文化に歐化の抑制が主張された。その抑制の聲とともに、舊來の傳統はふたたびよみがへり、したがつて婦人運動も消滅しさつた。しかし、初期の衝動的な運動は、さういふ傳統の復活がなくとも、しだいに衰微せざるをえないやうな矛盾や、直輸入の弱點をもつてゐた。西洋に於ても、それは母性擁護の運動に變化せざるをえなかつた。わが國では、同権の主張や、婦人參政權運動が成功しなかつただけでなく、廢娼進動さへかへりみられなかつた。しかし、明治十七八年から二十年ごろにかけての、歐化主義の絶頂をきはめた

鹿鳴館時代の、男女同権の思潮は、そのまゝ延長されなかつたけれども、國運の發展にともなつて男女教育の均等といふかたちでひきつがれ、下田歌子、杉本萩江、戸田極子、鷲山(吉岡)彌生等の運動となつたが、それも氣運熱せず成功するにいたらなかつた。

いつばう、現實社會の狀態も、同権はおろか、女性の人間*的な愛情の自然を尊ぶ傾向さへさへぎられてゐた。透谷の憤怒はそこから出發した。じつと明治の革新的人物、政治的傑物さへ傾斜の巷に政治を談じ、花柳の世界からよき伴侶をえらぶ傾向さへあつた。と、いふのは、當時における傳統文化の粹がそのやうな世界にもつとも絢爛たる姿をつたへてゐたからであり、活動する男性の社交の場所にもとほしく、よき伴侶をえらぶ機會にもめぐまれなかつたからである。ともかく、かやうにして、明治時代における花柳の世界に生きた女性が、むしろあらゆる點で時代を先驅しつゝあるかにさへおもはれ、いつばん女性の風俗がそれを模倣する傾向さへあらはれたのである。それは古代ギリシヤの昔名望ある婦人が賣笑婦の世界からあらはれ、傑物の妻が歴史にあらはれず、ときの偉大な人物と交際し、それと愛情をふかめた娼婦が有名婦人としてつたへられてゐると類似する現象かも知れない。いつばん婦人の教養がたかまらず、たえず屋内にとち

こめられてその自由な心身の發達をさへぎつた慣習が、かへつて娼婦となつた女性を競争の意識から文化的にも向上させ、愛情の眞實にめざめる機會をもあたへたのである。彼女らの世界は人工的、背德的ではあつたが、女性の人間的な自然の能力を、いつぱんの婦人より自由に伸張せうる可能性があつた。女性の教養と愛情の自然を、發展させる方向になかつた當時の社會傾向が、娼婦の不自然な技術的な愛情にさへ男性をひきさらふ機縁をあたへたのである。

* 廢娼の運動は、明治五年から全国的におこつてゐたうへ、男女交際の自由もとなへられてゐたけれども、それは特殊な上流の一部のものに限られて、いつぱんのひとびとにはなんの影響もなく、當時の書生の戀愛の唯一の對象が娼妓しかなかつたことが、坪内逍遙の「當世書生氣質」(十八年)に及びだされてゐる。

このやうな事情からかんがへても、わが國に流れた歐化思想や、開化の論理が、いかに、現實改造の實踐力をもたなかつたかは明瞭である。

明治の自然主義以前の文學が愛情を好色の世界にぬりこめたのも、前述のやうに、いつぱんの

愛情が人間的な自然の成熟をなしえなかつたからである。愛情の自然と、女性の人間的な成長がはばまれたところに、同權思想の輸入は、あまりにも突飛な逆立とならざるをえなかつたわけである、同權的主張のまへに、その同權的基礎をかめる、女性の人間的な成長がかんがへられねばならなかつた。しかし、わが國では、徳川封建制のながい鎖國的な壓迫のなかで、婦人の自然な成長の氣運がとざされ、あわたしく維新の御代となつた。あらゆる革新の主張と實踐のながれに沿ふて婦人の問題も俎上にのぼり、西洋の模倣にはしつたのもむりならぬことである。だが、そのむりならぬ婦人運動の要求は、うけいられる地盤も背景ももたなかつたのである。

なにより、女性の愛情を自然に開花させ、その開花をうながす教養と、知性の發達がなければならなかつた。透谷の戀愛神聖論は、もともとプラトニックな愛情の鼓吹ではあつたが、愛情の偉大な人間的價値と、その自然性を抑壓すれば崇高な愛情の本質はゆがめられ、肉慾的な本能の墮落におちいることを暗示し、口をきはめて肉體の純潔を説き、好色的な戀愛文學を非難した。しかし、透谷のといふ女性の愛情にたいする要望は、具體的にはどのやうに展開したであらうか。教育上では、良妻賢母主義^{*}がとなへられたが、良妻となり、賢母となるためには、女性における

愛情の自然の成熟と生物的な愛情を越えた人間的な知性の擴大がなければならぬ。だが、わが國の婦人教育は良妻となり、賢母となるための人間愛情の自然的な成長をさへぎり、むしろ、それを人工的に表現する方向さへとられたといへるであらう。愛情の理性よりも、むしろ、夫婦隨の名によつて愛情の盲目がとかれた。このやうに愛情を卑下し、その發展の自然な成長への教養を怠つたはて、過去にみける婦人のかずかずの犠牲はまぬかれなかつた。たとへば、この現象のあらはれは、明治から大正にかけて、婦人雑誌の口繪に花柳界の名妓のすがたがたえず、その紹介がたちきれなかつたことによつても反映されてゐる。あるひは、大正、昭和にかけて、夫婦和合の秘訣が、婦人雑誌の主要なテーマであり、毎月くりかへされるありさまだつたことにも表現されてゐる。教育家さへも、夫婦の和合には、妻が花柳界の女性の表現に注目することを怠るなど説いた。明治、大正時代において、わが國の醇風美俗が、いかにいつぱんにまもられがたく、その破綻と犠牲の實例をおほくもつか、婦人の歴史をすこしでもかへりみるひとの嘆きのひとつであらう。

* 良妻賢母主義は、女性の個人思想の抑制としてその折中主義としてあらはれた。新時代の家庭は、も

はや傳統的な盲目の服従では支へがたく、ある程度の夫と妻との間の理解と協力とを必要としたからであつた。

しかし、この主義は、ひとによつていろいろにとかれ、舊い傳統と相へだてるところ少ない説も多かつた。ともかく、そこには婦人の消極的な役割しかとかれず、やゝもすれば家庭中心の個人主義に陥らせる危険さへあつた。缺陷は、それが形式的であつたこと、その基礎を支へるたゞしい愛情の展開を遮つたことである。

たとへば、婦人雑誌が、つねに夫婦和合の秘訣をかゝげたのは、いつぱんが、それを要求したからにちがひない。その悪弊は、單に婦人の個人主義の破綻とばかりはいへない。男性のエゴイズムが、女性の人間性を理解し成熟させえなかつたゆゑに、あるひは、男性がリベリズムのなかにさまよひでながら、その伴侶である女性の個性的な成長をこゝろよくながめえなかつたからでもあつた。この事情は、洋の東西をとはないのである。たゞ、自由主義的ヨーロッパ諸國や、アメリカにおいて、女性の形式的な自由がゆるされ、女尊男卑の弊風にさへ増長したとはいへ、それはたんに、表面的な男性いつぱんの功利的な讓歩にとどまり、女性自身の同權的基礎は、じつ

に脆弱だつたのである。と、ともに、愛情は、たがひにエゴイズムのせまい限界において妥協し、和合はするが、愛情の全人間的な發展の共同的な成熟の基礎はきはめて薄弱なものであつた。そして、ルネッサンス的な愛情の自然の恢復、原始時代における素朴な共同愛の復活が、こんにちの世界全般において要求されてゐるわけである。

わが國の、かやうな複雑な發展の過程で、明治の女性がたゞかひとらなければならなかつたのは、透谷のさす愛情の人間の尊重と、その自然な成長への可能性であつた。それは同時に、良妻たり、賢母たりうるもつとも重要な條件でさへあつた。しかし、先進女性は、形式的な自由の獲得にいそぎ、教育は、反動的に、愛情の自由と、自由な愛情の發展とを同一視しながら、良妻賢母の基礎の形成をわすれたのである。いはば、そのどちらにおいても、愛情の人間の昂揚と、伸張の努力をなほざりにして、みづからの目標を根柢から充實させえなかつたのである。

逆上の歐米の崇拜と、その模倣の明治初年から大正にかけての風潮といふも、いちめんわが國の文化發展の急激な疾走のための犠牲であり、過失ではあつたが、その過失と犠牲が明治から大正にかけてたえずひきおこされ、その禍根がいつあとをたゞれるとも知れなかつたといふふ

うな形勢は、女性や愛情の問題が、あまりにも生理的に解かれ、あまりにも形式的にみちびかれただからである。愛情の精神的な、理性的な發展がうながされなかつたための犠牲は、「金色夜叉」の、それとなつてあらはれてゐる。彼女がはじめ、精神的な愛情を唯物的な慾望にすりかへたのは、愛情そのものがまだ未熟だつたための、そして、自主的な個性なきゆゑの、利那的な育動にすぎなかつた。彼女が貫一とわかれて富山へ嫁したのははつきり、意識した計量のするとはいはれない。愛情のなにかを知らないまへに、唯物的な慾求にさそはれて、おのれを破滅の淵にひき入れたのである。彼女の、金と愛との二重の分裂とは、むしろ、良妻賢母となりうるに必要な、愛情の稀薄からうながされたのだ。それゆゑに、彼女は金錢慾の破滅といふより、愛情の精神的未熟の犠牲なのである。それにくらべて、「婦系圖」のお蔭は、より愛情のふくよかな成熟を表現してゐる。彼女が傾斜の巷にそだつたからである。そこには、金錢による服従の苦惱はあつても、愛情の自由と成熟が不自然ながら培はれる機縁をもつてゐた。そして、彼女は、愛情の自主的なねがひをたわめ、それをたへしのぶところに情熱の奔放な充實をかんじえたのである。ともかく、愛情の心理的、浪漫的燃焼にはひるむところがなかつた。そして、また、彼女の、社會

の掟にたいする服従といひ、謙讓といふも、たんなる盲従といふのではなく、愛人早瀬の、社会的成長をおもふ献身的愛情の理解からうまれたといふのも過言ではあるまい。つまり、彼女は、すくなくとも、愛情の理性を、愛人に殉ずるの道にみいだしたのである。

3.

明治後期における小説の女性、たとへば「虞美人草」の藤尾を典型とするあたらしい教養の破滅は、新時代の常套的な敗北ではあるが、そこにははじめから愛情の人間的な発動がかんじられない。つまり、愛情の人間的な傳統なき故の、他力本願的な過失さへうかがへるのではないか。愛情の自然な、そしてうるほひある豊穰な傳統と秩序とが、彼女の性格にねづいてゐたならば、流行の「淫説」となり、男性をエゴイズム追求の素材とみるやうな傾向にはながされなかつた筈である。藤尾の悲劇は、「金色夜叉」の官の悲劇に通じてゐる。つまり彼女らの愛情に知性の洗練なく、人間的な愛情の根柢があさく、眞のいみの愛情の個性が芽吹かなかつたからである。愛情の満足

を、自己の創造によるよりも、他にもとめ、他にすぐることによつてのみみだし、埋めるといふ傳統が、いちどかるはずみな好奇心にとらはれるとどういふ利那的破滅をもたらすかを暗示するものだ。

「煤煙」の朋子には愛情の非人間性が、極度に近代化されたかたちであらはれる。彼女の心理の二重の分裂といひ、愛と憎悪のたえざる感情的なもつれといひ、それは愛情の人間的な目標と理性の彷徨をしめす以外のものではない。あたらしい衝動にたわいなく身をゆだね、偶然の出来ごころによつて、生涯の破滅にみちびかれるといふのは、人間的自主性のもろさ故である。過失や失敗は、つぎの成長の榮養とならなければならぬ。偶然のでき心は、理性によつてその眞偽がたしかめられねばならぬ。

「地獄の花」の園子は、みづからの肉體を犠牲にして愛情の眞實にちかづかねばならなかつた。「魔風戀風」の初野は、生功慾とその生活との葛藤から、女性の人間的獨立への自覺のみちをたどつた。女性が、たゞしい自覺にたどりつくためには、いかに他力本願的な、自己目標の喪失といふことがわづらひの根據であつたか。娘が、妻となり、母となつて、夫や、家や、國家や社會

に貢献するためのみちも、精神の自律的な發展と、個性の人間の充實なくしては完璧ではなかつたのである。

女性を従屬的なまなこでながめ、生理的な役割だけに閉ぢこめては、女性の天職をはたす機能それ自身も、萎縮せざるをえなかつたのである。いはば、稼してはひたすら家風にしたがひ、夫の命にひれふすのみでは、家庭の平和はたもたれなかつた。

結婚の愛情は、いつばんに妻と夫との知能的なへだたりや、妻の愛情の消極的な受動性にたいする夫の不満からくづれた。それは、愛情そのものを下劣なものとしてしかながめえず、女性の知能的發展を異端視した俗習と、眞實の愛情を自己形成するみちがなんらあたへられなかつた女性の傳統に由來する。このやうな女性の悲劇は、もちろん、女性だけのものにはをばらなかつた。男性もまた、女性の受動的な愛情にのみ理想をもとめ、その自由な自己創造を無視した結果は、家庭の無味や寂寞となつて逆襲されたのである。

ふりかへつてみれば、明治時代の小説にあらはれた婦人の悲劇も、習俗に對立してめばえた個人主義や、物質主義の嘆きといふよりは、むしろ、さういふ要求をあまりにも表面的な衝動や、形

式的な要求にみちびかさるをえなかつた事情にふかくかゝはるのではないか。早急な、不自然な自覺と、その表現におもむかさるをえなかつたのは、愛情の人間的な形成の環境が熟さないうちに、はやくも近代的なエゴイズムや、物質崇拜の傾向にとらはれたからである。はじめにかゝげた、透谷の戀愛神聖論が、いかに先驅的なものであり、しかも、人間愛情の基本の充實に必要なさけびであつたか、そのさけびの生命が、明治を越えた大正の時代にも枯れしほむことがなかつたといふことは注目されねばならない。そこに、わが國における女性のたどつた致命的な精神の弱點が、なんら内側から鍛へられ教化される機縁にめぐまれなかつたことの暗示がある。新しく装はれた思想や、風俗の波をうけるたびに、たわいなく自己を喪失して行つたものは、女性ばかりではなく、インテリ全體の日本の特殊性でさへあつた。自己の功利にのみとらはれるものが、つひにみづからの個性を失ふとおなじく、個性の自律的な形成なきものは、環境と運命におしながされて、自己を失はざるをえない。しかし、歴史、そして國家や社會は、寧日なくつぎの段階へと發展をやめない。その發展の過程には、受動的だつた個人も、いつか、積極的に行動しなければならぬ危機をかんずる。そして、事實、明治文學にあらはれた受動的な他力本願の世界をさ

まよひつゞけた女性も、明治の後期になると、自己の生活と愛情とを、おのれの獨自な努力によつて開拓しようといふ息吹きをつたへるのである。このやうな生活や愛情の認識と、獨立へのあゆみも、たとへば、「魔風戀風」の世界からうかがはれるやうに、リベラリズムの誘惑からではなかつた。女性の社會的進出の可能、それにたきつけられた成功熱が、女性を家庭の温室から社會の荒波にひきいれ、試練はじめたからである。生活の知慧が、いかにふかく人間の正統な本質的な形成につくすものであるか、それにくらぶれば、うけうりの思想や、つけ焼刃の教養が、いかにかなく机上の空論にをはり、いかに無惨な自己犠牲の結果をもたらしたか。「虞美人草」の藤尾と、「魔風戀風」の初枝とは、おなじ犠牲にたふれながらも、その自覺と、悲劇の性格においては、まつたく對蹠的である。ともに、歴史の時代的特質を表現しながらも、いつばうは教養の淺薄な自負といふ否定の方向にみづからを滅ぼし、他方は、つぎの發展の系譜につらなる犠牲に殉じた。

西歐思想の模倣の遊戯とはべつに、女性の人間的成長の可能性は、その社會的進出がうながされ、獨立の必要をせまる環境がもたらされたときに、はじめて實質的に芽吹いたのである。しか

し、その芽吹きははなはだもろく、わづかな霜にも傷つかねばならなかつたことはいふまでもない。とはいへ、さういふ成長のなかでみづからを充實させえた女性も稀有とはいはれないであらう。たゞ、そのやうな成長の順調なすがたは、文學的に表現されなかつたといふことは事實であり、そして一般的には、女性の人間的充實が未熟のまま殉ずるのみちにあつたのである。いはば、女性の全腕力をふるはせるやうな社會的氣運は、容易にもたらされなかつた。女性をして、家のなかに、戸外に、性的な差別なく活動せしめるやうな機運の到來は、劃期的には事變以後であらう。まことに、事變は、そして總力戰的體制は、女性の國家的役割のおもさとともに、その人間的成長の機會をもめぐんだのである。と、すれば、明治女性の成長に飢ゑたあこがれの夢は、いまこそはじめ、實踐的な可能の世界に現實化されたといふべきである。可能はたゞ、おのこの緊張と努力に、その國民的個性の充實にふかくかゝはるのである。

第二章 解放の悲劇から生活愛へ（大正期）

この章の主要な作品と作者

藤森成吉「何が彼女をさうさせたか」

徳田秋聲「あらくれ」

菊池 寛「眞珠夫人」

水上瀧太郎「律子と瑞枝」

永井荷風「つゆのあとさき」

I 教養の悲劇

1.

明治年代の小説に反映した女性の倫理、愛情の展開、生活態度を、大正期の小説にあらはれる女主人公たちのそれに比較すると、そこにはやはり、種々の相異や懸隔がうかがはれる。しかも、興味のあることは、たんに生活條件がかはつてきたといふ理由からだけでなく、その感情や心理や気分にも、明治年代の女性に見られない一面が形成されつつあるやうにかんがへられる。

それは、生活にたいする考へかたや、判断のしかたがちがつてきてゐることを意味するわけだが、事實、ものにたいする處理のしかたにも、女の立場からの自覺がいつそうつよく意識されてゐて、「虞美人草」の藤尾や、「浮雲^{*}」のお勢がとつたやうな、あの教養を鼻にかけておたくとりすます態度などは、いささかもみうけられない。戀愛感情にも、透谷に代表されたあの浪

曼性はなくなり、娘である自分が、妻である自分が、母である自分が、それぞれ功利的に女の立場から反省されはじめてきたことは注目にあたひする。

いふまでもなくこれは、庶民生活がより社会的な性質を帯びてきたことを意味するし、また作家自身が、庶民の日常や心理に、人間的な感動を示しはじめたことの反證ともかんがへられる。

*「浮雲」(二葉亭四迷)は、わが國の寫實主義作家の先驅として有名である。ここに現はれるお勢は、近代的な思潮の風俗にあこがれる女性として母親と對立的に描かれてゐる。

「浮雲」は、文三といふ主人公のインテリ的な實行力の弱さや、意識過剰を描いたものだが、お勢も、開化期の尖端を泳ぐ潑刺たる女性としてあらはれる。しかし、やはり、當時の思潮に感染されただけの、ほんたうの自覺でないから、なんとなく、教養を鼻にかけ、流行にかぶれた姿であらはれる。たとへば、親より大切なものがある、それは「人ぢやないの。アノ眞理」などとうそぶく風に描かれてゐる。しかし、明治の尖端を走つた女性の、文學的反映として、見脱しがたいものであることは疑ひなし。

また事實、大正期にはいる頃から國民生活の構造も、日露戦争を一の階梯としてあたらしく形

成されつつあつたことも事實なのである。大正三年の日獨宣戰の布告は、かかるさ中にふりかかつてきた歐洲戰亂の餘波でもあつた。もちろん日獨戦争とはいつても、青島攻撃だけのいくさであつてみれば、日露戦争當時のやうな衝撃や、緊張は國民にあたへなかつたかも知れぬが、それにしても他の交戦國とちがつて、經濟關係におほきい變動がもたらされたことは事實であらう。いはゆる船成金や鐵成金の簇生がそれである。

國家經濟の膨脹時代として、大正六年から八年へかけての社會情勢は、まったく過去に見出しがたい社會現象を現出するにいたつた。炭礦と一部重工業のほか、あまり大規模な組織をもたなかつた當時の一般産業も、金融關係の活潑なうごきにつれて、組織化された工場や、會社を陸續と生みはじめた。高度の技術と、強力な生産力があわたくしく要望されてきた。交通機關の完備にしたがつて、貿易方面もいつそう殷賑し、國際關係もあたらしい段階に立たされたのである。

女性の職業戦線への進出は、かうした一般情勢の機運にうながされて、はじめて顯著な展開をしめすやうになつたのである。水上瀧太郎の諸作にゑがかれる女事務員たちの生活は、この時代

の女性の自覺を反映してゐる點で、また自覺した女性が經濟的に獨立することがいかに困難であるかをもの語つてゐる點で、一定の生活層に生きる女の相貌をみごとに活寫してゐる。「律子と瑞枝」は、この間の消息をつたへるすぐれた作品の一つであることに疑ひはあるまい。

2.

律子と瑞枝はおなじ下宿に寝起きしながら會社に勤めてゐたが、律子が病氣で床に臥すやうになつてから、瑞枝は収入の多い別の會社へ住みかへて律子の醫者代やら下宿の拂ひを援助してゐるが、金のいるところから男の誘惑にすすると引込まれ、酒臭い息を吐きながら夜更けになつて戻ることなどもあるやうになる。人が變つたやうにけばけばしい化粧や装ひを好むやうになつた瑞枝を見て、律子姉弟は心を痛めるが、依然として瑞枝はあらためる風もない。

さうかうするうちに、律子は病氣缺勤のゆゑで、會社を解雇される。収入の途を斷られた律子は、からだがもとに恢復するのをまつて懸命に就職口をさがすが、求人廣告を出してゐる會社は、

どれもこれもがインチキ會社ばかりで、なかなか適當なつとめ先がない。そんな折、自動車の事故に遭つて瑞枝が負傷する。律子は弟と協力して入院料を工面するが、傷が癒えて瑞枝が下宿にかへつてくる頃になつても、律子の就職は決まらない。下宿の主婦はとどこほつてゐる下宿代を口ぎたなく請求する。しかし、年のゆかない賢一（律子の弟）の収入ではどうにもならない。

たまたま、以前勤めてゐた會社の上役の竹村といふ男が訪ねてくる。竹村は獨身で、まへから律子を妻に欲しがつてゐた男である。好かぬ男ではあるが、事情が事情ゆゑ、律子は竹村に金の無心を頼んでみる。すると彼は、承諾するかはりに結婚してはくれないかといふのである。だが律子は結婚はいやだといふ。お金も拜借するだけで結構だといふ。

律子 第一あたたくしは、あなたに對して少しも戀を感じてはをりませんの。たゞとりひきを致さうかと思ひましてねえ。

竹村 冗談はよしませう。僕は實際眞剣であなたに結婚を申込んだのですから、

律子 あたしこそ眞剣なのです。

竹村 今のお話はお話として、僕は決して代償を求めやうとは思ひません。しかし、兎に角金策して見ませう。出来るか出来ないか、いづれあらためて伺ひます。

かうして竹村はすこすこ歸つて行つたが、今まで律子の病床を見舞つた折、金が入用なら用立てたいむねをなんとか話したにもかかはらず、一度として彼女は、その好意をうけようとしたことはない。彼にしてみれば、むしろ彼女のかたくなさを腹だたく思つてゐたのであるが、その律子が金の代償にからだを提供しようといふのである。かげできいてゐた瑞枝も、律子の日常や性格を知つてゐるだけに、ちよつと驚かされたが、やはり本心から言つたのではあるまいと思つた。五百圓だの千圓などといふ金が、一介のサラリーマンにとつてどのくらゐ大きい負擔になるかぐらゐは知らぬことはない。それを平氣で口にするのは、要するに追返したい腹なのだ。瑞枝はさうかんがへて「あんな事いつて追拂はれては堪らないわね」と笑つたが、律子は追拂ふつもりでいつたのではないといふ。「あたしほんとに自分をくれてやらうかと思つたの——でも、女にはからだの外に提供するものは何もないのだから——腕力があれば土方にもなれるけれど、あ

たし達では駄目だし、あたし達の持つてゐる才能なら、男の方が餘計もつてゐるに違ひない。どろしてもせつばつまつた場合に、女がお金を得る道はほかにはないのですから——。」かうして彼女は、瑞枝がかつて落ちこんだと同様の経路に、やがて自分も落ちこむであらうことを感ずる。社会的に酬ひられることのすくない女性の不利な立場から脱れるためには、女は、それがあつたことで美しいとも言はれてきた自然的素質や生命の誇りを、感謝されることもなく捨て去らねばならなかつたのである。男が喜んだとおなじ生の喜びを享受するためには、女は、美徳とされる肉體の純潔や精神的誇りをも犠牲に供しなければならなかつたのである。それが證據には、男に讃へられてきた女の傳説には、財産と家系を重んじる男の社會に讃へられてきた女の傳統には、いのちを賭けて肉體の純潔をまもりつづけた健氣な女の意志が語りつたへられてゐるのではないか。

家族といふものが父權とともに形成されはじめたそもその昔から、詳しくいふならば、人類がはじめて經濟生活を営んだ原始共同體の時代が崩壊しはじめた當初から、女の獨立は、社會的にも經濟的にも、天上の理想として押しつけられてゐた有様である。それは古代から中世へ、中世からやがて近世へと、歴史變遷の過程に沿つて社會的には變化を遂げてきたけれど、しかし、依然として男の支配をしりぞけるほどの強固な生活地盤をあたへられてゐなかつたのは事實である。

日本における女の生活の變遷過程にも、それは特徴的なすがたで描かれてゐる。天真な心で生活をたのしんだ萬葉時代以後、女性たちは、社會的にも道德的にも重くさまたげられたるから、三界とか三從の教へがたはり、道德的にも女はさうした忍苦の面へ背をむけて生きるものがゆるされなくなつた。訓へにしたがつて生きる女たちの暗い面貌は、江戸時代の庶民文學にも反映し、「心中天の綱島」(近松)の小春のやうな女性ともなつてわれわれの悲痛を焚きつけるのである。だがこれは明治期の小説にも、この種の女性はゑがかれてゐる。たとへば、樋口一

葉や尾崎紅葉の諸作にゑがかれる女性がさうであり、徳富蘆花の「不如歸」にしても、泉鏡花の「婦系圖」、岩野泡鳴の「毒藥女」、二葉亭四迷の「其面影」などすべてに、また、いはゆる「新しい型」の女の典型として描かれた「虞美人草」の小夜子にしても、「煤煙」の隅江にしても、いづれも女であることの誇りを失ふといふ側面で、美しく滅びた女性たちである。

彼女らの弱さを、あるものは氣質や性格のゆるだとも言つてゐる。たしかに、氣質や性格もあるだらう。が、しかし、そのやうな氣質や性格を、いつそう固定させ、人生的信條にまではぐくんでいつた境遇なり社會環境といふものは、いつたい如何なる繋がりて説明されたいのであらう。

言ふまでもなく人間は、あたへられた境遇なり、社會的環境なりをそれぞれの生きかたで生きてゐる。かうしたひとりびとりの生きかたは、氣質や性格のちがひで、それぞれに異つてゐるし、また才能や個性の相異が同一ではない。同一ではないけれど、しかし、ひとりの人間の歴史に照しあはせてもわかるやうに、たんなる性格が、その人間の生涯を先天的に約束してゆくものでないことは事實であらう。同時にまた、境遇なり環境なりが、個々の人生や運命を絶對的に決定す